

南山大学大学院人間文化研究科提出博士論文

日本語における「夕」と「テイル」の対立
- 意味論・語用論からの考察 -

人間文化研究科言語科学専攻

D2009HL004

都築 鉄平

指導教員 阿部 泰明 教授

.....

2014年 1月 20日 提出

目 次

| | |
|--|-----|
| 要旨 | i |
| 謝辞 | ii |
| 目次 | iii |
| 第1章 本研究の意義及び本論文の構成 | 1 |
| 1.1. 現象 | 1 |
| 1.2. 本研究の取り組み | 2 |
| 1.3. 構成 | 3 |
| 第2章 「タ」及び「テイ」の対立構造と時間関係算定プロセス | 5 |
| 2.1. 背景 | 5 |
| 2.2. 「テイ」及び「タ」の概観 | 7 |
| 2.3. 「テイ」及び「タ」に関する疑問 | 19 |
| 2.4. 時間関係算定プロセスによるテンス・アスペクト記述 | 20 |
| 2.5. まとめ | 49 |
| 第3章 間接的把握によるtの設定 | 52 |
| 3.1. 本章について | 52 |
| 3.2. 「記録・痕跡による把握」とtの設定 | 53 |
| 3.3. 「様子からの把握」とtの設定 | 71 |
| 3.4. 間接的把握の原則 | 85 |
| 第4章 情報の有意性によるtの設定(状態相のテンス) | 88 |
| 4.1. 背景 | 88 |
| 4.2. 先行研究 | 90 |
| 4.3. 分析 | 105 |
| 4.4. まとめ | 139 |
| 第5章 おわりに | 141 |
| 5.1. まとめ | 141 |
| 5.2. アスペクト的な「テイ」と非アスペクト的な「テイ」の接点、テンス的な「タ」 と非テンス的な「タ」の接点 | 142 |
| 5.3. 今後の課題 | 143 |
| 参考文献 | 144 |

第1章

本研究の意義及び本論文の構成

1.1. 現象

日本語の「テイ」と「タ」はアスペクトやテンスといった時間概念を表す形式として知られている。これらの形式がどのような時間概念を表すかについては古くから研究がなされてきているが、一般的に、「テイ」の有無が「非完結相/完結相」の対立や「完了/非完了」の対立を表し、「タ」の有無が「過去/非過去」の対立を表すとされている。

ただ、「テイ」や「タ」については、単にこれらがどのような時間概念を表すかを分析しただけでは、十分でない面がある。なぜなら、あるひとつの場面を、異なる時間概念を表す形式で叙述し得る場合が珍しくないからである。

例えば、「(次郎が)言語学概論のテキストを買う」という出来事があったことを表す文として、(1)のaもbも適切である。

- (1) a. 次郎は言語学概論のテキストを買った。(過去)
- b. 次郎は言語学概論のテキストを買っていた。(非完結相過去)

しかし、これは、このような出来事があった時、常にどちらを使用しても構わないということを意味するものではない。例えば、(2)のような場合、「テイ」ありの形でなら自然に言えるが、なしの形だと不自然になるということがある。

- (2) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は前日、次郎が言語学概論のテキストをもってレジに並んでいるのを見た。)
- 花子：次郎言語学概論のテキスト買ったのかな？
- 太郎：うん、{??買った/買ってた}よ。

また、このような「テイ」は主語が一人称の場合には使いにくいということもある。(3)に見るように、主語が話者自身(太郎)である場合には、「テイ」ありの形は不自然になる。

- (3) 花子：太郎、言語学概論のテキスト買った？
- 太郎：うん、{買った/??買ってた}よ。

このように、非完結相過去(「買っていた」)と完結相過去(「買った」)のどちらで言っても真になるような場合であっても、状況によってはどちらか片方しか使用できないという場合が存在する。

このような面は、完了の「テイ」についても同様に存在する。例えば、「(太郎が)一昨日薬を飲む」という出来事があったことを表す文として、(4)のaもbも適切である。aは過

去(非完了)で、bは現在完了である。

- (4) a. 太郎は一昨日薬を飲んだ。(過去)
b. 太郎は一昨日薬を飲んでいる。(現在完了)

これについても、状況によって、片方しか使用しにくいという場合があり得る。例えば、(5)のように、発話の状況によっては、片方が不自然になる場合もあり得る。

- (5) (太郎は一昨日薬を飲んだかどうか忘れてしまった。日記で調べたところ、飲んだと記録されているのを発見した際の発言)
花子：一昨日薬飲んだの？
太郎：ええと...、(日記の中に、薬を飲んだという記述を発見して)
あ、{??飲んだ/飲んでる}。

このようなことは、時制の使い分けについても言える。例えば、(6)の場合、aは「入っていた」のように「タ」を使って過去形で言っているが、これは、今も小銭がポケットに入っている可能性を排除するものではない。従って、(6a)のように言っても(6b)のように言っても真となる場合があり得る。

- (6) a. さっきポケットに小銭が入っていた。
b. (今)ポケットに小銭が入っている。

例えば、(7)のような状況では、実際に「タ」ありの形でもなしの形でもどちらでも言うことができる。

- (7) (ポケットに手を入れたら、小銭が入っていた)
あ、ポケットにお金が{入ってる/入ってた}。

しかし、どちらを使っても同じようなニュアンスとなるわけではない。この場合、「タ」を使用すると、話者がお金を「発見」した、というようなニュアンスになることが、これまでの研究で指摘されている。

このように、「テイ」や「タ」の使用は単純にそれらの表す時間関係からでは説明しきれない場合がある。「テイ」については、このような特徴から、非アスペクト的な「テイ」があると言われたり、「タ」については、テンスではなくムードを表す「タ」があると言われたりもする。

1.2. 本研究の取り組み

以上見たことから、実際の使用場面における「テイ」や「タ」の使い分けを説明するためには、発話がどのような状況でなされたのかということ、即ち、文脈情報と「テイ」や「タ」の有無という形式との関係を分析する必要があることがわかる。

このためには、①文脈情報を操作し、それぞれの文脈におけるテンス・アスペクト形式の自然さの違いを観察する必要がある。また、②この関係を明らかにした上で、なぜ当該のテンス・アスペクト形式が使われるのかを説明する必要もある。このためには、テン

ス・アスペクト形式の表す時間概念と文脈との関わりを明らかにする必要がある。

しかし、文脈情報を細かく操作しながら、テンス・アスペクト形式の自然さを観察していくようなテンス・アスペクト研究は多くはない。また、多くの場合、「テイ」や「タ」の使われ方を分析した上で得られた各用法に対して、個別の説明が与えられていることが多く、分類された用法間の横の関係が十分に明らかになっているとは言えない。

そして、これらの用法と言語形式との対応関係を説明するためには、各用法を、「テイ」や「タ」の有無の対立で表される「時間関係」との関わりのもとで分析する必要があると考えられるが、現在、「テイ」や「タ」の有無という形式的な対立構造と、これらが表す時間関係の意味的な対立構造がどのような対応関係にあるのかは明確に示されていない。

以上のような点を踏まえ、本稿では、次のようなアプローチで、上記のような疑問を明らかにするための考察を行っていく。

まず、「テイ」や「タ」の形式的対立が、どのような時間関係の意味的な対立に反映されているのかを分析し、これらの組み合わせで表される形式がどのような時間関係を表しているのかを明らかにする。そして、「テイ」や「タ」の使用される場面の文脈情報を細かく操作し、それぞれの場合における各形式の自然さを観察する。その上で、この文脈情報と形式との関わりを、形式の表す時間関係との対応関係の中で捉えなおし、両者の対応関係の背後にある原則を明らかにする。

以下では、以上のような方法で、非アスペクト的な「テイ」や非テンス的な「タ」と言われるものの使い分けの背後にある原則を、「テイ」と「タ」の表す時間関係との関係の中で示していく。

1.3. 構成

第2章では、「テイ」と「タ」の組み合わせが表す時間関係を記述し、「テイ」の有無と「タ」の有無という二種類の二項対立が、時間関係のどのような対立関係に対応しているかについて見る。ここでは、まず、出来事時(t_e)、発話時(t_s)、設定時(t_f)という3つの時間の間の時間関係を表す時間関係図を用い、「テイ」と「タ」の組み合わせの表す時間関係を記述する。その上で、(i)「タ」の有無という形態上の二項対立が、意味の上では「過去/現在/未来」という三項対立となっているのはなぜか、という疑問、(ii)「テイ」の有無という形態上の二項対立が、意味の上では「非完結相/完結相」という対立と「完了/非完了」という対立という、二種類の対立を表しているのはなぜか、という疑問に取り組む。ここでは、まず、「テイ」と「タ」の組み合わせが表す各時間関係を、その時間関係が算定される過程を時間関係の算定プロセスとして二項対立的に記述する。その上で、「テイ」の有無及び「タ」の有無という二つの形態的二項対立が、このプロセス内のどのような対立に対応しているかを考察する。このようにして、「テイ」と「タ」という形式と時間関係との対応関係を明らかにする。

次に、第3章では、出来事の把握の間接性がどのようにテンス・アスペクト形式と関わっているかについて見る。第3章の前半では、「記録用法」と呼ばれる「テイ」に焦点を当て、これを第2章で求めた時間関係図を基に分析する。ここでは、「記録用法」が「テイ」という形式のもつ意味ではなく、設定時(*t*)の設定規則のひとつとして存在していることを指摘し、この規則に基づいて、「記録用法」の様々なバリエーションを、時間関係図に基づいて分析・記述していく。そして、これらのバリエーションを説明できる設定時(*t*)設定の一般原則として、「記録・痕跡による把握の原則」が存在することを確認する。

第3章の後半では、過去の出来事を、その「様子」から把握した際に使われる「テイ」があることを述べ、このような「テイ」が第2章で見た時間関係図によってどのように説明できるかを見る。ここでは、まず、従来から指摘されている「人の内的状態を表す動詞」と「テイ」の有無、そして人称制限の関係について見る。そして、この人称制限と「テイ」の関係が、実は「内的状態」を表す動詞に限るものではないという点を指摘する。その上で、内的状態を表す動詞だけでなく、通常の動詞にも当てはまる設定時(*t*)設定の一般原則として、「様子による把握の原則」が存在することを確認する。

これらの分析を踏まえ、第3章の最後では「記録・痕跡による把握の原則」と「様子による把握の原則」の一般化が可能であることを示し、より一般化された原則である「間接的把握の原則」を提示する。そして、この原則と第2章で示した「時間関係と形態の対応規則」の組み合わせにより、非アスペクト的とされるような「テイ」についてもアスペクト的な「テイ」についても、同じ時間関係のもとで説明できることを主張する。また、このような原則は「テイ」という形式と結びついているわけではなく、設定時(*t*)の設定原則として存在していることから、より広い現象を説明できるということを見る。

第4章では、状態相の文における設定時の設定について考察をする。ここでは、話し手の態度を反映しているとされるムード的な「タ」の設定時(*t*)の設定のされ方と、(ムード的でない)通常の「タ」の設定時(*t*)の設定のされ方と同一の原則に基づいていることを見る。ここでは、まず、ムード的な「タ」と通常の「タ」の区別を行い、通常の「タ」の設定時(*t*)の設定について、「知識」と「体験」の区別をもとに考察していく。この結果として得られた設定時(*t*)設定の一般原則として、「情報の有意性の原則」があることを確認する。そして、この上で、ムード的な「タ」の設定方法が、この原則に基づいて説明可能であることを示す。このようにして、「知識」と「体験」の区別及び「情報の有意性の原則」から、状態相の文の時制形式の振る舞いについて一般化した説明を与える。

第5章では、これらの考察の結果を踏まえ、本研究の総括および今後の展望を行う。

第2章

「タ」及び「テイ」の対立構造と時間関係算定プロセス

2.1. 背景

この章では、日本語の「テイ」「タ」といった時間関係を表す形式の、意味と形式の対立構造の非対称性という問題に取り組んでいく。具体的には、以下の2点について見ていく。

(8) a. 「タ」の形態的対立と意味的対立の非対称性の問題

形態的には二項対立であるのに、意味的には三項対立となっている。また、完結相現在が存在しないことにより、「完結相/非完結相」を表す「テイ」と時制を表す「タ」の組み合わせが5通りになっている。

b. 「テイ」の形態的対立と意味的対立の非対称性の問題

形態的には「テイ」の有無という二項対立だが、これが意味的に「完結相/非完結相」と「完了/非完了」という二組の二項対立に対応している。

2.1.1. 「タ」の形式と意味の非対称性

動詞のアスペクトにおいて通言語的に見られる基本的対立に、imperfective(非完結相)とperfective(完結相)の対立がある(Comrie1976:9)。この2つの対立は、日本語研究の分野では「継続相」と「完成相」等と呼ばれ(奥田1985:88-89, 高橋1985:10, 工藤1995:61-66等)、両者の違いは、形態的には「テイ」が有る(非完結相=継続相)かない(完結相=完成相)かの違いで表される。例えば、「飲む」に「テイ」を付加して「飲んでいる」と言えば、行為の途中の場面を表す。このようなものは非完結相や継続相と呼ばれる。一方、「テイ」を付加せず単に「飲む」と言えば、行為を開始から終了までまるごと表す。このようなものは完結相や完成相と呼ばれる。

また、「タ」の有無の対立は「過去」と「非過去」という時制の対立を表す(金田一1955, 鈴木1979, 寺村1984, 町田1989他)とされている¹。「飲む」や「飲んでいる」に「タ」を付加して「飲んだ」や「飲んでいた」と言えば、前者の場合にはその行為が過去に完結したものであることを、後者の場合には行為が過去の任意の時点で進行中であった

¹ 「タ」が「過去」を表さず「完了」を表すとする主張もある(金田一1955, 紙谷1979a, 紙谷1989, 寺村1984等)が、これらの主張の中には従属節における「タ」と発話時との関係に基づく絶対時制についての主張である場合が多い。連体節(丹羽2001)やノデ・カウ節(岩崎2001)、引用節(橋本1996)等の時制は主節の出来事時等との時間関係から定まる場合も多い。ただ、ここでは絶対時制と相対時制の区別をせず、「過去」を「基準時以前」と一般化して考える(金田一1955:60, 丹羽2001:57)。

ことを表す。これは、「過去」時制である。一方、「タ」を付加せずに(終止形で)「飲む」や「飲んでいる」と言えば、前者の場合は行為が未来に行われることを、後者の場合は行為が現在行われている、もしくは未来の任意の時点で進行中であることを表す。これは、「現在未来」時制や、単に「非過去」と呼ばれたりする。

このように、「テイ」と「タ」という形態の対立構造に焦点を当てると、次の(9)のような分類が得られる(高橋1985:33, 工藤1989:54等)。

(9) 形態の組み合わせ

| | 非過去 | 過去 |
|------|-------|-------|
| 完結相 | 飲む | 飲んだ |
| 非完結相 | 飲んでいる | 飲んでいた |

このように、形態という観点から見ると、時制形式は「タ」の有無という二項の対立であることがわかるが、意味上の対立という観点から見ると、時制には、一般的に「過去」「現在」「未来」という三種類が認められていると思われる。このような観点から形態と意味との対応関係を分類すると、次の(10)のような表が得られる(町田1989:152)。

(10) 意味の組み合わせ

| | 過去 | 現在 | 未来 |
|------|-------|-------|-------|
| 完結相 | 飲んだ | | 飲む |
| 非完結相 | 飲んでいた | 飲んでいる | 飲んでいる |

これを見ると、時制に関しては、形態上の「二項」対立という対立構造が、意味上では「三項」対立になっていること、そして、「完結相現在」の欄が空欄になっていることが見て取れる。ここでは、形態上の二組の対立構造から、5つの意味が生み出されているわけである。

このように、テンス・アスペクトを対立構造という観点から見ると、なぜ、5つの意味が、二組の対立構造から生み出されるのか、という(8a)の疑問が生じる。

2.1.2. 「テイ」の形式と意味の非対称性

次に、「テイ」の形式上の対立と意味上の対立の非対称性について見る。

「テイ」の意味として、非完結相だけでなく、次に見るような「完了・パーフェクト」という意味の存在が認められている(工藤1995:96-, 三原1997:135)。

下の(11a)は「3分前」という時点は「飲む」という行為の途中に存在する時間であり、これは上で見た「非完結相(継続相)」であることが分かる。一方、(11b)の場合は「飲む」は「3分前」よりも前に行われ、すでに完了している出来事である。このように、両者は異なる時間関係を表す。

- (11) a. 太郎は3分前に薬を飲んでいた。(非完結相)
 b. 太郎は3分前の時点で、既に薬を飲んでいた。(完了)

この、(11b)のような時間関係はperfectと呼ばれ、通言語的に観察される時間概念である(Anderson1982)。日本語研究では、perfectは「完了」や「パーフェクト」と呼ばれる。「完了/パーフェクト」は日本語では「非完結相(継続相)」と同じ形態をとる。このことから、「テイ」は下の(5)のように二つの異なる対立を表すことになる。²

- (12) 「テイ」の意味

| | -テイ | +テイ |
|--------|-----|------|
| 完結/非完結 | 完結相 | 非完結相 |
| 完了非完了 | 非完了 | 完了 |

このように見ると、「テイ」が2つの意味を持っているということになる。言い方を変え、と、「テイ」の有無という対立が、2つの異なる対立(「非完結：完結」及び「完了：非完了」)を生み出していることになる。このように、「テイ」に関しては、形態上の一組の対立が、意味上の二組の対立に対応するという、非対称性が存在していることがわかる。

このように、「タ」や「テイ」を「対立構造」という観点から見ると、形態上の対立と意味上の対立とが非対称的になっているように見えることがわかる。しかし、本稿では、このような非対称性は表面上のものであり、実際には意味の対立は形態上の対立に対応した二項対立として捉え直すことができると考える。本章では、この点について見ていきたい。

2.2. 「テイ」及び「タ」の概観

2.2.1. 「テイ」について

日本語の「テイ」に関しては、大きく以下のような三つの観点から見ることができると思われる。以下では、この三点に分けて、「テイ」について見ていきたい。

² ここで言う「非完了」とは、「未完了」とは異なる。いわゆる単純時制のことである。例えば「過去非完了」というのはいわゆる単純過去のことで、「太郎は薬を飲んだ」と言うような場合である。従って、実際には、例えば「完結相過去」というのは「完結相過去非完了」などと記述すべきだと思われるが、単純化のため、これ以降も「非完了」の場合は特に記述しない。

- (13) a. 「動詞+テイ」の意味
 b. 「完結相」と「非完結相」の対立
 c. 「非完了」と「完了」の対立

2.2.1.1. 完結相(完成相)と非完結相(継続相)

まず、完結相(perfective)と非完結相(imperfective)の対立について見る(Comrie1976:9-)。この対立は、日本語の「テイ」の研究においては、それぞれ「完成相」と「継続相」と呼ばれることが多いが、ここでは、ひとまず、完結相と非完結相という用語を用いる。(後に非状態相と状態相という用語に置き換える)

- (14) a. perfective - 完結相 - 完成相
 b. imperfective - 非完結相 - 継続相

まず、形態面での両者の違いについて見る。

完結相と非完結相の対立は、下の(15)のように、日本語では、「テイ」の有無で表される。([-テイ]は「テイ」が付加されないことを、[+テイ]は「テイ」が付加されることを表す)

- (15) a. 完結相 : [-テイ]
 b. 非完結相 : [+テイ]

完結相の場合は「テイ」が付加されず無形となるため、例えば「飲む」という動詞であれば、完結相と非完結相の対立は下の(16)のようになる。

- (16) a. 「飲む」の完結相(過去) : 飲む(飲んだ)
 b. 「飲む」の非完結相(過去) : 飲んでいる(飲んでいた)

このように、完結相と非完結相の対立は「テイ」の有無で表される。

次に、意味の対立について見る。

意味の面における両者の違いについては、(17)のような二つの観点から述べられることが多い。一つ目は、完結相が出来事を外側から眺めるもので、非完結相が内側から眺める、というものである(Comrie1976:13, 奥田1985:100-101)。仮に、これを「視点の問題」と呼ぶ。もう一つは、完成相が出来事の始まりと終わりを問題にする(有界的)もので、非完結相はそうではない(無界的)、というものである(Smith1991:66-)。仮に、これを「有界性の問題」と呼ぶ。

- (17) a. 視点の問題 : 出来事を外側から眺めるか内側から眺めるか。
 b. 有界性の問題 : 出来事の始まりと終わりを問題にするかどうか。

以下では、この「視点の問題」と「有界性の問題」の二点について見ていく。

まず、「視点の問題」について見る。

例えば、「太郎が酒を飲む」という出来事が開始してから終了するまでの間のどこかの

時点で、「電話がなる」という出来事が起きたとする。この場合は、「太郎が酒を飲む」という出来事の内部の時間が問題になっている、と言える。このような場合は、次の(18)のように「テイ」を使って表現される。

(18) 太郎が酒を飲んでいる時、電話が鳴った。

このように、「テイ」が使用されることで、行為の「途中」の場面を表すことができる。一方、(19)のように「テイ」を使わずに言おうとすると、「～時」で表されるのが、途中の場面ではなくなる。(19a)の場合は、「太郎が酒を飲む」の開始前の場面になってしまうし、(19b)の場合は、「太郎が酒を飲む」の終了後の時点になってしまう。(この場合は、「飲む」というのが「一口飲む」というような意味合いとして解釈されるが、この場合、この「一口飲む」の終了後の場面、という解釈になる。)

(19) a. 太郎が酒を飲む時、電話が鳴った。

b. 太郎が酒を飲んだ時、電話が鳴った。

このように、「テイ」を用いれば出来事の途中の場面を取り出すことができるが、「テイ」がない場合は、そのようにはできない。これは、後者の完結相は出来事を「ひとまとまり」のものとして外側から眺めるものであるため、出来事の内部の場面を取り出すことはできないが、前者の非完結相はそのようなことができる、ということである(Comrie1976)³。完結相のもつ前者のような特徴は、「ひとまとまり性/非分割性」などと言われ、非完結相のもつ後者的ような特徴は、「継続性/過程性」などと言われる(奥田1985:100-101)。

また、両者では、時間副詞で表される時間と出来事との関係が異なる。

仮に、「5分前」という時間が「太郎が酒を飲む」という出来事の開始時点から終了時点の間のどこかに位置していた、ということの意味したいとしよう。そのような場合、「テイ」を使って、(20)のように言う必要があるだろう。

(20) 太郎は5分前酒を飲んでいた。

このように、「テイ」を使うと、「5分前」は「飲む」の途中のどこかに位置していることになる。しかし、(21)のように「テイ」なしで言うと、このような意味にはならない。この場合は、「5分前」という時間の中で「飲む」が開始して終了したという意味になる。

(21) 太郎は5分前酒を飲んだ。

³ Comrie(1976:13)では「John read that book yesterday; while he was reading it, the postman came」のような例を挙げ、「はじめの文では、ジョンがよむという場面はひとまとまりの出来事としてさしだされていて、ひとつづきの時間的な局面に下位分割されていない。第二の文では、この出来事は局面にくだかれていて、話し手はいまやジョンがよんでいるという場面のまっただなかにたっている」として、完結相と非完結相の違いが説明されている。

このように、非完結相と完結相とでは、時間副詞と出来事との時間関係が異なる⁴。

このように、完結相と非完結相の違いは、出来事を「ひとまとまり」の非分割的なものとして外側から眺めるか、それとも、出来事を内側から眺めて、その内部を問題にするか、という、視点の取り方の違いと言える。

次に、「有界性の問題」から、両者の違いについてみたい。

下の(22)のaは完結相で、bは非完結相である。前者は不自然な文だが、これは、「太郎が酒を飲む」というのが昨晚の時点で開始し、終了しているために、発話時時点で酒を飲んでいるという解釈不可能なためである。しかし、後者の場合、出来事の開始時や終了時は含まれないため、発話時事点で酒を飲んでいるという解釈も可能である。従って、この文は自然である。

- (22) a. ??太郎は昨晚酒を飲んだ。まだ飲んでいるかもしれない。
b. 太郎は昨晚酒を飲んでいた。まだ飲んでいるかもしれない。

このように見ると、前者は出来事が既に「閉じて(close)」おり、後者は出来事が「開いて(open)」いる状態だということができる(Smith1991:66-77)。このことは、前者が有界的(bounded)であり、後者が無界的(unbounded)だと言い換えられる。このように、完結相と非完結相との違いは、有界的か無界的かの違い、即ち、有界性の違いという観点から見ることでもある。

以上見てきたのは、「テイ」の有無の対立がある動詞についてだが、動詞によっては、そのままの形で非完結相と同様の振る舞いをするものがある。

例えば、「いる」のような状態動詞は、そもそも「テイ」を付加することができず、そのままの形で非完結相と同様の振る舞いを見せる。即ち、(23a)のように「内側から眺める」という視点をもつことができ、(23b)のように無界的な解釈が可能である。

- (23) a. 太郎が部屋にいる時、電話が鳴った。(内部視点○)
b. 太郎は5分前部屋にいた。まだいるかもしれない。(無界的○)

下の(24)(25)に見るように、形容詞や名詞などの状態性述語についても、同様の振る舞いが見られる。

- (24) a. 太郎が学生の時、父が再婚した。(内部視点○)
b. 太郎は2年前学生だった。まだ学生かもしれない。(無界的○)
(25) a. ドルが安い時、ドルを買った。(内部視点○)
b. 3日前はドルが安かった。まだ安いかもしれない。(無界的○)

このように、形容詞や名詞は、動作性動詞に「テイ」が付加された非完結相と同様の特徴を持つ。このような特徴をもつ述語は、形容詞や名詞、下で見る状態動詞、動詞の可能

⁴ 高橋(1985:86)では、このような時間副詞を「基準時」と呼び、両者の違いを、継続相(非完結相)は①「動作の一定の局面が成立する時間が基準時間をまたいで」おり、完成相(完結相)は②「動作の一定の局面が成立する時間が基準時間をまたいでいない」、と説明している。

形等がある。

一方、これらの述語は、完結相のような有界的な解釈にはならない。即ち、文単独で、その時間内に出来事が開始して終了した、という解釈はもたらさない。例えば、「太郎は5分前部屋にいた」のように言った時、なんらかの文脈情報があるのでない限り、「5分前」という時間内で、「太郎が部屋にいる」という出来事が、始まって、終わった、という意味にはならない。上の例のように「まだいるかもしれない」という文を後続させなくとも、太郎が発話時時点でまだ部屋にいるという解釈は排除されない。これは、下の例についても同様である。

以上のことから、状態動詞や形容詞、名詞等は、動作性動詞の非完結相と同様の振る舞いを見せることが分かる。

このように見ると、アスペクトのタイプとして、次のような二種類を分類できると思われる。

(26) a. Aタイプ：動作性の動詞の完結相

b. Bタイプ：動作性の動詞の非完結相、状態動詞、名詞、形容詞...

Bタイプが動作性動詞の非完結相に限られないことを見ると、状態性の述語に関しても使える共通概念としてのアスペクトタイプを設定する必要があるだろう。本稿では、このようなもの(Bタイプ)を「状態相」と呼び、Aタイプのものを「非状態相」と呼ぶことにする。⁵

2.2.1.2. 「動詞+テイ」の意味

以下では、「動詞+テイ」の意味という観点から、「テイ」について見ていく。

日本語の動詞の分類には、様々な観点からの分類があり得る(金田一1950, 藤井1960, 吉川1973, 奥田1985, 森山1988)が、ここでは、「テイ」の有無との組み合わせによる生じる意味による動詞分類(金田一1950, 奥田1985)を中心に見ていく⁶。

「テイ」と動詞との共起関係からの動詞分類に、金田一(1950)の四分類がある。この分類によると、ある種の動詞は「テイ」を付加することができず(状態動詞)、ある種の動詞は必ず「テイ」と共に用いられる(第四種の動詞)。残りの二種類については、「テイ」が付加されたりされなかったりするが、付加された場合、一つは「動作の進行」を表し(継続動詞)、もう一つは「変化の結果の残存」を表す(瞬間動詞)。

⁵ 井上(2001:100-102)も「状態形」と「非状態形」という分類を行っている。定義のしかたが異なるが、分類のとしてはほぼ同じものだと考えられる。ただ、井上(2001)の分類が形式の分類であるのに対し、ここで言う「状態相」と「非状態相」は意味の分類である。

⁶ 動詞ないしは述語・文の類型としては、日本語に限らず、英語でもVendler(1967)やDowty(1979)らによる分類もあるが、ここでは、金田一(1950)～奥田(1985)の流れに沿って日本語の「動詞+テイ」の意味について見ていく。

(27) 金田一(1950)による四分類

| | 動詞 | 「テイ」との共起 | |
|--------|---------|----------|----------|
| 状態動詞 | いる・ある | 共起不可 | |
| 継続動詞 | 読む・書く | 共起可 | 動作の進行 |
| 瞬間動詞 | 点く・知る | 共起可 | 変化の結果の残存 |
| 第四種の動詞 | 聳える・優れる | 必ず共起 | 状態を帯びる |

このように、四分類のうち、「テイ」が付加された形と付加されない形の対立関係があるのは、二種類(継続動詞と瞬間動詞)である。「動詞+テイ」の意味を分析するには、「テイ」が存在する形とそうでない形との違いを比較する必要があるとする立場に立つと、「動詞+テイ」の意味の分析対象は継続動詞と瞬間動詞に絞られることになる(奥田1985:100)。

この二種類(継続動詞と瞬間動詞)については、次のようなことが言える。

動詞が「テイ」と共に用いられた時に「動作の進行」を表すのであれば、その動詞が「テイ」なしの形で表すのは「動作」の意味のはずであり、「変化の結果の残存」を表すのであれば、「テイ」なしの形で表すのは「変化」の意味のはずである。このことから、次のような対応関係があると考えられる(奥田1985:100-102)。

- (28) a. 「動作を表す動詞+テイ」→動作の継続
b. 「変化を表す動詞+テイ」→変化の結果の状態

(29)

| 非状態相 | 状態相 |
|------|----------|
| 動作 | 動作の継続 |
| 変化 | 変化の結果の状態 |

このように見ると、日本語の「動詞+テイ」の意味は、大きく上の二種類に分けられることが分かる。このような観点から、上で見た「継続動詞」と「瞬間動詞」とを次の(30)のように呼び換えることにする。⁷

⁷ 前者は「主体動作動詞」、後者は「主体変化動詞」とも呼ばれる(工藤1995)。また、両者の特徴を持ち合わせる「主体動作・客体変化動詞」(工藤1995)もある。例えば「開く(アク)」は主体変化動詞だが、「開ける」は主体動作・客体変化動詞である。「作る」のような動詞もこれに含まれる。このタイプの動詞は、基本的には「テイ」の形で「動作の継続」を表すが、場合によって「結果の残存」を表す。このように見ると、実際には3種類の動詞が得られるが、ここでは、主体動作動詞と主体変化動詞の二種類に焦点を当てて。

- (30) a. 動作動詞
b. 変化動詞

このように、「テイ」の意味として、大きく「動作の継続」と「変化の結果の状態」を認めることができるが、このような分類に収まらないものとして挙げられる「動詞+テイ」の意味に、「経験」と呼ばれるものがある(藤井1960:105)。

例えば、「書いている」という述語で、(31)のaのような意味もbのような意味も表すことができる(金田一1955:37)。aの意味については、「動作の進行」で説明できるが、bの意味は、このようには説明できない。bの場合、「たくさんの本を書く」は発話時点で既に終了した出来事である。

- (31) a. あの人はたくさんの本を書いている。(書写中である)
b. あの人はたくさんの本を書いている。(著述が多い)

(金田一1955)下線は筆者による

(31)のbの意味の方を、「結果の状態」とひとくくりにしてしまえるとする考え方もある(金田一1955:37、岩崎2000:34)が、一方で、結果状態とは異なる「テイ」だと考える(藤井1960:105-)ことも可能だろう。後者のように、これを別の「テイ」だと考える場合に、この「動詞+テイ」が表す意味は「経験」と言われることが多い。これには、他にも次の(32)のようなものがある。これらの文が意味するのは、「昭和十五年に結婚する」とか「昔3年間英国で勉強する」という経験を「彼」が有している、ということだと見ることができる。

- (32) a. 彼は昭和十五年に結婚している。
b. 彼は昔3年間も英国で勉強している。

(藤井1960:106)

この「経験」に関して重要な点として、このタイプの「動詞+テイ」は動詞部分が(32b)の「勉強する」のように「動作」を表すものでも(32a)の「結婚する」のように「変化」を表すものでもいい、という点がある。上で見た「動作の継続」と「変化の結果の状態」が動詞の語彙的な意味の種類によって分類されるという点を考えると、「経験」の「テイ」はこれらと大きく異なることがわかる。

次に、「結果状態」の問題について見る。

ここで見た3つの「動詞+テイ」の意味(動作の進行・結果の状態・経験)のうち、上の「非状態相/状態相」の対立のところで見たのは、動作の進行に当たるものだった。しかし、ここで見た「結果の状態」については、上の分析に当てはめることができない面がある。

例えば、(33)のaは、「1時間前」が「太郎がお酒を飲む」の開始から終了までの間のどこかにある場合である。しかし、bのように言った場合、これは「窓が開く」という変化が開始してから終了するまでの間にあるのではなく、終了した後にあると考えるべきだろう。このような意味で、bはaと異なると言える。

(33) a. 太郎は1時間前お酒を飲んでいた。

b. 5分前に窓が開いていた。

このように、変化動詞は完結相と非完結相の関係という点で、動作動詞の場合とは異なる。しかし、次に見る通り、「テイ」を付加して結果の状態を意味する場合には、動作動詞に「テイ」を付加した場合同様に状態相の特徴をもつ。

(34)に見る通り、「開いている」と言った場合でも、aに見るような「内側からの視点」とbに見るような「無界的」といった、状態相の特徴は兼ね備えている。

(34) a. 窓が開いている時に泥棒が入った。(内部視点○)

b. 5分前に窓が開いていた。まだ開いているかもしれない。(無界的○)

このことから、「変化動詞+テイ」の表す「結果の状態」も、やはり状態相だと言える。一方、最後の「経験」については、「動作の進行」や「結果の状態」とは、大きく異なる面がある。

既に見たように、(35)のaやbのように言う時は、「1時間前」という時間は出来事が起きた(開始から終了までを含む)時間を表すのではない。一方、(36)のように言う場合は、「昭和十五年」という時間は、「結婚する」という出来事が起きた時点を表している。(工藤1995:101)

(35) a. 太郎は1時間前にお酒を飲んでいた。(動作の継続)

b. 5分前に窓が開いていた。(結果の状態)

(36) 彼は昭和十五年に結婚している。(経験)

このように、「経験」の「動詞+テイ」は状態相とは異なる時間関係を表している。この「経験の「テイ」」と呼ばれるものの表す時間関係については、以下で詳しく見る。

2.2.1.3.完了

上で見たように、「経験」と呼ばれる「動詞+テイ」は「非状態/状態」の対立で説明することができない。既に見たように、このような「テイ」は完了(perfect)と呼ばれる。以下で、完了の表す時間関係について見る(Reichenbach1947, 工藤1995:96-101)

(37)のaとbは共に「飲んでいる」という述語で表されるが、これらが表す意味は違う。aの場合は、上で見たように、「飲む」の途中に「3時間前」という時間が存在している。一方、bの場合は、「飲む」という出来事が、「3時間前」に先行している。

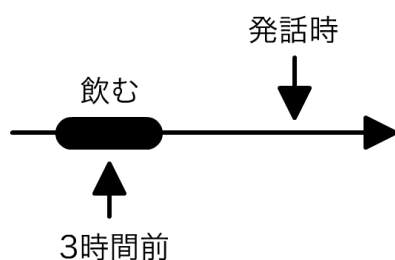
(37) a. 太郎は3時間前に酒を飲んでいた。(出来事が「3時間前」を含む)

b. 太郎は3時間前の時点で、既に酒を飲んでいた。(出来事が「3時間前」に先行する)

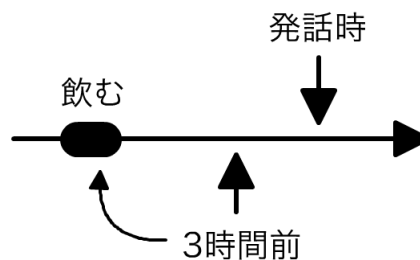
つまり、これらは、それぞれ以下のような時間関係をしている。

(38)

a. 過去状態



b. 過去完了



これは、(39)のように、未来の時点を表す時間副詞や現在の時点を表す時間副詞の場合でも、同様である。ここでは、aは「3時間後」という未来の時点、bは「現時点」という現在の時点を表す時間であるが、「飲む」という出来事が、これらの時間に先行しているという意味を表している。

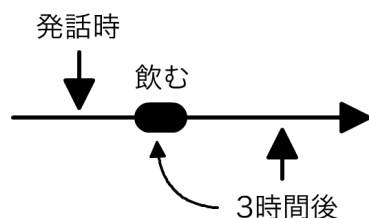
(39) a. 太郎は3時間後の時点で(既に)酒を飲んでいる。

b. 太郎は現時点で(既に)酒を飲んでいる。

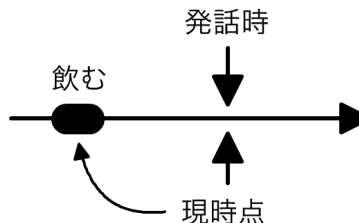
これらの時間関係は、次のように示せるだろう。

(40)

a. 未来完了



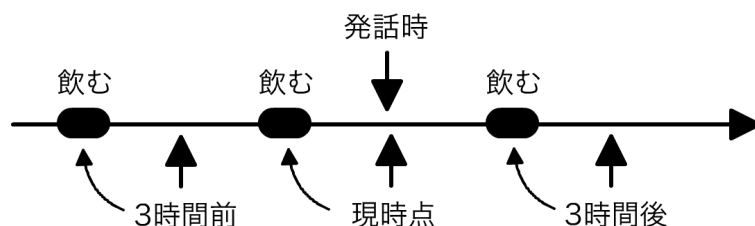
b. 現在完了



このように、出来事がある設定時間(Reichenbach(1947)に従ってRと呼ぶ)に先行しているという時間関係をもつものを「完了」や「パーフェクト」と呼ぶ。もし、Rが過去の時点であれば「過去完了」、未来の時点であれば「未来完了」、現在であれば「現在完了」となる。

(38b)の過去完了、(39a)の未来完了、(39b)の現在完了をまとめて図にすると、以下のよう示せる。(工藤1995:126参照)

(41)



上で見た「経験」の「テイ」と言われるものについては、時間的な関係としては、「完了」を表していると言える。上で見た(32a)の「昭和十五年」や(32b)の「昔3年間」というのは、出来事時を指す時間であることが分かる。

本稿では、この時間関係を「完了」と呼ぶ。⁸

以上のことから、「テイ」の表す意味として、次の二種類があることが分かる。

(42) a. 状態

b. 完了

2.2.2. 「タ」について

ここでは、過去時制を表すとされる「タ」の有無が表す意味について見ていく。実際には「タ」の有無の表す意味は単純に説明できない事例が多く存在するが、ここでは、一般則として定められそうな基本的なものだけを見る。⁹

まず、形態面について見る。2.2.1.1で見たように、「テイ」の対立は、これが付加されるか、付加されないか、という対立であった。一方、「タ」の場合は、「タ」が付加されるか、終止形をとるか、という対立になる。ただし、終止形をとる場合というのは、「タ」が付加されなかった結果として終止形になっていると考えられるため、以降では単に「タ」が付加されない形として言及する。この対立は、次のように示せる。

(43) a. 過去：「+タ」

b. 非過去：「-タ」→終止形

例えば、(44)に見るように、動詞「飲む」の場合、「タ」が付加されると、「飲んだ」となるが、付加されない場合には、終止形「飲む」となる。名詞「学生」の場合は、前者

⁸ 「完了」という用語は、複文における相対時制の問題を扱う際にも用いられる場合がある(寺村1984, 金水1987等)が、ここでは、単文で「設定時点に先行する」という時間関係が存在する場合に、その時間関係を表す用語としてこれを使用する。また、現在完了の場合に限り「テイ」がない「シタ」の形で「完了」が意味されとする説(工藤1995等)もあるが、この場合、過去完了や未来完了の場合を説明できないので、ここでの「完了」はそのような場合を含めない。

⁹ 「あれ、こんなところにお金があった。」などのように話者の態度を表しているように見える「タ」については、第4章で扱う。

の場合には「学生だった」、後者の場合には「学生だ」となり、形容詞「忙しい」の場合には、前者の場合には「忙しかった」、後者の場合には「忙しい」となる。

- (44) a. 過去：飲んだ/学生だった/忙しかった
b. 非過去：飲む/学生だ/忙しい

次に、意味について見る。

日本語の「タ」は、状態動詞や形容詞、名詞のような状態性述語に付加される場合と、動作性の動詞に付加される場合とで、異なる振る舞いをする。(金田一1955:30-37, 寺村1984:81-104)

下の(45)に見るように、「寒い」のような状態性の述語の場合は、「タ」ありの形でaのような「過去」の状態を表し、「タ」ありの形でbのような「未来」やcのような「現在」の状態を表す。

- (45) a. きのうは寒かった。(過去)
b. 明日は寒い。(未来)
c. 今寒い。(現在)

一方、(46)に見るように、「飲む」のような動作性の述語の場合は、「タ」ありの形で「過去」の動作を表す(a)。一方、「タ」なしの形では、「現在」の動作を表すことはできず(b)、「未来」の動作を表すのみとなる(c)。もし、ここでbのように言ったとしたら、それは、今より後(この場合は直後)の時点で飲むという解釈になるだろう。この場合は、「未来」の動作を表すことになり、「現在」を表しているとは言えない¹⁰。

- (46) a. きのうはお酒を飲んだ。(過去)
b. ??今お酒を飲む。(現在)
c. 明日はお酒を飲む(未来)

このように、「タ」の有無が表すものは、述語が動作性の動詞の非状態相のような動作性のものであるか、それとも形容詞や名詞のような状態性のものであるかによって異なる。「タ」ありの形の表す意味は、共に過去だが、「タ」なしの形の表す意味、即ち、非過去形の表す意味が異なる。状態性の述語の場合には、非過去形は「現在及び未来」を、動作性の述語の場合には、非過去形は「未来」を表す。このように、非過去形は「現在」や「未来」を表すことから、「現在未来形」と呼ばれたりもする(鈴木1979:15)。

なお、ここまで、「状態性の述語」と「動作性の述語」という用語を用いてきたが、これは、ここまでの議論と合わせると、「状態相」と「非状態相」と言うべきだろう。(23)～(25)で見たように、動作性述語の状態相も、名詞や形容詞と同様の振る舞いをする。これは、「タ」を付加した際についても、同様である。次の例は、「飲む」の状態相

¹⁰ 「クマは野菜を食べる」のように習慣を表す総称文は「現在」のことを表しているようにも見えるが、これは時間を超越した無時制の文と考えた方がいいと思われる。また、「わ、人形が動く!」のような眼前描写の文などもある意味では「現在」を表しているようにも見えるが、このようなものも「時間制と無縁」(尾上2001)と考えた方がいいと思われる。

「飲んでいる」の例だが、上で見たのと同様に、(47)のaは、「飲む」という過去の状態、bは未来の状態、cは現在の状態を表している。

- (47) a. 5分前お酒を飲んでいた。(過去)
 b. 5分後お酒を飲んでいる。(未来)
 c. 今お酒を飲んでいる。(現在)

このように、状態相の「飲んでいる」のような場合には、状態性述語と同様の振る舞いになる。従って、言い換えると、非状態相の場合には、「タ」ありの形が過去で、「タ」なしの形が未来になる、と言えるだろう。

「状態相/非状態相」と「過去/現在/未来」の組み合わせを表で示すと、(48)のように示せる。aはそれぞれの場合にどのような形態がとられるかを、bはそれぞれの時間関係を表すラベルを示している。

- (48) a. 形態(テンス部分のみ)

| | 過去 | 現在 | 未来 |
|------|----|----|----|
| 非状態相 | +タ | | -タ |
| 状態相 | +タ | -タ | -タ |

- b. 意味(名)

| | 過去時制 | 現在時制 | 未来時制 |
|------|-------|------|-------|
| 非状態相 | 過去非状態 | | 未来非状態 |
| 状態相 | 過去状態 | 現在状態 | 未来状態 |

また、動作性の動詞に限って、「テイ」の有無と「タ」の有無の組み合わせを示すと、(49)のようになる。上段は「非状態相」で、この場合は「テイ」が付加されない。この場合、過去の場合には、「「テイ」なし「タ」あり」の形となる。また、未来の場合には「「テイ」なし「タ」なし」の形となるため、ここでは単に「ル」と示す。また、(46)で見たように、非状態相の場合には「現在」はない。次に、下段は「状態相」の場合で、この場合は「テイ」が付加される。過去の場合には「「テイ」あり「タ」あり」の「テイタ」となる。現在の場合には「「テイ」あり「タ」なし」なので、ここでは「テイル」と示す。未来の場合にも、これと同様である。

(49) 動詞の形態(アスペクト部分を含む)

| | 過去 | 現在 | 未来 |
|--------|-----|-----|-----|
| 動詞・非状態 | タ | | ル |
| 動詞・状態 | テイタ | テイル | テイル |

以上、時制の形態、及び意味の分類について見てきた。

2.3. 「テイ」及び「タ」に関する疑問

ここまで、日本語のアスペクト・テンス形式である「テイ」と「タ」の基本的な意味・形態面での特徴について見てきたが、ここでは、これらについての根本的疑問について考える。

時制形式の「タ」に関する疑問から見る。

既に見たように、「状態相/非状態相」の対立を表す場合、「テイ」の有無でこれを示す。ここでは、「非状態相/状態相」という意味上の二項対立と、「-テイ/+テイ」という形態上の二項対立とが対応関係にある((50a))ので、問題はない。しかし、「過去/非過去」を表す「タ」については、問題がある。なぜなら、形態上は「+タ/-タ(終止形)」という二項対立であるにもかかわらず、意味上は「過去/現在/未来」という三項対立になっている((50b))からである。

(50) a. アスペクト

| 形態 | +テイ | -テイ |
|----|-----|-----|
| 意味 | 状態 | 非状態 |

b. テンス

| 形態 | +タ | -タ | |
|----|----|----|----|
| 意味 | 過去 | 現在 | 未来 |

ここで、この対立構造の不一致を解消するために、形態の二項対立に合わせて、意味も「過去時制」と「非過去時制」の二項対立にしてしまう、ということは可能だろう。即ち、「現在」と「未来」を「非過去」という概念の下に一般化する、という方法で形態と意味の対立構造の不一致を解消させることは可能である。

しかし、そのようにしたとしても、依然として問題がある。なぜなら、(46)で見たよう

に、非状態相の場合には、「未来」時制が存在する一方で、「現在」時制が存在しないからである。このような事実を踏まえると、やはり「現在」と「未来」との区別は必要であるように思える。ただし、そうすると、また形態と意味の対立構造が合致しないという問題に逆戻りしてしまう。ちなみに、ここで、「現在非状態」というテンス・アスペクトの組み合わせが存在しない理由(奥田1985:100-101, 高橋1985:140)を説明しても、それは、当該の欄が空欄になる理由を説明するだけで、対立構造の非対称性を解消することにはならない。

(51)

| | 過去時制 | 現在時制 | 未来時制 |
|--------|-------|------|-------|
| 動詞・非状態 | 過去非状態 | | 未来非状態 |
| 動詞・状態 | 過去状態 | 現在状態 | 未来状態 |

結局、この問題・疑問は、次のように言い換えることができる。即ち、「二組の二項対立構造から5つの分類が生じるのはなぜか？」ということである。

このように、時制形式と意味との対応関係に関しては、両者の対立構造が合致しないのはなぜかという、根本的な疑問が存在する。

次に、「テイ」に関する根本的な疑問について見る。2.2.1.3で見たように、「テイ」は、「状態」という意味と「完了」という意味の二通りの異なる意味を表す。言い方を変えれば、「テイ」の有無という一組の対立が、意味上では「状態：非状態」、「完了：非完了」という二組の対立を生み出している。このように、「テイ」についても、形態上の対立と意味上の対立とが対応していないという問題がある。

以上、「タ」と「テイ」に関する根本的な疑問点として、以下の二点を挙げた。

- (52) a. 「タ」の形態的対立と意味的対立の非対称性
b. 「テイ」の形態的対立と意味的対立の非対称性

ここまで見てきたことからわかるように、このような問題は、形態と意味との対応関係を記述する、という方法では解消できない。この問題を解消しなければ、なぜ、当該の形態上の対立から、当該の意味分類が得られるのか、ということが説明される必要があるだろう。以下では、「テイ」と「タ」の有無といった二組の二項対立がどのようにしてここで見てきたような複数の意味を生み出せるのかについて、時間関係の算定プロセスという観点から説明を与えるを試みる。

2.4. 時間関係算定プロセスによるテンス・アスペクト記述

以下では、「タ」と「テイ」の有無という二組の対立と、「状態/非状態」および「完了/非完了」の意味対立、ならびに「過去/現在/未来」という意味対立がどのような対応

規則で結びついているのかについて、以下のような順序で考察していく。

まず、①Reichenbach(1947)や工藤(1995)で示された時間関係図式を紹介し、これらの図式の修正を行う。次に、②その結果得られた図式が表す時間関係の得られる過程を、二項対立のフローチャート形式で記述する。そして、最後に、③「テイ」と「タ」の有無という二組の形態上の二項対立関係と、時間関係の算定構造との対応関係を見つけ出し、形態の対立と意味の対立の対応関係を記述する。

- (53) ① 時間関係図で、「状態/非状態」「完了/非完了」「過去/現在/未来」の組み合わせで得られる時間関係を表記する。
- ② 当該の時間関係が算定されるプロセスを二項対立のフローチャートで記述する。
- ③ 形態上の二項対立構造と、時間関係の算定構造との対応関係を求める。

2.4.1. Reichenbach(1947)、工藤(1995)による時間関係図

Reichenbach(1947)は、本稿で言う「状態/非状態」「完了/非完了」「過去/現在/未来」の組み合わせの表す意味を、時間と時間の間の関係を示すという方法で記述している。これと同様の方法での時間関係の記述は、工藤(1995)などにも見られる。両者は同様の枠組みを使っているが、分析には異なる点もある。以下では、Reichenbachと工藤の時間関係分析について見ていく。

2.4.1.1. Reichenbach(1947)の時間関係図

まず、Reichenbachによる時間関係図について見る。

Reichenbachはテンス・アスペクトの表す時間関係には、次の3つの時間が関係しているとしている。Eは出来事が起きた時¹¹、Sは発話時、Rは参照時を表す。

- (54) a. E : point of event
- b. R : point of reference
- c. S : point of speech

これら3つの時間の間の関係によって、「Simple」「Extended」「Perfect」というアスペクト的な意味と「Past」「Present」「Future」というテンス的意味の組み合わせ

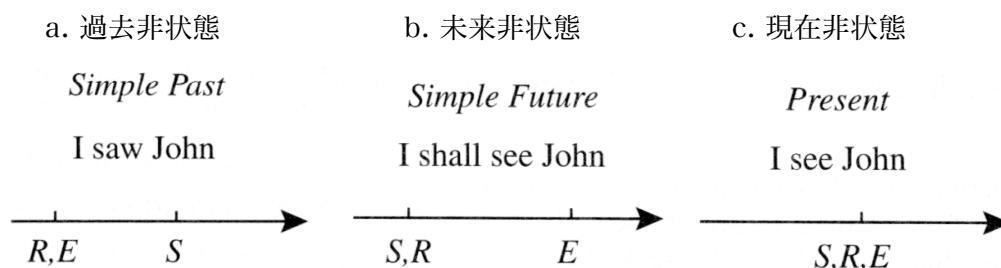
¹¹ Reichenbach(1947)では議論されていないが、Eの存在は、は必ずしも実際に出来事が起きたということの意味しないと考えられる。例えば、「今朝薬を飲んだかどうか忘れてしまった。」と言う場合、「薬を飲む」という出来事が起きたかどうか定かではないが、過去のある時点での出来事存在が想定されている。このように、出来事時は想定された出来事が起きた(持続していた)と想定される時間である場合もある。

が、示されている¹²。

まず、「Simple+時制」で表されるものについて見る。「Simple-」で表されるのは、いわゆる「単純時制」で、本稿で言う「非完了」に当たるが、本稿では「非完了」の場合は記述の単純化のため、あえて記述することはしていない。また、これは本稿で言う「非状態相」に当たるが、Reichenbachでは、「非状態相」の場合はあえて記述せず、「状態相」の場合には「-Extended」と記述している。ここでは、本稿での呼び名に合わせて「過去非状態」や「未来非状態」と呼ぶ。

このタイプの時間関係は、「過去」の場合はEがSに先行し((55a))、「未来」の場合はSがEに先行している((55b))。また、「現在」の場合には、SとEとが同時点である((55c))¹³。

(55) 非状態相の時間関係



(Reichenbach(1947)より転載)

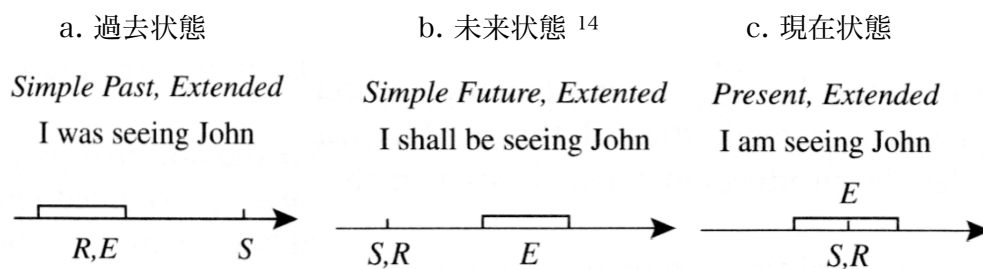
ここで、注目すべきなのは、Rの存在だろう。EやSというのも時間を表す概念なのだが、これと同じ時点にRという別の時間が設定されている。さらに、過去の場合にはこれがEと同時点に設定されている一方で、未来の場合にはこれがSと同時点に設定されている、という非対称性がある。Reichenbach(1947)ではこのことの根拠については特に述べられていない。

次に、「Extended+時制」で表されるものについて見る。これは、いわゆる進行相と呼ばれるもので、本稿の「状態相」に当たる。このタイプは、Eが時間幅をもつものとして示されているという点で、上の「非状態」のものと異なる。「過去」の場合にはEがSに先行し((56a))、「未来」の場合にはSがEに先行し((56b))、「現在」の場合にはEがSを含む((56c))、という形になっている。

¹² ここでは、本稿での呼び名に合わせて、Reichenbach(1947)で“-Extended”とされているものを「状態相」、“-Extended”のないものを「非状態相」、“-Perfect”とされているものを「完了」と呼ぶ。また、“-Simple”に当たるのは「非完了」に当たるが、この場合は記述しない。

¹³ 本稿では現在非状態は存在しないという立場をとっているのので、現在非状態を認めるReichenbachとこの点で異なるように見える。しかし、ここで挙げられている「see」のように非状態相で現在を表すことができ、かつ「I am seeing John」のように状態相にもできる動詞はさほど一般的ではない。例えば、「run」のような一般的な活動動詞の場合には、「I run」のように完結相で現在を表すことはできないので、この完結相現在の例は特殊な事例と見るべきだろう。

(56) 状態相の時間関係

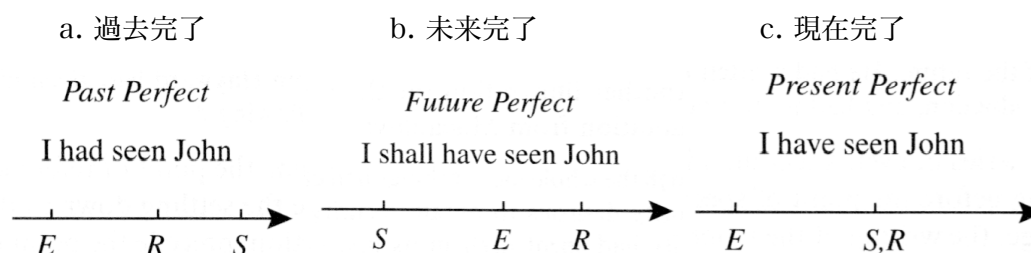


(Reichenbach(1947)より転載)

また、上で見た「非状態」と異なる点として、RとEの関係がある。この場合、「過去」と「現在」の場合には、RがEに含まれるものとして示されているが、「未来」の場合にはRがSと同時点にあるとされている。このように、「状態相」の場合も上の「非状態相」の場合同様に「過去」と「未来」とは非対称的になっている。

最後に、「Past+時制」で表されるものについて見る。これは、本稿で言う「完了」に相当するものである。完了については、既に述べたように、EがRに先行している関係を表す。そして、時制が「過去」の場合はRがSに先行し((57a))、「未来」の場合はSがRに先行し((57b))、「現在」の場合はRとSが同時点にある((57c))。

(57) 完了の時間関係



(Reichenbach(1947)より転載)

以上、Reichenbachによる「状態/非状態」「完了/非完了」「過去/現在/未来」の組み合わせの時間関係の記述を概観した。

Reichenbachの時間関係図で特徴的なのは、全てのタイプについてS、R、Eという3つの時間が関係しているという点と、「状態相」と「非状態相」の場合に、「過去」と「未来」が非対称的な関係になっているという点だろう。

2.4.1.2. 工藤(1995)の時間関係図

工藤(1995:126-127)でも、テンスとアスペクトの組み合わせの表す意味が次の3つの時

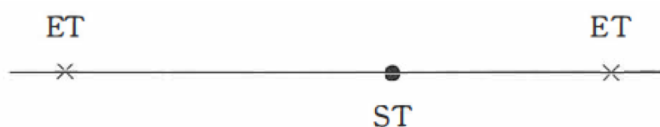
¹⁴ Reichenbach(1947)は非完結相未来の場合にも発話時にRがあるとしているが、この根拠についても論じられていない。本研究では、後述するように、非完結相はEがRを含む(過去・未来・現在共に)とする立場をとる。

間の関係で表されている。ETは出来事時を表し、RTは設定時、STは発話時を表す。これらはそれぞれ、ReichenbachのE、R、Sに対応していると言っていいだろう。

- (58) a. ET : 出来事時
b. RT : 設定時
c. ST : 発話時

まず、完成相(本稿の「非状態相」)について見る。「過去」の場合にはETがSTに先行し、「未来」の場合にはSTがETに先行している((59))。

- (59) 完成相(非状態相)

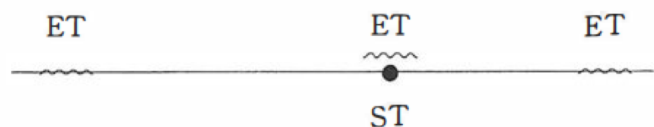


(工藤(1995:126)より転載)

これ((59))を見ると分かるように、工藤による非状態相の記述では、Reichenbachの記述とは異なり、RT(R)が存在しない。

次に、継続相について見る。これは、本稿の状態相に当たる。過去の場合にはETがSTに先行しており、未来の場合には逆にSTがETに先行している。現在の場合には、ETがSTを含んでいる。((60))

- (60) 継続相(状態相)

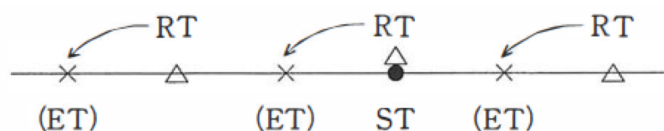


(工藤(1995:126)より転載)

これ((60))状態相については、Reichenbachとの違いとして、RT(R)が存在しないという点がある。

最後に、パーフェクトについて見る。これは、本稿の「完了」に当たる¹⁵。これについては、Reichenbachと同じ時間関係を表していると言っていいだろう((61))。

- (61) パーフェクト(完了)



(工藤(1995:126)より転載)

¹⁵ ただし、工藤(1995)の場合は過去非状態の「タ」もパーフェクトを表すという立場をとっているので、形態との対応という意味では、厳密には本稿の完了と同じものとは言えない。

以上、工藤(1995)で示されている時間関係について見てきた。工藤の時間関係図の特徴としては、パーフェクト以外の場合にはRTが存在しないという点がある。工藤の時間関係図はこれらの点で、Reichenbach(1947)のものと対照的だと言えるだろう。

これは、工藤(1995:99)では、RTがパーフェクトを特徴付けるためのものとして導入されているためだと考えられる。工藤によると、パーフェクトとは出来事を設定時(RT)と関わりのあるものとして述べるものだということである。パーフェクトのもつこのような特徴を説明するためのものとしてRTが導入されているため、RTがパーフェクトの場合にのみ存在することになっているのではないかと思われる。

2.4.2. 時間関係図記述の準備

次節から、本稿の提案する時間関係図式について見ていくが、その前に、Reichenbach(1947)や工藤(1995)の時間関係図についての補足・修正を行う。まず、記述時の時間の「幅」の扱いについての補足を行う。そして、R(RT)の扱いについて考察を行った上で、E(ET)についての補足説明を行う。

また、以下では出来事時(E/ET)を「 t_e 」と記述し、発話時(S/ST)は「 t_s 」、設定時(R/RT)は「 t_r 」と記述する。そして、「時」を総称的に表す時は単に「 t 」と記述する。

2.4.2.1. 時間の幅

Reichenbach(1947)や工藤(1995)の時間関係図((55)～(61))では、 t_e や t_r 、 t_s 等の各 t は、状態相の場合以外には、基本的には時間幅のないものとして捉えられ、点で示されている。しかし、本稿では、これらは基本的には点ではなく、幅をもつものとして記述する。以下にその理由を示す。

まず、 t_e の時間幅について考える。

2.2.1.1で見たように、「状態相」と「非状態相」の違いは出来事の時間幅の違いではない。また、「太郎は10分間走った。」のように、状態相だけでなく、非状態相も時間幅をもつ出来事を表せることから、 t_e を常に「点」として表すことはできないと考えられる。

次に、 t_r の時間幅について考える。

t_r については、「花子が部屋に入った時、太郎は走っていた。」のような文であれば、確かに「点」として捉えるべきかもしれないが、「花子が見ている間、太郎は走っていた。」という文の場合には、「花子が見る」というの持続期間の全体において、「太郎が走る」が起きていたことが意味されている。このため、 t_r もやはり常に「点」的な時間だとは考えにくい。

最後に、 t_s の時間幅について考える。

t^s についても、次のように、時間幅を考えないと、説明できない場合がある。例えば、話者が、太郎が走っているのを見て、「太郎が走っています。」という発話を行おうとしたとする。しかし、実際には、この話者が「太郎が…」まで発話した時点で、太郎が転んでしまったとしよう。すると、この人が文の残りの部分(「走っています」)を発話する時点では、太郎はもう走っていないことになる(その時点で太郎は地面に転がっているはずである)。このような場合、話者が「走っています」と最後まで言い切るのは不自然である。これは、発話が時間幅をもつために生じる現象である。このため、 t^s についても、「幅」の存在を想定する必要があるだろう。¹⁶

以上のことから、時間関係図内では、出来事時や設定時、発話時といった各時間は点でなく幅として捉えるべき場合があることがわかる。ただし、一般化した時間関係を示す際に点と線を混在させて表記することは、混乱を招くと考えられるため、本稿では基本的にこれらの時間を幅のあるものとして記述する。

2.4.2.2. 設定時(R/RT)の有無

上で見たように、Reichenbach(1947)と工藤(1995)の時間関係図((55)～(61))は共通点が多いが、R(RT)の存在の有無という点で、違いがある。以下では、このR(RT)の有無という点について考察する。両者は完了の記述については一致しているが、非状態相と状態相の記述については違いが見られる。

非状態相については、Reichenbachの図((55))では過去非状態(Simple Past)は $E=R$ となっており、未来非状態(Simple Future)は $S=R$ となっている。一方、工藤((59))は非状態過去(完成相過去)も非状態未来(完成相未来)も R は存在しない。

状態相については、Reichenbachの図((56))では過去非状態(Simple Past, Extended)は $E=R$ であり、 E が時間幅をもつという記述となっている。一方、未来非状態(Simple Past, Extended)は $S=R$ であり、 E が時間幅をもつという記述となっている。一方、工藤((60))は過去非状態(完成相過去)も未来非状態(完成相未来)も R は存在せず、 E が時間幅をもつという記述となっている。

このように、Reichenbachと工藤の時間関係図は異なる。本稿では、 t^s といった概念が真偽判定に必要か否かという観点から、「テイ」と「タ」の組み合わせの表す時間関係図について検討する。もし、 t^s の存在を想定しなくても文の叙述内容の真偽判定が下せるのであれば、 t^s の存在を想定する必要はないと考えられる。逆に、 t^s の存在を想定しなければ真偽判定が行えないのであれば、 t^s の存在を想定する必要があるだろう。

¹⁶ 従属節の場合には、必ずしも時制が発話時基準で定まらずに、主節の出来事時などが基準で定まる(橋本1995, 橋本1996, 丹羽1996, 丹羽1997, 丹羽2001, 岩崎2001等)場合もあるが、本稿では、主節の文末に来て発話時基準で時制が定まるもののみを扱う。

2.4.2.2.1.非状態相の場合

まず、非状態相の場合について考える。

はじめに、以下の(62)のような完結相過去の場合について考える。この文が真となる条件は、発話時以前に t_e が開始し、かつ、終了している場合である。もし、 t_e が t_s を含んでいると、以下の文は真とはならないので、 t_e 全体が t_s に先行している必要がある。これを「 $t_e < t_s$ 」と記すとする、 $t_e < t_s$ の関係は過去非状態を真とする必要かつ十分な条件だと言うことができる。

(62) 太郎は酒を飲んだ。(過去非状態)

このように見ると、過去非状態は t_e と t_s の関係だけで真偽判定ができ、 t_e の存在を想定する必要がないことがわかる。また、過去非状態の時間関係は次のように示せる。

(63) 過去非状態：

- a. t_e は t_s を含まない。
- b. t_e は t_s に先行する。

未来非状態についても、同様のことが言える。以下の(64)が真となる条件は、発話時以降に t_e が開始し、かつ終了する場合である。もし、 t_e が t_s を含んでいると、以下の文は真とはならないので、 t_e 全体が t_s に後続している必要がある。これを $t_s < t_e$ と示すとする、 $t_s < t_e$ の関係は未来非状態の必要かつ十分な条件だと言うことができる。

(64) 太郎は酒を飲む。(未来非状態)

このように、未来非状態についても t_e と t_s の関係だけで真偽判定ができ、 t_e の存在を想定する必要がないことが分かる。また、未来非状態の時間関係は次のように示せる。

(65) 未来非状態：

- a. t_e は t_s を含まない。
- b. t_s は t_e に先行する。

以上見たように、過去非状態及び未来非状態については、 t_e と t_s の関係のみから真偽判定が可能であり、 t_e の存在は想定する必要がないと考えられる。

2.4.2.2.2.状態相の場合

次に、状態相の場合について見る。

工藤(1995)やReichenbach(1947)では、非状態相の場合には $t_e(E, ET)$ が「点」として示され、状態相の場合に $t_e(E, ET)$ が「幅」をもつものとして記述されている((55)~(56), (59)~(60))。しかし、これは適切ではないと思われる。なぜなら、2.4.2.1でも見たが、「太郎は10分間走った」のように、非状態相の場合にも時間幅は存在し得るからである。従って、時間幅の違いで非状態相と状態相の違いを表すことはできない。このため、時間幅以外の違いで非状態と状態の違いを記述する必要がある。

以下では、まず、過去状態の場合について考える。

次の(66)は過去状態だが、上で見た過去非状態の場合と違い、この文が真となるのは必ずしも $t^e < t^s$ の場合だけではない。なぜなら、発話時の時点でまだ太郎が薬を飲んでいる場合であったとしても、以下のように言えるからである。つまり、 t^e が t^s を含んでいても、過去状態は成立する。従って、過去状態の場合、 t^e の開始から終了までの全期間が t^s に先行している必要はなく、 t^e の一部の期間が発話時に先行していればいいと言える。

(66) 太郎は(x秒前/x分前/x時間前)酒を飲んでいた。(過去状態)

このように考えると、 t^e の「一部」を示す時間が必要となる。つまり、 t^e でもなく t^s でもない3つ目の t が必要となるわけである。従って、過去状態の真偽判定には3つ目の時間、即ち t が必要であり、 t は t^e に含まれるという関係にあることが分かる。

(67) 過去状態：

- a. t^e は t を含む
- b. t は t^e に先行する

未来状態についても同様のことが言える。下の(68)が真となるには、 t^e の開始から終了までが t^s 以降にある必要はなく、その t^e の「一部」が t^s 以降に存在していればいい。従って、この場合も t^e の「一部」を表す3つ目の t 、即ち t が真偽判定に必要であることがわかる。

(68) 太郎は(x秒後/x分後/x時間後)酒を飲んでいる。(未来状態)

このことから、未来状態の場合には、 t^e に含まれる t が存在し、かつ、 t は t^s に後続する(= t^s が t に先行する)関係であることが分かる。

(69) 未来状態：

- a. t^e は t を含む
- b. t は t^e に先行する

以上のように、過去状態と未来状態の場合には真偽判定に t が必要であることがわかる。また、このように見ると、状態相の「シテイル」の「テイ」は t が t^e の内部に存在していることを表すものだと考えられる。

現在状態については、少し説明を加える必要があるだろう。なぜなら、以下の(70)のような現在状態の場合、「 t^e が t^s を含む」という条件だけで真偽判定ができてしまいそうに見えるからである。

(70) 太郎は(今)酒を飲んでいる。(現在状態)

もし、現在状態の「テイ」が t^e と t^s の関係を表すものだと想定するとすると、時制が「現在」である場合のみ「テイ」の表す時間関係に t が含まれないということになる。しかし、このように時制によって「テイ」の表す時間関係が t を含むか否かが異なると考えるのは不自然に思える。また、このように考えてしまうと、次の(71)のような文の解釈に問題が生じる。

(71) ヒトの子供は生まれる10週前には言語音を認知している。

(71)の主語「ヒトの子供」は特定の「ヒトの子供」ではなく、総称的な意味で用いられている。即ち、この文は「ヒトは言葉を話す」のような総称文だと言うことができるだろう。「ヒトは言葉を話す」のような総称文はテンスを確定できない文だと言える¹⁷。(71)もテンスのない総称文だと考えられるが、アスペクトについては、「生まれる10週前」の状態を表す状態相であることがわかる(これが「テイ」で表されている)。ここで注目したいのは、このように時制の確定できない文でも「テイ」で任意の時点の状態を表すことはできるという点である。つまり、(71)のようにテンスが確定されていない状態相の文というものもあり得る。このように見ると、状態相の「テイ」の意味は時制(=発話時との時間関係)とは無関係に t_e と t_s の関係だけからのみ規定することができる必要があると考えられる。このことから、(70)のような時制が「現在」の場合にも t_s が存在すると考えるのが自然だろう。そうすると、現在状態は次の(72)のような時間関係を表していると考えられる。

(72) 現在状態：

- a. t_e は t_s を含む
- b. t_s は t_e を含む

2.4.2.2.3.完了の場合

最後に、完了の場合について考える。

まず、以下の(73)のような過去完了の場合について考える。この例の場合、過去のある時点で、既に「アメリカに渡る」という出来事が完了している必要がある。従って、「ある時点」を示す3つ目の t 、即ち t_s が存在し、 t_e がこの t_s に先行している場合に真となる。

(73) 太郎は(x日前/xヵ月前/x年前)既にアメリカに渡っていた。(過去完了)

このように考えると、過去完了の場合には t_s が存在し、 t_e が t_s に先行するという関係があることが分かる。また、この t_s は t_e に先行するという関係にあると言える。このことから、過去完了は次のような時間関係を表すと言えるだろう。

(74) 過去完了：

- a. t_e は t_s に先行する
- b. t_s は t_e に先行する

(75)のような未来完了の場合、未来のある時点で「アメリカに渡る」という出来事が完了している必要がある。従って、「ある時点」を示す3つ目の t 、即ち t_s が存在し、 t_e がこの t_s に先行している場合に真となる。

¹⁷ 例えば、「コアラはユーカリを食べる。」のような総称文では、述語は主語の属性を表し、ある時点において起きた具体的な出来事を表すわけではない。このため、総称文ではそもそも「出来事時」を設定することができず、発話時と出来事時との時間関係も設定することができないと考えられる。

(75) 太郎は(x日後/xヵ月後/x年後)既にアメリカに渡っている。(未来完了)

このように考えると、未来完了の場合にも t^e が存在し、 t^e が t^r に先行するという関係があることが分かる。また、 t^s がこの t^r に先行するという関係にあると言える。このことから、過去完了は次のような時間関係を表すと言えるだろう。

(76) 未来完了：

- a. t^e は t^r に先行する
- b. t^s は t^r に先行する

以上のように、過去完了と未来完了の場合には真偽判定に t^r が必要であることがわかる。また、このように見ると、完了の「シテイル」の「テイ」は、 t^r が存在し、 t^e が t^r に先行していることを表すものだと考えられる。これは、Reichenbach(1947)や工藤(1995)と同じ立場となる((57), (61)参照)。

現在完了については、上で見た現在状態の場合同様、説明が必要だろう。(77)のような現在完了の場合、 t^e が t^s に先行($t^e < t^s$)していれば真となるので、 t^r の存在を想定する必要がないようにも思える。

(77) 太郎は既にアメリカに渡っている。(現在完了)

しかし、現在完了が $t^e < t^s$ だと考えると、現在完了と過去非状態との区別がつかなくなる。また、このように考えると、時制が「現在」の場合だけ t^r が存在しないと想定することになるが、以下の(78)に見るように、上で見た状態相の場合と同様に、完了も無時制の文の中にも現れ得る。この例では、「秋」という時点(t^r)以前に「海を渡る」という出来事の時(t^e)が存在していることが表されているが、「秋」(t^r)と発話時(t^s)との時間関係は指定できない。つまり、これは無時制の完了の文である。

(78) この種の渡り鳥は「夏鳥」と言われ、秋には既に海を渡っている。

このように見ると、完了の「テイ」の意味は時制とは無関係に規定することができる必要があることが分かる。従って、時制が「現在」の場合だけ「テイ」に t^r が存在しないと考えるべく、この場合にも t^r が存在すると考えるべきだろう。そうすると、現在完了は次のような時間関係を表していると考えられる。

(79) 現在完了：

- a. t^e は t^r に先行する
- b. t^r は t^s を含む

以上のことから、状態相と完了の場合には、 t^r が存在し、非状態相(非完了)の場合は、 t^r が存在しないと結論づけることができる((80))。

- (80) a. 非状態(非完了) : [t^e , t^s]の関係
- a. 状態 : [t^e , t^r , t^s] の関係
 - b. 完了 : [t^e , t^r , t^s] の関係

このように、本稿の提案する時間関係は、非状態(非完了)の場合には t^r が存在しないとい

う点で、Reichenbach(1947)のものとは異なり((55)参照)、状態の場合に*t*が存在するという点で、工藤(1995)のものとは異なる((60)参照)。また、このように考えれば、状態と非状態の区別を出来事の時間幅で表す必要がないこともわかる。

2.4.2.3. 出来事時(*t_e*)の「出来事」について

ここまで、「出来事時」という用語をなんとなく用いてきたが、「出来事時」という場合の「出来事」とは何を表すのだろうか。以下では、この点について考える。

次の(81a)は動作動詞、(81b)は変化動詞であるが、この場合、述語の表す「出来事」とは、それぞれ(82a)、(82b)のような場面だと言えると思う。

- (81) a. 太郎は10分間走った。
b. あ、窓が開いた。
- (82) a. 走り始めてから、止まるまで。
b. 窓が閉まっていない状態から、閉まった状態への変化

この場合、出来事「時」とは、この場面の持続している時間だと言えるだろう。つまり、前者は動作が持続していた時間であり、後者は変化が起きた時間が「出来事時(*t_e*)」だと言えるだろう。

しかし、次のような例はどうだろうか。上の例と同様に(83a)が動作動詞、(83b)が変化動詞だが、この場合、述語が表す出来事は上とは異なる(高橋1985:34-35, 44-45参照)。この場合は、それぞれ(84a)(84b)のような場面を表していると見るべきだろう。

- (83) a. あ、走った！
b. 窓が10分間開いた。
- (84) a. 走っていない状態から走っている状態への変化
b. 窓が開いてから、閉まるまで。

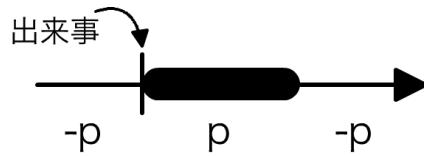
つまり、この場合は、先の(81)の場合とは逆に、前者が変化を表しており、後者が持続期間を表していると言える。この場合、出来事時というのは、「走り始めの瞬間」や「開いてから閉じるまで」の時間だということになるだろう。

このように見ると、「走る」のような動作動詞も、「開く」のような変化動詞も、それぞれが(85a)(85b)の二つの場面を表し得ることが分かる。仮に、「走っている/開いている」状態を*p*、「走っていない/開いていない」状態を¬*p*とすると、(86a)(86b)のように示せる。

- (85) a. ¬*p*から*p*への変化の場面
「あ、窓が開いた。」 「あ、走った！」
b. ¬*p*から*p*への変化時点から*p*から¬*p*への変化までを含んだ場面
「太郎は10分間走った」 「窓が10分間開いた」

(86)

a.



b.



このように見ると、「走る」や「開く」という述語が用いられた時に、「出来事(時)」が何を表すかは、動詞そのものからだけでは決定できないことが分かる。

(85a)のタイプを、これが変化時点を表すことから「 $[\neg p \rightarrow p]$ 」と示し、(85b)のタイプを、これが開始時点から終了時点までの間を表すことから「 $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ 」と示すことにする。そうすると、ここでは、「走る」も「開く」も、どちらも「 $[\neg p \rightarrow p]$ 」と「 $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ 」の両方を表せる、ということになる。

通常は、「走る」のような動作動詞は「 $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ 」を表すために使用されることが多く、「開く」のような変化動詞は「 $[\neg p \rightarrow p]$ 」を表すために使用されることが多いと思うが、ここで見るように、必ずしもそうではない、ということが分かる。¹⁸¹⁹

また、(87)に見るように、動詞によっては、「 $[\neg p \rightarrow p]$ 」を表す際にも「 $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ 」を表す際にも同程度によく使用されるものもある(鈴木1979:13)。

(87) a. $[\neg p \rightarrow p]$: 10分前に{寝た/黙った/乗った}。

b. $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$: 10分間 {寝た/黙った/乗った}。

ここで、このように、動詞の表す場面に関する二義性を認めると、次のような疑問が生じる。それは、(88)のように「テイ」を使って言った場合に、それが出来事のどの場面を表すのか、というものである。

(88) a. 太郎が走っている。

b. 窓が開いている。

例えば、(88a)や(88b)のように言った場合、「走る/開く」を「 $[\neg p \rightarrow p]$ 」だと考えると、「テイ」が表す場面は、出来事時に後続する場面だということになる。一方、これを「走る/開く」を「 $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ 」だと考えると、「テイ」が表す場面は、出来事

¹⁸ ここで言う $[\neg p \rightarrow p]$ の局面は、いわゆる「起動相」によって表される局面だと言える。ただ、「死ぬ」のような動詞については、一般的には起動相とは捉えにくいかもしれないが、本稿の立場では、これも $[\neg p \rightarrow p]$ の局面を表すという点において「あ、走った!」の場合の「走る」と同じものとして考える。

¹⁹ ここでは、 $[\neg p \rightarrow p]$ の局面と $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ の局面の両方を表せる動詞について見てきたが、実際には、これらのうちどちらしか表せない動詞も存在する。例えば、「着く」のような動詞は前者しか表せず(「??電車が3分間駅に着いた」)、「働く」のような動詞は後者しか表せない(「??あ、太郎が働いた!」)。これは、動詞が内在的にもつ語彙的な意味によるものだと考えられるが、本稿ではこの議論には立ち入らない。(この点について、より詳しくは、Igarashi & Gunji 1998を参照)

の開始から終了までの間の場面だということになる。このように、「テイ」がどの場面・局面を表しているか、ということ対し、(89a)と(89b)の2種類の解釈が生まれてしまう。

- (89) a. $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ の間
b. $[\neg p \rightarrow p]$ の後

この問題について、本稿では、次のように考える。

まず、二種類の解釈があること自体に、問題はないと考える。なぜなら、「テイ」は「状態」と「完了」の両方の意味を持ち、(89a)は「状態」にあたり、(89b)は「完了」に当たると考えればいいからである。

次に、どのような場合にどちらの解釈になるのか、という点について見る。ここでは、この点について詳しい分析は行わず、典型的なものだけを挙げておく。

まず、次に述べるような理由から、(90)のような文は、「 $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ 」の「間」の場面を表しており、(91)のような文は「 $[\neg p \rightarrow p]$ 」の「後」の場面を表していると考ええる。

- (90) a. あ、太郎が走ってる。
b. あ、窓が開いてる。
(91) a. あ、{いつの間にか/知らないうちに}太郎が走ってる。
b. あ、{いつの間にか/知らないうちに}窓が開いてる。

(90)が「 $[\neg p \rightarrow p] \sim [p \rightarrow \neg p]$ 」の「間」を表すと考えられる理由は、話者が「走る」という出来事の開始や「開く」という出来事の開始を認識していないからである。もちろん、人が走っていたり、窓が開いていたという状態が存在すれば、必ずその状態に至る「変化」というものがあつたと考えるのが自然だが、この場合、話者がそのような変化を意識しているとは考えにくい。

一方、(91)の場合のように、「いつの間にか/知らないうちに」というような表現と共に用いられるということは、話者は「変化」が存在したことを前提としていていると考えられる。このことは、これらの以下に見るように、「いつの間にか/知らないうちに」のような表現が、純粹に状態を表す表現とは共起しにくいことを見ればわかる。(92)のaは形容詞、bは名詞、cは状態動詞、dはいわゆる第四種の動詞に「テイ」を付加したものである。

- (92) a. ??(外に出て)あ、{いつの間にか/知らないうちに}寒い。
b. ??(久しぶりに孫に会って)あ、{いつの間にか/知らないうちに}学生だ。
c. ??(冷蔵庫を開いて)あ、{いつの間にか/知らないうちに}ケーキがある。
d. ??(クラスの生徒の成績一覧を見て)あ、{いつの間にか/知らないうちに}太郎の成績がずばぬけている。

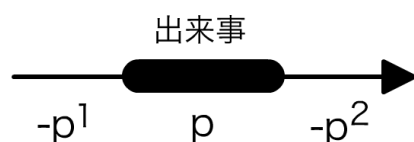
このように、述語そのものが「変化」を含意できないようなものが共起できないような表現と共起するということは、「テイ」を含む述語部分が「変化」の意味を表していることを示していると見ていいだろう。

このように、述語部分が同じ「走っている/開いている」という形態で表されていたとしても、この「テイ」と出来事との時間関係には、二種類の解釈があり得る。これは、上で見たように、「走る/開く」にそもそも二種類の解釈が存在することから来ている。

以上、「動作動詞」や「変化動詞」が表す出来事には、「変化」局面($\neg p \rightarrow p$)を捉えるか「持続」局面($\neg p \rightarrow p \sim p \rightarrow \neg p$)を捉えるかの二種類の捉え方があると考えられることを見た。

また、ここでいう「出来事」には、「走る/開く」のような動作性のものに限らず、「寒い」のような形容詞や「学生だ」のような名詞、「ある」のような状態動詞も含まれる。例えば、「寒い」であれば、出来事は以下の図の「寒くない状態($\neg p^1$)」と「寒くない状態($\neg p^2$)」に囲まれた「寒い状態(p)」の部分を表す((93))。

(93)



ここで生じる疑問として、「哺乳類だ」のように時間概念に縛られない属性を表すものについて、どう考えるのか、という点がある。例えば「コアラが哺乳類でない状態($\neg p$)」というのは考えられないからである。しかし、実際には、このことは問題とならない。なぜなら、状態相は、非状態相と違い、開始点と終了点を含むことができないからである。状態相の場合、「 p 」である部分のうちの任意の時点・期間を切り取れるだけである。このことから、状態性述語についても、「出来事」は「 p 」である区間だと定めることができる。

このように、ここでは、①動作性述語の場合、述語が表す「出来事(時)」には二種類の解釈があることと、②状態性述語も出来事として捉えられることを見た。

2.4.3. 本稿の時間関係図

ここでは、2.4.2で見た分析に基づいて、「状態/非状態」「完了/非完了」「過去/現在/未来」の組み合わせの表す時間関係を図示していく。

以下では、アスペクト部分とテンス部分の表す意味を区別して表記するために、まず、アスペクト部分を表す図を表し、次に、アスペクト部分とテンス部分が組み合わされた図を表す。(本稿では、2.4.2.2で見たような理由から、 t^e が存在する場合には時制が t^s と t^e の関係から決定され、 t^s と t^e の関係が時制の決定に関わらないという立場をとる。このようなことから、 t^e の有無(アスペクト部分)をまず確定し、その後、 t^e がある場合は t^s と t^e の関係、ない場合は t^s と t^e の関係(テンス部分)を確定するべきだと考える。)

2.4.3.1. 非状態相の時間関係図

ここでは、非状態相、及び非状態相と時制の組み合わせの時間関係について見る。

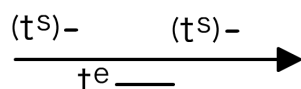
上で見たように、非状態相は過去も未来も、「 t^e が t^s を含まない」という特徴をもつ。また、 t^e が存在しない、という特徴をもつ。このことから、「非状態相」は、次の(94)のような時間関係を表していると言える(この時点では時制は含まない)。

(94) 非状態相(時制を除く)：

t^e が他の t を含まない。

このことから、非状態相は次の(95)のように図示できるだろう。図では t^e がなく、 t^e と t^s の関係が示されている。また、 t^e が他の t を含めないことから、 t^s は t^e の外側にあることになる。なお、この時点では、まだ時制は特定されていないため、 t^s は()つきで記述してある。

(95) 非状態相(図)：



このような、非状態相の表す意味に時制を付け加えると、次の(96)のようになる。

(96) 非状態相の時制：

- a. 過去： t^e が t^s に先行する
- b. 未来： t^s が t^e に先行する

これを図示すると、次の(97)のようになる。

(97) 非状態相の時制(図)

a. 過去非状態

b. 未来非状態



以上、「非状態相」の意味、及び「過去非状態」「未来非状態」の表す時間関係を確認した。

2.4.3.2. 状態相の時間関係図

ここでは、状態相、及び、状態相と時制の組み合わせの時間関係について見る。

(23)～(25)で見たように、名詞文や形容詞文、状態動詞文などについては、動作性の動詞の状態相と同じ特徴をもつため、これらについても、ここに含まれることになる。

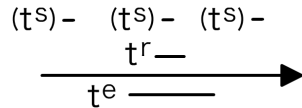
上で見たように、状態相は「 t^e が t^s を含む」という特徴をもつ。従って、次の(98)のような時間関係を表していると言える(この時点では時制は含まない)。

(98) 状態相(時制を除く)：

t^e が t^r を含む。

このことから、状態相は下の(99)のように図示できる。図で t^e が t^r を含むという関係が示されている。この時点では、まだ時制は特定されていないため、 t^s は()つきで記述してある。

(99) 状態相(図)：



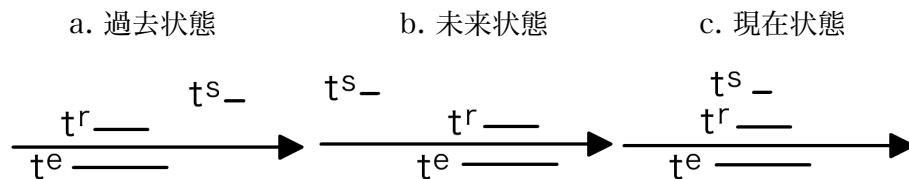
これに時制を付け加えると、次の(85)のようになる。

(100) 状態相の時制：

- a. 過去： t^r が t^s に先行する。
- b. 未来： t^s が t^r に先行する。
- c. 現在： t^r が t^s を含む。

これを図示すると、以下の(101)のようになる。²⁰

(101)



以上、「状態相」の意味、及び「過去状態」「未来状態」「現在状態」の表す時間関係を確認した。

2.4.3.3.完了の時間関係図

ここでは、完了、及び完了と時制の組み合わせの時間関係について見る。

既に見たように、完了は t^e が t^r に先行するという関係を表す。従って、完了の表す時間関係は、次の(102)のように言える(この時点では時制は含まない)。

(102) 完了(時制を除く)：

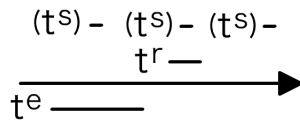
t^e が t^r に先行する。

このことから、完了は以下の(103)のように図示できる。図では t^e が t^r に先行するという関係が示されている。この時点では、まだ時制は特定されていないため、 t^s は()つきで記

²⁰ ここでは、過去の場合には t^e が t^r 以前に終了しており、未来の場合には t^e が t^r 以降に開始されるものとして図示されているが、これは一例である。2.4.2.2.2で、みたようん実際には、過去の場合、 t^e は必ずしも t^r 以前に終了している必要はなく、未来の場合、 t^e は必ずしも t^r 以降に開始していなくてもいい。

述してある。

(103) 完了(図)



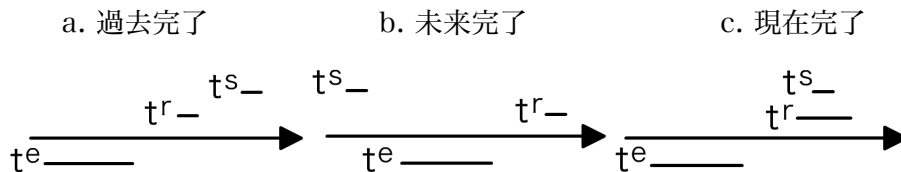
これに時制を付け加えると、次の(104)のようになる。

(104) 完了の時制：

- a. 過去： t^r が t^s に先行する。
- b. 未来： t^s が t^r に先行する。
- c. 現在： t^r が t^s を含む。

これを図示すると、次の(105)のようになる。²¹

(105)



以上、「完了」の意味、及び「過去完了」「未来完了」「現在完了」の表す時間関係を確認した。

2.4.4. 時間関係算定プロセス記述の準備

ここまで、各 t の間の関係について見てきたが、2.4.3の冒頭で述べたように、全ての t 同士の関係が意味の区別に貢献しているわけではない。例えば、「状態」や「完了」の場合、 t^s と t^e の時間関係は、意味の区別には貢献していない。従って、上の時間関係図は、各意味が表す時間関係を厳密には示しているとは言えない。

このため、次節から、この「テイ」と「タ」の有無の組み合わせの表す時間関係を二項対立の形で記述するが、本節では、そのための準備として、この二項対立関係の原理について見ていく。

2.4.4.1.3つの関係(「含む・先行する・後続する」)の算定プロセス

ここまでの分析から、各 t の間の関係には、ある t が別の t を「含む」関係と、「先行する」関係、そして「後続する」関係とがあることが分かる。この3つ関係の組み合わせ

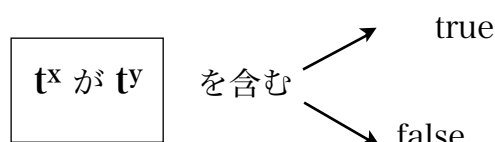
²¹ ここでは、未来完了の場合に t^e が t^s 以前に開始するものとして図示されているが、これは一例である。 t^e は t^s 以前でありさえすればいいので、 t^s 以前に開始している場合もあり得る。

で、テンス・アスペクトの表す時間関係が成立している。ここでは、この3つの関係の組み合わせが、どのような算定プロセスから算出されるかについて、算定の流れを二項対立的に表すことで、示していく。

まず、「含む」関係と、それ以外(「先行する・後続する」関係)とを分けるプロセスについて見る。

ある t (仮に「 t^x 」)と別の t (仮に「 t^y 」)との関係の中で、 t^x が t^y に「先行する」関係と t^x が t^y に「後続する」関係は、 t^x が t^y を「含む」関係が偽の場合だけ成立する。従って、 t^x が t^y を「含む」関係が成立しない場合のみ、「先行」か「後続」かの区別をすればいい。²²このことから、(106)のように「含む」関係を判定するプロセスが「先行/後続」関係を判定するプロセスに先行して存在していると考ええる。

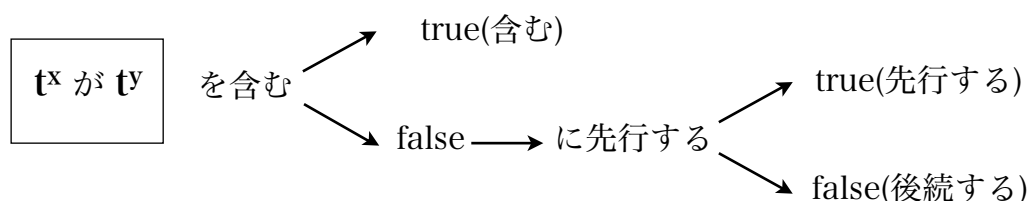
(106)



次に、「先行する」「後続する」関係について見る。

この判定処理は、「含む」関係の判定処理が偽だった場合にのみ、問題になる。ここで、「 t^x が t^y に先行するかどうか」を判定し、これが真であれば、 t^x が t^y に「先行する」関係となる。そして、これが偽の場合、 t^x が t^y に「後続する」関係となる。ここで、 t^x が t^y に後続するか否かの判定は不要だと考える。なぜなら、「含む」関係と「先行する」関係が共に偽と判定された時点で、「後続する」関係だけが真となる場合だけが残るからである²³。これを図示すると、次の(107)のようになる。

(107)



これが、「含む・先行する・後続する」という t 間の関係を算定するプロセスの流れで

²² 論理的には、 t^x が t^y 以前に開始し、かつ t^y の時点でまだ持続しているという事態(つまり、 t^x と t^y とがオーバーラップしている状況)もあり得るが、2.4.2.2で見てきたことから、そのような時間関係が言語における時間計算にとって有意となるケースは存在しないと考えられる。

²³ 論理的には、ここで、 t^x が t^y と「部分的に」重なっている状態を想定することも可能である。しかし、そのような t 間の関係を表すテンス・アスペクト形式は存在しないので、ここでは、そのような関係ははじめから除外されているものとする(例えば、1時から2時までが t^x で、1時半から2時半までが t^y 、というような関係を表すことはそもそもできない)。

ある。以下では、これらの組み合わせで、各テンス・アスペクトが表す時間関係を記述していく。

2.4.5. 時間関係算定プロセス

ここからは、以上見てきた時間関係算定の基本プロセスを組み合わせることで、「テイ」と「タ」の有無の組み合わせから生じる時間関係を表記していく。

以下では、まず、「非状態相」の時間関係算定プロセスについて見、次いで、「状態相」、「完了」の時間関係算定プロセスについて見る。そして、最後に、これらの時間関係算定プロセスを一般化した規則を示す。

2.4.5.1. 非状態相

ここでは、非状態相の時間関係算定処理について見る。

2.4.3.1で見たように、非状態相は $[t^e, t^s]$ の2つの t から成り立ち、非状態相と時制の組み合わせは、この2つの t の以下のような関係を表している。

(108) 非状態相：

t^e が他の t を含まない。

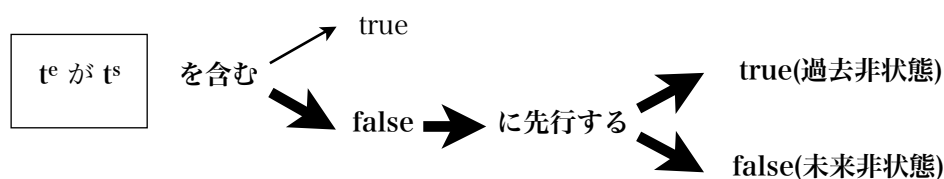
(109) 非状態相の時制：

a. 過去： t^e が t^s に先行する

b. 未来： t^e が t^s に後続する

これを、上記のフローチャートで示すと、次の(110)のように示せる。なお、太線(矢印)は、判定結果の方向を表す。上で見たように、 t^e は他の t を含まないため「含む」関係は必ずfalseになる。このことで、非状態相が「現在」を持たず、「過去」と「未来」のみとなることが示されている。

(110)



このように、非状態相は「過去」か「未来」となる。以上が、非状態相の時間関係算定プロセスである。

2.4.5.2. 状態相

ここでは、状態相の時間関係算定処理について見る。

ここには、動詞に「テイ」が付加されて状態相化されたもの以外にも、名詞述語文や形容詞述語文、状態動詞が述語となっている文などのいわゆる状態性述語も含まれる。

2.4.3.2で見たように、状態相は、 $[t^e, t^r, t^s]$ の3つの t から成り、状態相と時制の組み合わせは、この3つの t の以下のような関係を表している。

(111) 状態相：

t^e が t^r を含む。

(112) 状態相の時制：

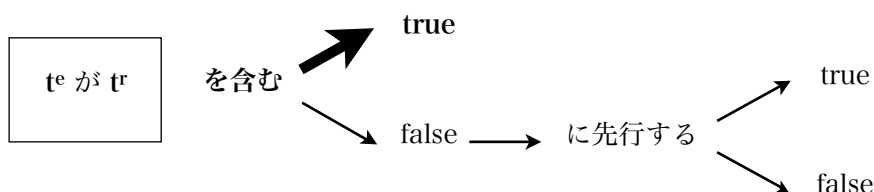
a. 過去： t^r が t^s に先行する。

b. 未来： t^s が t^r に後続する。

c. 現在： t^r が t^s を含む。

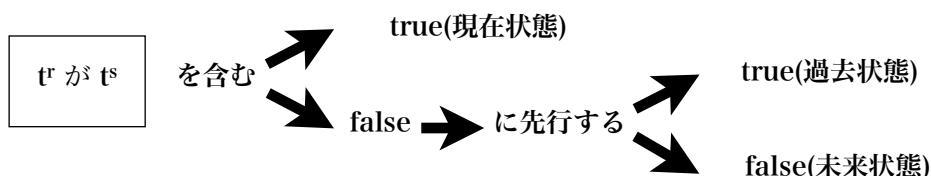
このように、状態相の場合、「 $t^e \sim t^r$ 」関係と「 $t^r \sim t^s$ 」関係から成り立っている。まずはじめに、「 $t^e \sim t^r$ 」関係が算定される。この関係は、(111)にある通り、「含む」関係なので、(113)のように示される。

(113)



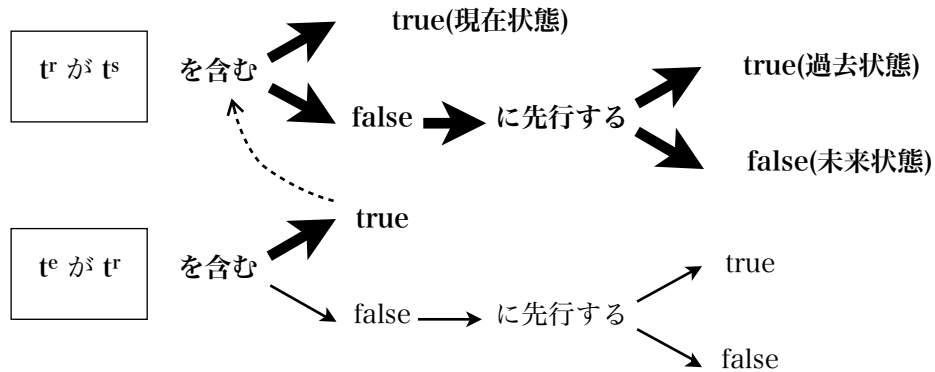
次に、「 $t^r \sim t^s$ 」関係が算定される。この関係は、(112)のa～cにある通り、3種類があり得る((114))。

(114)



以上の2つの算定の流れをまとめて表すと、(115)のようになる。以下の図は二つの算定プロセスから成り立っているが、上で見た一つ目の算定プロセス((113))が、下段に示されたもので、二つ目の算定プロセス((114))が、上段に示されたものである。二つの算定プロセスの間にある点線(矢印)は、下段の算定プロセスが終了した段階で、上段の算定プロセスに進むことを示している。

(115)



以上のように、「状態相+時制」のように3つの $t(t^e, t^r, t^s)$ の間の2つの関係($t^e \sim t^r, t^r \sim t^s$)を表すものの場合、算定処理は上下二段の2階建て構造になる。ただし、算定の流れ自体は1階目も2階目は同じで、算定対象となる t が入れ替わっている (1回目は t^e と t^r で、2回目は t^r と t^s) だけである。言い換えると、算定対象となる t だけが入れ替わり、同じ算定処理が2度繰り返されていることになる。

以上が、状態相の時間関係算定プロセスである。

2.4.5.3.完了

ここでは、完了の時間関係算定処理について見る。

2.4.3.3で見たように、完了も状態相同様、 $[t^e, t^r, t^s]$ の3つの t から成り、完了と時制の組み合わせは、この3つの t の以下のような関係を表している。

(116) 完了：

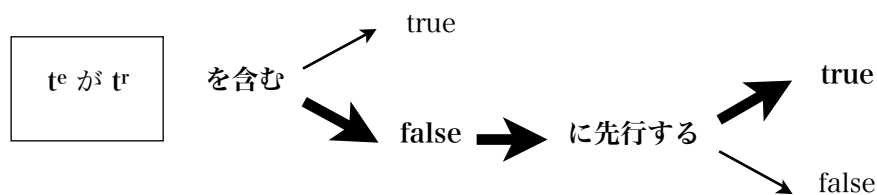
t^e が t^r に先行する。

(117) 完了の時制：

- a. 過去： t^r が t^s に先行する。
- b. 未来： t^r が t^s に後続する。
- c. 現在： t^r が t^s を含む。

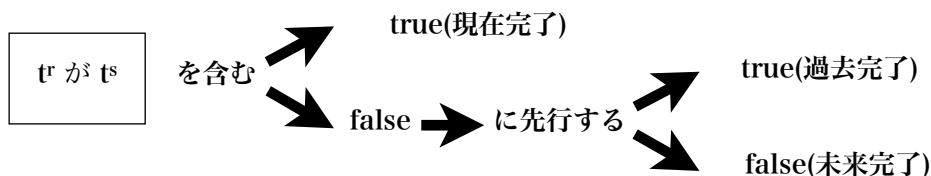
このように、完了の場合も「 $t^e \sim t^r$ 」関係と「 $t^r \sim t^s$ 」関係から成り立っている。まずはじめに、「 $t^e \sim t^r$ 」関係が算定される。この関係は、(116)にある通り、「先行する」関係なので、以下の(118)ように示される。

(118)



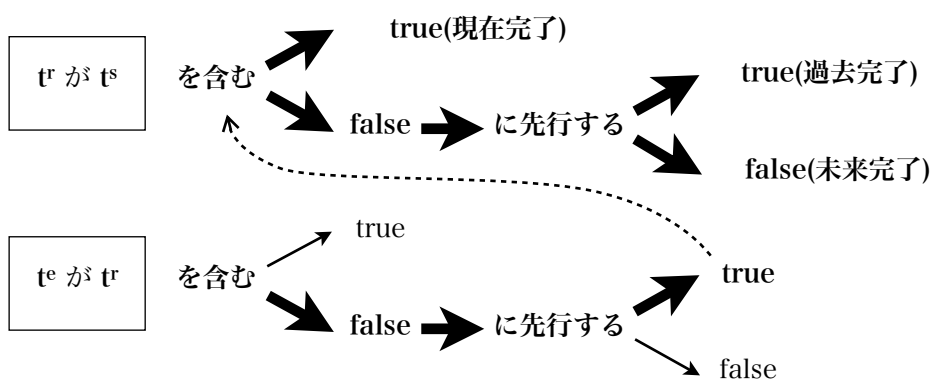
次に、「 $t^r \sim t^s$ 」関係が算定される。この関係は、(117)のa～cにある通り、3種類があり得る。((119))

(119)



以上の2つの算定の流れをまとめて表すと、以下の(120)のようになる。状態相の図と同様に、上で見た一つ目の算定プロセス((118))が、下段に示され、二つ目の算定プロセス((119))が、上段に示されている。

(120)



以上のように、「完了+時制」の場合も、状態相の場合同様に算定処理は2階建てになる。ここでも、算定対象となるtだけが入れ替わり、同じ算定処理が2度繰り返されていることがわかる。

以上が、完了の時間関係算定プロセスである。

2.4.5.4. 時間算定処理の一般化

ここまで、非状態相・状態相・完了のそれぞれの時間関係を算出する時間関係の算定プロセスについて見てきた。上ではこれらの算定プロセスを個別に見てきたが、ここでは、このこれらの算定プロセスを一般化した形で表すことで、テンス・アスペクトの組み合わせで表される時間関係が非常にシンプルな算定プロセスの組み合わせによって成り立っていることを示したい。

まず、テンス・アスペクトの表す時間関係を、改めて、各tの連鎖として捉え直したい。既に見たように、テンス・アスペクトの表す時間関係は二つのtの間の関係の組み合わせである。状態相や完了のように3つのtの間の時間関係を表しているものであっても、実際に表しているのは「 t^e と t^r の関係」と「 t^r と t^s の関係」という二種類の関係である。このよ

うな関係を「 $t^e \sim t^r \sim t^s$ 」と記述し、これを算定対象時間の連鎖として捉える。そうすると、非状態・状態・完了の各場合において、算定対象時間の連鎖は次の(121)のようになっている。

- (121) a. 非状態相 : $t^e \sim t^s$
 b. 状態相 : $t^e \sim t^r \sim t^s$
 c. 完了 : $t^e \sim t^r \sim t^s$

非状態は「 $t^e \sim t^s$ 」の関係を表すので、(121a)のように、状態相は「 $t^e \sim t^r$ 」の関係、「 $t^r \sim t^s$ 」の関係を表すので、(121b)のように表せる。完了については、状態相同様なので、(121c)のように表せる。ここで、例えば、「 $t^e \sim t^r$ 」などを書いたとしても、 t^e が t^r よりも時間的に先だということを表しているわけではないことに注意されたい。これは、あくまでも、「 t^e と t^r の関係」という意味を表しているに過ぎない。

これを、表にすると、次のようになる。

(122)

| | 算定対象のtの連鎖 |
|------|-----------|
| 非状態相 | t^e |
| 状態相 | t^e |
| 完了 | t^e |

ここで、それぞれの場合において、左側のtから「 t^1 、 t^2 、 $t^3 \dots$ 」のように、tと数字の組み合わせで表すと、非状態相の場合、「 $t^e = t^1$ 」「 $t^s = t^2$ 」となり、状態相と完了の場合は「 $t^e = t^1$ 」「 $t^r = t^2$ 」「 $t^s = t^3$ 」となる。これは、次のような表で示せる。

(123)

| | t | t | t |
|------|---|---|---|
| 非状態相 | t | t | |
| 状態相 | t | t | t |
| 完了 | t | t | t |

そうすると、上で見た、非状態相・状態相・完了の各時間関係算定図は、次のように書き直せる。

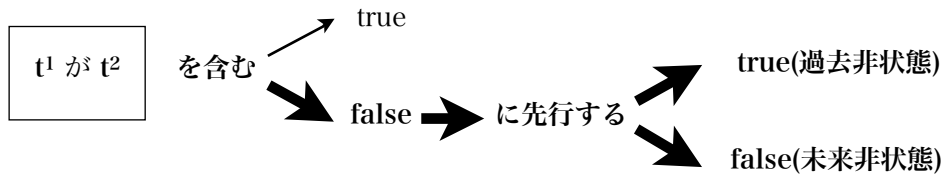
まず、非状態相の場合、(124)のようになる。(123)の表の通り、 t^1 が t^e を表し、 t^2 が t^s を表す。また、上で「 t^e と t^s 」の関係として表されていた部分((124b)の四角内)が、「 t^1 と

t^2 」の関係が変わっている。

(124) a.

| | |
|---|---|
| t | t |
| t | t |

b.

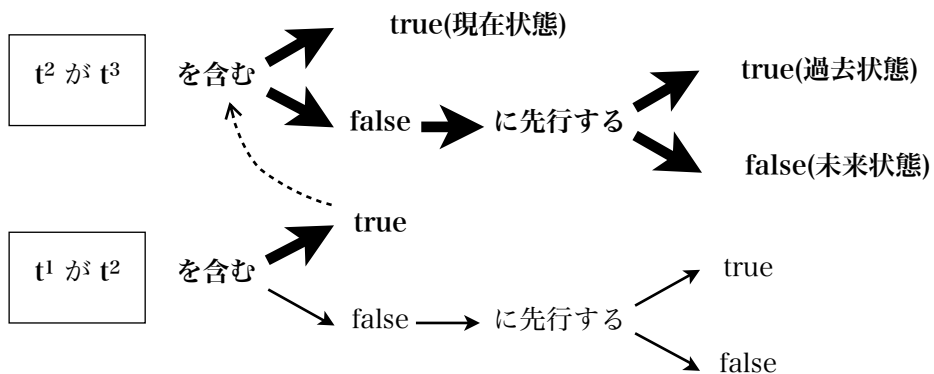


状態相の場合は、(125)のようになる。(123)の表の通り、 t^1 が t^e を表し、 t^2 が t^r を、 t^3 が t^s を表す。また、上の図(115)では、下段は「 t^e と t^r 」の関係として表されていたが、それが「 t^1 と t^2 」の関係に変わっており、上段は「 t^r と t^s 」の関係として表されていたが、それが「 t^2 と t^3 」の関係に変わっている。

(125) a.

| | | |
|---|---|---|
| t | t | t |
| t | t | t |

b.

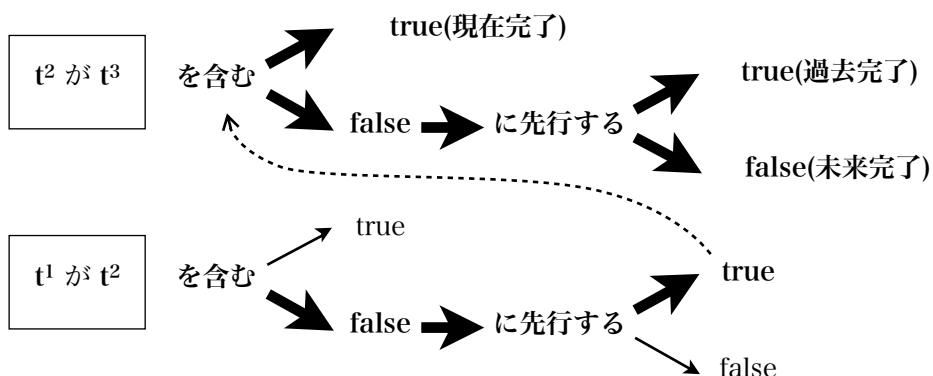


完了の場合、(126)のようになる。状態相同様に、(123)の表の通り、 t^1 が t^e を表し、 t^2 が t^r を、 t^3 が t^s を表す。また、上の図(120)では、下段は「 t^e と t^r 」の関係として表されていたが、それが「 t^1 と t^2 」の関係に変わっており、上段は「 t^r と t^s 」の関係として表されていたが、それが「 t^2 と t^3 」の関係に変わっている。

(126) a.

| | | |
|---|---|---|
| t | t | t |
| t | t | t |

b.



以上のように、「 t^e , t^r , t^s 」を「 t^n 」(n は数字)の形で一般化することによって、テンス・アスペクトの表す時間関係の算定プロセスは、次のように一般化できる。

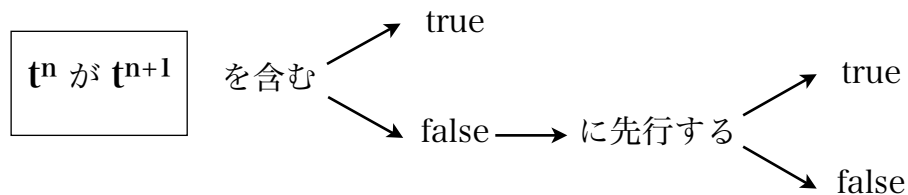
まず、算定処理の回数について、非状態相のフローチャートが1階建てとなっており、状態相と完了のフローチャートが2階建てとなっていることから分かる通り、非状態相は1回の算定処理、状態相と完了は2回の算定処理がなされていることが分かる。これは、非状態相の場合には t が2つしかなく、状態相と完了の場合には t が3つあるということと関係している。それぞれの階層は「 t と次の t 」との関係を表すものであるため、この関係は「 t の総数-1」となる。このため、処理の回数(=階層の数)は「 t の総数-1」となる。

また、1階層目(下段)は t^1 と t^2 の関係を、2階層目(上段)(がある場合)は t^2 と t^3 の関係を算定しているが、これは、言い換えると、階層が上がる度に「 t^n 」の「 n 」の部分が、1ずつ加算されているということである。

なお、1階層目が「 t^1 」から始まることからわかるように、「 n 」の初期値は1である。

これをまとめると、次のようになる。

(127) 処理：



(128) a. nの初期値は1である。

b. 「tの総数-1」回処理を繰り返す。

c. 処理が次の段階に入る時、nに1を加算する(n=n+1)。

この式に、[t^e, t^s]を代入すると、非状態相の時間関係((124))が得られ、[t^e, t^r, t^s]を代入すると、状態相((125))、及び完了((126))の時間関係が得られることになる。(t^eがt^rを含む場合は「状態相」で、t^eがt^rに先行する場合は「完了」)

このように見ると、「状態/非状態」「完了/非完了」「過去/現在/未来」の組み合わせの表す時間関係は、非常に単純な算定処理の繰り返しにより、得られることが分かる。なお、ここでは2階建て構造までの処理について見ているが、次章で見るように、3階建て構造になる場合も存在する²⁴。しかし、この場合であっても、この処理の繰り返しであることには変わりがない。

2.4.6. 形態との対応

ここまで、テンス・アスペクトの表す時間関係の違いを、時間関係の算定処理の違いにより、示してきた。以下では、それぞれの時間関係を表すテンス・アスペクトと、テンス・アスペクトを表す形態との対応関係について見ていく。

2.4.6.1. テンス・アスペクトの形式

時間関係は「テイ」と「タ」の有無という、二組の二項対立の組み合わせで表される。従って、形態としては次の4パターンがある(ここではまず、動作性の動詞についてのみ見る。名詞文や形容詞文などの状態性述語については、次で述べる。)

²⁴ 「太郎は3年前の時点で既に結婚している」のような文が3階建てのケースとしてある(「太郎は3年前の時点で既に結婚していた」は単なる過去完了で2階建て)。これについては次章(3.2.4.3)で論じる。

(129)

| | 「テイ」なし | 「テイ」あり |
|-------|--------|--------|
| 「タ」なし | スル | シテイル |
| 「タ」あり | シタ | シテイタ |

このような観点から見ると、非状態相・状態相・完了と時制のそれぞれの組み合わせは、「テイ」と「タ」の有無から、次のように示すことができる。

(130)

| | | 「テイ」 | 「タ」 | 形態 |
|------|----|------|-----|------|
| 非状態相 | 過去 | × | ○ | シタ |
| | 未来 | × | × | スル |
| 状態相 | 過去 | ○ | ○ | シテイタ |
| | 未来 | ○ | × | シテイル |
| | 現在 | ○ | × | シテイル |
| 完了 | 過去 | ○ | ○ | シテイタ |
| | 未来 | ○ | × | シテイル |
| | 現在 | ○ | × | シテイル |

このような形態の組み合わせが、上で見た時間関係図・及び時間関係算定図とどのような規則で対応しているのかが説明される必要がある。以下では、対応規則について見ていく。

2.4.6.2. 時間関係と形態との対応関係

以下では、まず、「テイ」の有無と意味との対応規則について見、次いで、「タ」の有無と意味との対応規則について見る。

2.4.6.2.1. 「テイ」の<時間関係-形態>対応規則

まず、「テイ」という形態と、意味との対応規則について見る。

ここで言う「意味」とは、時間関係のことを表す。では、「テイ」はどのような時間関係の場合に付加されるのだろうか。

「テイ」が使われるのは、状態相と完了の場合である。2.4.2.2.2~2.4.2.2.3で見たように、この二つの共通点として、「 t_e をもつ」という点、即ち、「 t_e と t_s 以外の t をもつ」という点がある。従って、このような $t(=t_e)$ を持つのであれば、「テイ」が付加され、そうでなければ、「テイ」が付加されない、という一般化が可能である。(ただし、名詞述語文や形容詞述語文、状態動詞が述語となっている文などは、そのままの形で「テイ」が付加された後の意味(=状態)と同様の意味をもっているため、「テイ」は付加されない。)

(131) 「テイ」の付加条件：「 t_e と t_s 以外の t 」が設定されている場合、「テイ」が付加される。(ただし、動作性の動詞の場合のみ)

2.4.6.2.2. 「タ」の<時間関係-形態>対応規則

次に、「タ」という形態と、時間関係との対応規則について見る。

「タ」が使われるのは、(i)非状態相の場合は、「 t_e が t_s に先行する」関係である場合、(ii)状態相の場合は、「 t_e が t_e に先行する」関係である場合、(iii)完了の場合は、状態の場合同様に、「 t_e が t_e に先行する」関係である場合、である。

このように見ると、「タ」が付加されるのは、「 t_s のひとつ前の t が t_s に先行する」関係の場合であると一般化できる。例えば、非状態相の場合、「 t_s のひとつ前の t 」は「 t_e 」であるので、これが「 t_s 」に先行する場合、「タ」が付加される。また、状態相と完了の場合は、「 t_s のひとつ前の t 」は「 t_e 」であるので、これが「 t_s 」に先行する場合、「タ」が付加される。

従って、「タ」の付加条件は次のように一般化できる。

(132) 「タ」の付加条件： t_s のひとつ前の t が t_s に先行する場合、「タ」が付加される。

2.4.6.3. 時間関係と形態との対応規則、及び、「テイ」と「タ」の意味

以上で見た、時間関係とテンス・アスペクト表現(「テイ」及び「タ」)との対応規則をまとめると、次のような2つの規則(形態規則A・形態規則B)にまとめられる。

(133) 時間関係と形態の対応規則

- a. 形態規則A：「 t_e と t_s 以外の t 」がある場合、「テイ」を付加せよ。
- b. 形態規則B： t_s のひとつ前の t が t_s に先行する場合、「タ」を付加せよ。

このような一般化でもって、上で見た状態相・非状態相・完了と時制の組み合わせにおける、形態と時間関係との対応関係を全て説明することができる。

また、このような「意味-形態」の対応関係は、見方を変え、それぞれの形態がどのような意味を表しているのかを示すものともとれる。即ち、「テイ」と「タ」のもつ意味

(時間関係)は、次のように示せる。

- (134) a. 「テイ」の意味：
 t^e と t^s 以外の t が存在する。
 b. 「タ」の意味 ：
 t^s の一つ前の t が、 t^s に先行する。

これは、「意味-形態」の対応規則を異なる言い方で言い換えただけだが、「テイ」や「タ」の意味を一般化できるという点で重要である。

まず、「テイ」について見る。これまで、「状態」と「完了」という、全く異なるように見える二つの意味を持っているという点についての原理的な説明はなされてこなかった。しかし、ここで示されたように、「状態」と「完了」は出来事時(t^e)と発話時(t^s)を直接結びつけるのではなく、別の設定時(t)を介して結びつける、という点において共通している。つまり、「テイ」は、出来事と発話時との間に、別の設定時が介されている、ということの意味するのだと言うことができる。

一方、「タ」は発話時と、一つ前の t との時間関係を表すものだと言うことができる。既に述べたように、出来事時(t^e)と発話時(t^s)の関係は必ずしも「タ」の有無に関わらない。例えば、完了の場合、「 t^e 」は「 t^s 」に先行するという関係をもつが、このことは、「タ」が付加される理由とはならない。「タ」の有無は、あくまでも発話時(t^e)と一つ前の t との時間関係を表すのであり、完了の場合、「一つ前の t 」というのは「 t^e 」のことである。このように、「タ」は発話時と一つ前の t との時間関係が先行関係であるか否かを表すものである。

2.5. まとめ

以上、「テイ」「タ」の二組の二項対立が、「状態/非状態」と「時制(過去/現在/未来)」の組み合わせで5種類の意味を、「完了」と時制の組み合わせを加えると8種類の意味を生み出すプロセスについて見てきた。

まず、「状態/非状態」と「過去/現在/未来」の組み合わせで5種類の意味が生み出される((135))という点についてまとめる。「タ」の有無という形態上での「二項」対立が、「過去/現在/未来」という意味上での「三項」対立に対応するという点については、次のように説明できる。

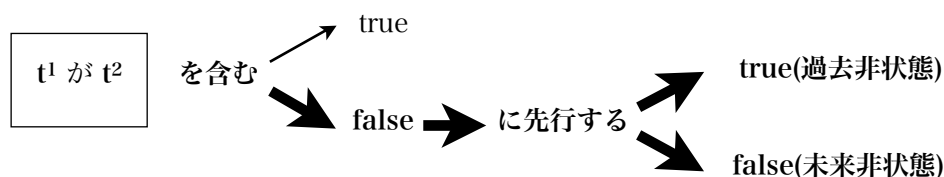
(135)

| | 過去時制 | 現在時制 | 未来時制 |
|--------|-------|------|-------|
| 動詞・非状態 | 過去非状態 | | 未来非状態 |
| 動詞・状態 | 過去状態 | 現在状態 | 未来状態 |

実は、時制は「過去/現在/未来」という三項の対立ではなく、「 t^x が t^y を含むか否か」という二項対立と、「 t^x が t^y に先行するか否か」という二項対立という、二種類の二項対立から成り立っている。このうち、前者がfalseの場合にのみ後者の対立が成立するため、計3種類の対立となるわけである。

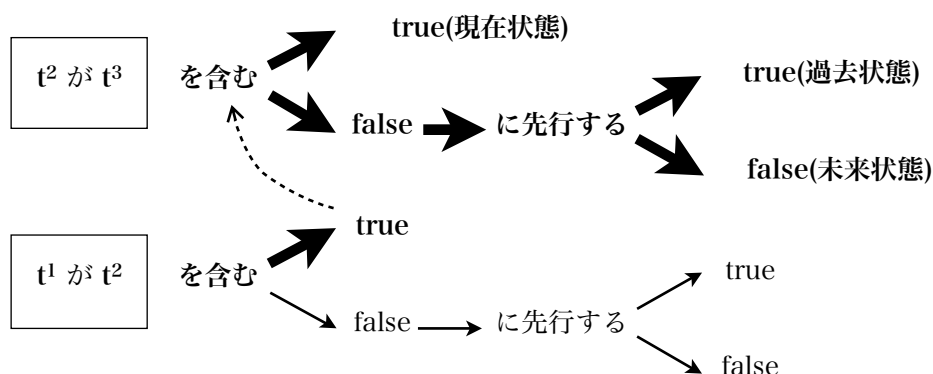
「 t^x が t^y を含むか否か」という二項対立については、一階層目でこれがtrueであった場合には必ず t^x が存在し、二階建ての構造となっているという点がポイントである。このことで、一階建ての場合(即ち非状態相の場合)は「 t^x が t^y に先行する」という関係か「 t^x が t^y に後続する」という2つの時間関係しかあり得ないことが説明される((136))。

(136) [t^e , t^s]



一方、内部視点(t^i)をもつ状態相の場合は、一階層目で「 t^x が t^y を含む」関係になるので、必ず二階層目に進むことになる。そして、ここで、「含む」「先行する」「後続する」の三通りの組み合わせが可能のため、3つの時間関係があり得ることになる((137))。

(137) [t^e , t^i , t^s]

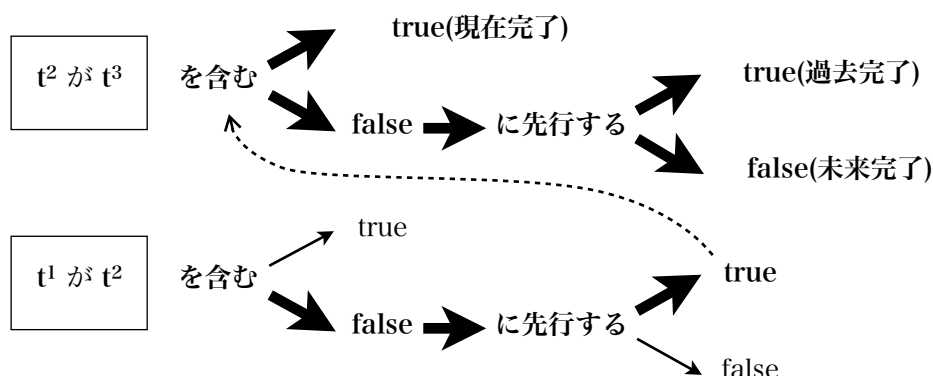


以上のことから、「状態/非状態」と「過去/現在/未来」の組み合わせで5種類の意味が生み出されることになる。

「完了」については、一階層目で「先行する」関係になっており、かつ、 t が3つ存在す

るという点が重要である。tが2つしか存在しない場合、一階層目で「過去非状態(非完了)」であることが確定するが、この場合はtが3つ存在するので、二階層目に進む。そして、ここで、「含む」「先行する」「後続する」の三通りの組み合わせが可能なため、3つの時間関係があり得ることになる。((138))

(138) [t^e, t^r, t^s]

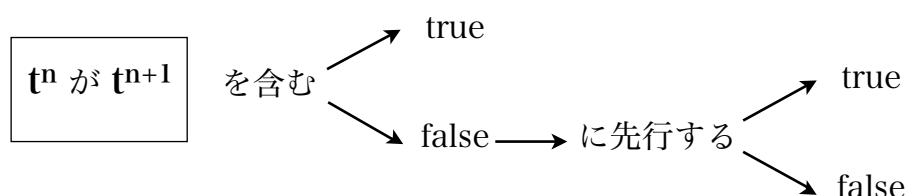


以上のようにして、完了を含めると、計8種類の時間関係が得られる。

以上の算定過程は、以下のように一般化することができ、このような意味(時間関係)の算定プロセスと、形態との対応関係は、次のような対応規則で説明できることを見た。

- (139) a. nの初期値は1である。
 b. 「tの総数-1」回処理を繰り返す。
 c. 処理が次の段階に入る時、nに1を加算する(n=n+1)。

(140) 処理：



- (141) a. 形態規則A：「t^eとt^s以外のt」がある場合、「テイ」を付加せよ。
 b. 形態規則B：t^sのひとつ前のtがt^sに先行する場合、「タ」を付加せよ。

このような単純な処理過程及び対応規則で、二組の二項対立から、8種類の意味が生じる過程について見てきた。また、次章で見るように、三階建て以上の構造をもつ(3.2.4.3で見る)ような場合についても、この算定処理及び形態との対応規則で説明が可能である。

第3章

間接的把握によるtの設定

3.1. 本章について

ここまで見てきたことから、日本語の「テイ」と「タ」の表す時間関係がどのようなものかが分かった。ここからは、実際の言語使用場面において、これらがどのように使われるかについて、上で見た時間関係分析をもとに考察していきたい。

「テイ」や「タ」は一般的に時制やアスペクトと呼ばれ、時間関係を表す概念であるとされている。しかし、実際の言語使用場面を見ると、単に時間関係を表しているだけでなく、話し手の何らかの認識を反映しているように感じられる場合がある。

例えば、過去に起きた出来事を、話し手が直接把握していない場合、その出来事を単純に過去形を用いて言うのは不自然である。

次の(142)のように、何らかの記録から、出来事があったことを知ったような場合、単純に過去形で言うのは不自然だろう。

(142) ??(勤怠表を確認して)あれ、太郎昨日休んだ。

しかし、ここで面白いのは、このような場合でも(143)のように「テイ」を使えば自然に言えてしまうという点である。

(143) (勤怠表を確認して)あれ、太郎昨日休んでる。

また、次の(144)のように、他人の心理状態のような直接把握不可能な出来事を述べる場合も、単純に過去形を用いて言うのは不自然である。

(144) ??あなたの話を聞いて、太郎が呆れたよ。

この場合も、(145)のように「テイ」を使えば自然になるという点は興味深い。

(145) あなたの話を聞いて、太郎が呆れてたよ。

このように、「タ」や「テイ」の有無と話し手の認識との関係はこれまでの研究で多く指摘されてきている。このようなことから、「テイ」に関しては、これがアスペクトを表すものではない可能性も指摘されている(柳沢1994、定延2006、定延2008)。ただ、これらの研究でも、「テイ」がアスペクトとしての意味を持つこと自体が否定されているわけではない。従って、重要なのは、非アスペクト的に見える「テイ」の使われ方と、アスペクト的に見える「テイ」の使われ方との関係だろう。

「同様の議論は、「タ」に関しても存在する。「タ」は、これが時制というよりも話し手の態度を表しているようだとする見方(三上1953、金田一1955、寺村1984等)も多いが、

最近では、そのような「タ」も時間関係の中で捉え、過去を表す「タ」との関わりの中で分析されることが多い(金水1998、井上2001、定延2001, 2004)(このような「タ」については次章で扱う)。

このように、「テイ」や「タ」は、これらが表す①話し手の認識と、その認識が②どのような時間関係の中で捉えられるか、という点を分析することで、なぜ当該の認識が当該の形態(「テイ」と「タ」の有無の組み合わせ)で実現されるのかを説明することができるだろう。

本章では、このような観点から、次の二つの問題について考察する。一点目は、話し手が「記録・痕跡」により出来事を把握した際の「タ」および「テイ」の振る舞い、二点目は、話し手が「様子」により出来事を把握した際の「タ」及び「テイ」の振る舞い、である。従来の研究では、これらの問題として個別に扱われており、相互の関係が構造的に示されることはなかった。本章では、従来の研究では取り上げられてこなかった現象も含めてこれらの問題を再度考察し、これを前章で見た時間関係の観点から捉え直すことで、これらの現象が同じ枠組みで捉えることができるものであることを示し、意味と形態との対応関係を明らかにしたい。

3.2. 「記録・痕跡による把握」とtの設定

3.2.1. 背景

ここでは、話者が出来事を直接把握したか、もしくは出来事の残した記録や痕跡を把握したか否かで「タ」と「テイ」の有無が使い分けられるものについて見る。これについては、先行研究で既に明らかにされている、次のような現象がある。

過去の出来事を表すには、過去非状態の形を用いるのが最も基本的だと考えられるが、話者が当該の出来事を直接把握していなかったり、忘れていたりした場合に、その出来事を現在完了の形で表す場合がある(工藤1995、柳沢1994、井上2001等)。

例えば、次の(146)のように、話者が過去に起きた出来事を忘れてしまっており、記録から、その出来事が起きたことを把握したという場合がある。この例では、話者は「太郎」、出来事は「薬を飲む」、記録は「日記」である。このような場合、aのように現在完了の形で言うのが自然で、bのように過去非状態の形で言う那不自然になる。

(146) (太郎は一昨日薬を飲んだかどうか忘れてしまった。日記で調べたところ、飲んだと記録されているのを発見した際の発言)

花子：一昨日薬飲んだの？

a. 太郎：ええと...、(日記の中に、薬を飲んだという記述を発見して)あ、飲んでる。

b. ??太郎：ええと...、あ、飲んだ。

このように、出来事を直接把握しているか、記録・痕跡から把握しているかによって、テンス・アスペクト形式が使い分けられるという現象の存在が明らかにされている。この

ことから、このようなものは「テイル」の「記録用法」などと呼ばれる。

しかし、記録・痕跡の把握とテンス・アスペクト形式にかかわる現象の中には、これを「テイル」の用法としただけでは解決できない問題が存在する。

例えば、次の(147)の例の場合は「選手名鑑」という記録から、「現役だ」という出来事が取得されており、記録・痕跡から出来事が把握された例である。ここでも、普通に予測されるテンス形式とは異なる形式が用いられている。普通であれば、「現役」というのは過去の出来事なので、「タ」を用いてbのように「現役だった」とするのが自然なはずであるが、ここではaのような「タ」なしの形のほうが自然になる。ここでは、「テイル」の付加とは異なる方法で、「記録・痕跡」からの出来事の把握が表されている。

(147) (太郎選手の記録を調べている新聞記者二人が)

A: 太郎は3年前にはもう引退してたんじゃないのか?

B: ええと、ちょっと待ってください。3年前の選手名鑑を見えます。

(選手名鑑を調べて)

a. あ、太郎載ってる。太郎は3年前はまだ現役だ。

b. ??あ、太郎載ってる。太郎は3年前はまだ現役だった。

このように、記録・痕跡により把握された出来事を述べる際には、普通に予測されるテンス・アスペクト形式とは異なる形式が使用される場合があるが、これは、先行研究で指摘されてきた「テイル」の場合に限らない。このため、このような現象は「テイル」の用法のひとつとして捉えるのではなく、テンス・アスペクトシステム全体の中で捉える必要があるだろう。以下では、このような観点から考察を行っていく。

3.2.2. 先行研究

3.2.2.1. 「テイル」の記録用法

本稿での現在完了に当たる「テイル」の存在については、金田一(1955:37)や藤井(1960:105)などで既に指摘されており、このような「テイル」は<経験>と呼ばれたりしてきた。例えば、「あの人はたくさんの本を書いている」と言った場合には、書写中の意味でも使用できるが、「著述が多い」という意味でも用いることができる。前者であれば、継続の意味(本稿の状態相)ととれるが、後者の場合、むしろ、そのような経験をもっているという解釈が自然だろう。このことから、藤井はこの用法を「経験」と名付けている。

(148) a. あの人はたくさんの本を書いている。(書写中である)

b. あの人はたくさんの本を書いている。(著述が多い)

(金田一(1955:37)より引用。下線は筆者による。)

既に述べたように、このような現在完了の「テイル」が面白いのは、示している事実としては、過去非状態と変わらないという点である。つまり、「あの人はたくさんの本を書いた」と言っても、「あの人はたくさんの本を書いている」と言っても、起きた出来事自

体は同じである。そうすると、両者の違いが何であるのか、という点が問題になる。

このような問題に対して、「テイル」は「経験」を表す、という説明だけでは十分ではない。過去にある人がある行為を行ったのであれば、その人はその経験を持っていることになるが、もし、それを「テイル」で表すとなると、全ての出来事が現在完了で表されてもおかしくないはずである。しかし、実際には過去非状態と現在完了とは使い分けられている。従って、現在完了を特徴づけるような、より詳細な分析が必要である。

工藤(1982)は、この、過去非状態(工藤の用語では完成相過去)と現在完了(工藤の用語では現在パーフェクト)の違いについて、より詳細な考察を行っている。ここで、工藤は、現在完了の「テイル」を過去非状態の「タ」と置き換えられない「記録用法」と、置き換えられる「過去の用法」に分類している。これらは、それぞれ(149)、(150)のようなものである。

(149) 記録用法(「タ」との置き換え不可)

- a. 中山種が大室よしのに宛てた葉書によると、種は昭和二十四年七月に霧積で八尾出身の人物Xに会っています(??会いました)

(「人間の証明」)

- b. 女事務員はその原簿を取って操っていたが、「この方は昭和二十年三月二日に届けが出ています(??出ました)」

(「砂の器」)

(工藤(1982:78)より引用。下線及び()内は筆者による追加。)

(150) 過去の用法(「タ」との置き換え可)

- a. そのことはこの間、はっきり知らないとお答えしてるでしょう(お答えしたでしょう)。

(「人間の証明」)

- b. しかし君はおとしも出席が悪くて落ちてるぞ(落ちたぞ)

(「二十一歳の父」)

(工藤(1982:79)より引用。下線及び()内は筆者による追加。)

この記録用法について、井上(2001)は次のような分析をしている。

- (151) 「「現存する記録や痕跡では出来事pが実現されたことになっているが、出来事pが実現された時の経過は把握できていない」という場合「シタ」は使えず、そのかわりに「シテイル」が用いられる」(井上2001:111)

このように考えれば、冒頭で見たような例で、なぜ「飲んだ」が不自然になり、「飲んでいる」が自然になるのかが説明できる。このような記録用法は、庵(2001)や本多(2001)

等でも現在完了の「テイル」の分類として認められている。¹²

なお、先行研究では敢えては触れられてはいないが、ここで次の点を補足しておきたい。それは、この「テイル」が、単に記録や痕跡が残されているということを述べるだけのものではなく、「出来事が実際に起きた」ということを含意している、という点である。

例えば、上の(146)の状況で、下の(152a)のように言っても、(152b)のように言っても構わないと思われる。しかし、両者の大きな違いとして、(152a)はこの出来事が起きたことを含意している(少なくとも話者はそう信じている)一方で、(152b)の場合、実際には出来事は起きていない可能性もある、という点がある。

(152) a. あ、一昨日薬飲んでる。

b. あ、一昨日薬飲んだ{みたい/らしい/って書いてある}。

このように、この「テイル」を用いることで、(A)「直接には把握していない」ということと、(B)「出来事が確実に起きた」ということとを同時に意味できるのである。これは、(152b)内の推量や伝聞形式の表現では意味できないことであり、この記録用法に特徴的なものだと言えるだろう。

3.2.2.2. 「対話」と「歴史的叙述」

上で、話者が直接把握していない出来事については、過去非状態の「タ」の形で表現するのが不自然であることを見た。しかし、次のような場合については、どう説明できるだろうか。このような場合、教師がこの出来事を直接把握しているわけではないが、記録用法の「テイル」を使用せず、過去非状態の「タ」で述べている。

(153) (歴史の教師が)「アリストテレスはアカデメイアでプラトンに会いました。」

上で見た(149a)の例では、「会いました」は不自然で「会っています」にしなければならなかったが、この例では、「会いました」でも自然に言える。しかし、この(153)のような発話と前の(149a)のような発話とでは、そもそも発話の種類が異なる。この(153)のような発話は、通常の会話ではなく、歴史の教師が歴史的事実について述べるような際になされるものである。では、なぜ、このような違いが、テンス形式の自然さに関わってくるのだろうか。

福田(2002)は、このような問題を、「対話」と「歴史的叙述」の違いと確言の文の過去

¹ 本多(2000)は西日本方言で完了を表す「シトル」形式についてのものだが、ここで挙げられている例については、標準後の「シテイル」に置き換えても同じことが言える。本多では、この用法は「evidential」と呼ばれている。また、evidentialについては、トルコ語の時制に直接経験と間接経験を表す2つの形式があることなどが指摘されている(Slobin & Aksu, 1982)。

² いわゆる「結果状態」の「テイル」についても同じ現象が存在することが指摘されている(生越1997, 井上2001, 井上・生越・木村2002)。例えば、部屋に入って花瓶が倒れているのを発見した場合に「倒れた」とは言いにくく、「倒れている」と言うのが自然である。

時制の自然さの関係、という観点から考察している。福田の取り上げるのは、状態相の文であるが、現象としてはここでの問題と共通しているので、ここで取り上げる。

以下の(154a)と(154b)とでは、文が表している内容は同じである。しかし、前者は単に「棲んでいた」と言っても自然だが、後者の場合には、このように確言の文で表すのは不自然である。この場合、「みたいだ」等の推量表現を補う必要があるだろう。

(154) a. おおよそ1億年前、この辺りは海だった。ウミガメの祖先やアンモナイトが棲んでいた。

b. A: 1億年ぐらい前は、この辺は海だったんだって。

B: へえ。じゃ、首長竜とかいたのかな。

??A: さあね。ウミガメの祖先やアンモナイトは棲んでいたけどね。

(→棲んでいたみたいだけど)

(福田(2002:31)より引用。下線及び()内は筆者による。)

まず、(154b)が不自然になるのは、次のような理由による。状態相につく「タ」は、通常、話し手が当該の出来事(状態)の情報を直接取得することができる時が過去に存在した場合にのみ許容される。しかし、(154b)の話者が1億年前の時点での状態についての情報を直接取得したとは考えられない。人に聞いたり、本で読んだりすることによって、その情報を取得したと考えられる。従って、「タ」が不自然になるわけである。

しかし、その一方で(154a)が自然であるのは、これが「対話」ではなく、「歴史的叙述」であるためである。話者が「歴史的叙述の語り手」として情報を述べる場合には、「対話」の場合のように、当該の時点における情報を直接取得したかどうかということは関係がなく、直接取得したかのように「タ」を使用して述べるのであり得るのである。

金水(1989:123)で言われている「報告」と「語り」の二分類も、これと同種の問題によるものと思われる。金水(1989)では、心理状態を表す形容詞について、小説や昔話の地の文のような「語り」の場合には、他者の心理状態を表す形容詞が自然に使えるが、そうでない、通常の対話で聞き手に状況を知らせるような「報告」の場合にはこれが不自然になることを指摘している。

例えば、以下の(155a)のように「太郎は水が欲しかった」という文は、小説などの地の文でならば使用できるが、(155b)のように会話文の中に入れると不自然になる。つまり、「語り」の場合には使用できるが、「報告」の場合には不自然になる。

(155) a. 太郎は水が欲しかった。

b. A: その時、太郎はどんなだった？

??B: うん、水が欲しかった。(→欲しいようだった)

(金水(1989:122)より引用。下線及び()内は筆者による。)

このようなことから、金水(1989)は、直接把握できない他者の心理状態などについて述べる場合には、「タ」のような単純過去は、「語り」の場合には使用できたとしても、「報告」の場合には使いにくいとしている。

このように、言語表現のモードとして、福田の「歴史的叙述」や金水の「語り」に当たるようなモードと、福田の「対話」や金水の「報告」に当たるようなモードという、2種類のモードがあることが分かる。前者のモードの場合には、過去の事実を述べる際に当該の出来事を直接把握したり、当該の状態についての情報を直接取得したりしていなくても、そのまま過去時制で述べることができるが、後者のモードの場合には、そのような場合には単純に過去時制で述べることは難しい。(同様の現象は定延(2001:65)でも触れられている)

これらの例は、状態性述語の過去形の例(金水1989)や、動作動詞の過去非状態の例(福田2002)であるため、ここで見ている現在完了の例とは同じものではない。しかし、これは、現在完了の「テイル」の記録用法が過去非状態の「タ」と置き換えられないという現象と通じるものではないだろうか。つまり、ここで見ている「テイル」の記録用法は、「歴史的叙述」や「語り」というモードではない、通常の会話のモードの場合には、話し手が自ら把握した出来事以外を単純に過去の形で述べることができないという制約を表しているものと思われる。

3.2.2.3. 過去の状態が現在形で表される？

上で見たように、本来「タ」で表してもよさそうな過去の出来事が現在完了の形で用いられることについては、既に言及がある。一方、(147)の「??現役だった/現役だ」のように本来「ダッタ」で表すべき過去の状態を現在形の「ダ」で表すという現象について指摘した研究はほとんどないが、定延(2001, 2004)で興味深い指摘がなされている。

定延では、次の(156)のような例で、過去の状態が現在形で言われる場合があることを示している³。以下の場合、「600年前ピサの斜塔が新しい」という出来事は過去のものであるため、本来であれば「タ」ありの形が自然で、「タ」なしの形が不自然になるはずなのだが、実際には逆の判断となる。

(156) 状況：

A：みんなでタイムマシンで600年前の世界に行って、ピサの斜塔に住もうよ！

B：そりゃあいいや！600年前ならピサの斜塔も新しいからね。

??B：そりゃあいいや！600年前ならピサの斜塔も新しかったからね。

(許容度の記述(??)及び下線は筆者による⁴)

この点について、定延は「情報のアクセスポイント」⁵という概念を用いて説明を行っている。情報のアクセスポイントとは、次のようなものである。

³ 定延(2004)では、漫画ドラえもんの登場人物間の会話として提示されている。Aに当たるのがドラえもん、Bに当たるのがのび太である。AとBによる会話風記述への変更は筆者による。

⁴ 定延では大学生150人に対してアンケートを行っており、150人中100人がをを不自然だと判断するという結果が出ている。

⁵ 「情報のアクセスポイント」はこの現象を説明するためだけに導入されている概念ではなく、定延(2001, 2004)では、<発見>の「タ」など、その他の現象についてもこの概念を使った説明がなされている。

(157) 「情報を脳裏に浮かべるには、話し手は心内でその情報にアクセスしなければならない。ここで言う情報のアクセスポイントとは、話し手が情報にアクセスするための、時間軸上のよりどころである。話し手は時間軸上のいずれかの時点アクセスポイントとして選び、そこを通じて当該情報にアクセスする。」
(定延2004:10)

定延によると、「タ」は情報のアクセスポイントが過去であることを表す。ここでは、情報のアクセスポイントが設定される時点として、「600年前」と「現在」という、二つの選択肢があり得るが、この場合には、「現在」のほうが「600年前」よりアクセスしやすいという理由から、「タ」のない形である(157a)がより自然となるのである。⁶

このように、定延ではこのような現象を、「情報のアクセスポイント」が設定される時点によって、どのテンス形式が用いられるかが決まる、という観点から説明している⁷。

3.2.3. 疑問

上で見たように、出来事そのものを把握しておらず、出来事の記録や痕跡から当該の出来事を述べる場合には、「テイル」が使用されることが分かっている。以下では、この現象が「テイル」という形態に限るものではなく、場合によっては、「テイ」のない形や「ル」のない形で、このような「記録・痕跡」からの出来事の把握が意味されることを見ていく。

以下の(158)の例は、記録(日記)から出来事(薬の飲む)を把握しているため、上で見た分析通り、bの「タ」は不自然になり、aの「テイル」が自然となる。

- (158) (太郎は一昨日薬を飲んだかどうか忘れてしまった。日記で調べたところ、飲んだと記録されているのを発見した際の発言)
花子：一昨日薬飲んだの？
a. 太郎：ええと...、(日記の中に、薬を飲んだという記述を発見して)あ、飲んでる。
b. ??太郎：ええと...、あ、飲んだ。

一方、以下の(159)の例では、aのように「テイル」ではなく、bの「テイタ」が自然となっている。この場合、cの「タ」もやはり不自然である。ここで、bの「テイタ」が自然となるのは、記録・痕跡を見たのが、過去だからだと考えられる。

⁶ 「600年前」よりも「現在」の方がアクセスしやすいのは、600年前のピサの斜塔の様子は、600年前といえぱちまち「ピサの斜塔はこうこう」と思い当たるような、なじみ深い場所ではなく、ピサの斜塔に関して現在成り立っているもっとメジャーな知識情報[ピサの斜塔は650年ほど前に完成]から推論される情報でしかないためである。(定延2004:12)

⁷ 後に見ていくように、本稿ではこの「情報のアクセスポイント」は前章で見た⁶に当たるものだと考える。

(159) ((158)の後の会話。日記を閉じて、部屋を出た後に次郎に向かって話す。太郎は相変わらず、薬を飲んだ時のことが思い出せない。)

次郎：一昨日薬飲んだの？

a. ??太郎：うん、今日記で調べたんだけど、飲んでる。

b. 太郎：うん、今日記で調べたんだけど、飲んでた。

c. ??太郎：うん、今日記で調べたんだけど、飲んだ。

このように見ると、「テイル」という形全体が記録・痕跡からの把握という意味に貢献しているわけではないことがわかる。最後の「ル/タ」の部分は、把握を行った時と発話時(t_s)との関係を示すものだと考えられる⁸。すると、ここまで見る限りでは、記録・痕跡からの把握であることを意味するのは、「テイ」の部分だろうと考えるのが妥当に見える。

(160) a. 「テイ」：記録・痕跡からの把握

b. 「タ」：記録・痕跡を見ている時の時制

以上、記録・痕跡からの把握を意味するのは「テイル」ではなく、「テイ」の部分であると考えられることを見た。しかし、次に見るように、記録・痕跡からの把握の場合に、「テイ」が用いられない場合もある。

例えば、以下の(161)のような場合、「現役だ」という(静的な)出来事が成立している時点は3年前なので、過去のことである。従って、普通に考えると「タ」を用いて「現役だった」とするのが自然に見える。しかし、このような場合には、「現役だ」と言うのが自然だろう⁹。一方、もし、(162)のように、記者が太郎が3年前現役であったという事実を現に思い出した場合には、「現役だった」は自然になる。

(161) (太郎選手の記録を調べている新聞記者二人が)

A：太郎は3年前にはもう引退してたんじゃないのか？

B：ええと、ちょっと待ってください。3年前の選手名鑑を見えます。

(選手名鑑を調べて)

あ、太郎載ってる。太郎は3年前はまだ[現役だ/??現役だった]。

(162) (上の会話の後、Bが太郎が3年前にプレーしていた姿を思い出して)

B：あ、そうだろう。思い出した。太郎は3年前現役だった。3年前の日本シリーズで見たんだ。

このように、「記録・痕跡」から出来事を把握した場合にのみ「タ」が使用しにくいというのは、上で見た、「テイル」の記録・痕跡用法と同様の特徴だと言える。従って、ここでも、記録・痕跡からの出来事の把握が意味されていると言ってよさそうである。

しかし、この場合、「テイ」という形式自体が用いられていない(「テイ」は名詞には付

⁸ このような違いによる「タ」の有無の使い分けについては、次章で議論する。

⁹ 「現役だった」が自然になる状況として、Aが別室に行き選手名鑑を調べてきて、Bのいる部屋に戻ってきた後にそのことについてBに話す、という状況がありえる。しかし、ここでは、AはBのいる目の前で選手名鑑を調べて話しているという状況なので、「現役だった」は不自然となる。

加することができないので、この場合には、「テイ」の付加はそもそも不可能である)。従って、記録・痕跡からの把握だということが「テイ」なしで表される場合があることもあるということである。

また、この場合、直接把握された場合に使用される形が「名詞+ダッタ」という形である、という点も重要である。上で見たように、先行研究では、出来事の直接把握があれば「動詞+タ」の形になるものが、記録・痕跡からの間接的な把握の場合には「動詞+テイル」の形になることが指摘されている。しかし、ここで見たように、直接把握の場合に使用される形が「動詞+タ」とは異なるものであっても、「記録・痕跡からの把握」というコンテキストは、述語のテンス・アスペクト形態に影響を与える。

このような例は、次のような場合にも見られる。下の(163)は、直接把握があった場合の表現が(過去完了の)「シテイタ」で、記録・痕跡からの把握が「シテイル」の形になるものである。

この例の場合、「首位打者をとった」のように「シタ」の形で言うのは、そもそも不自然である。なぜなら、ここでは、「3年前より前」の時点の首位打者をとるという出来事について言及されているからである。この場合、普通に考えると、上で見たように、過去完了の「テイタ」が使われることが予測される。しかし、記録・痕跡からの把握という状況では、「テイタ」よりも「テイル」(「とっています」)の使用が自然になる。

(163) (太郎選手の記録を調べている新聞記者二人が)

A: 太郎は3年前の時点ではまだ無冠だったんじゃないのか?

B: ええと、ちょっと待ってください。3年前の選手名鑑を見えます。

(選手名鑑を調べて)...

あ、「首位打者1回」って書いてある。ほら、これ見てください。この時点で既に首位打者を{とっています/??とっていました}よ。

このように、記録・痕跡用法については、直接把握があった場合に「シタ」で言われるものが「シテイル」と言われるだけでなく、直接把握があった場合「シテイタ」で言われるものが「シテイル」と言われる場合があることも分かる。

このように、ここでは、二種類の事例から、記録・痕跡からの出来事の把握を表現する方法についての疑問を提起した。①一つ目は、先行研究で指摘されている「テイ」と「ル」の組み合わせ以外の形で、このような把握が表される場合があるということ、②二つ目は、把握された出来事の種類が過去非状態(「シタ」)である場合以外(過去完了や過去状態の場合)にも、記録・痕跡からの把握であることを表す形式が使用される場合がある、ということである。

以上見てきたように、「記録・痕跡からの把握」を表す形式については、(i)把握される出来事の種類と、(ii)記録・痕跡からの把握の場合に使用される形という、二つの形の対応関係を説明する必要がある。以下は、両者の対応規則について考察を行っていく。

(164)

| 元の形 | | 記録・痕跡 (現在) |
|-------|------|---------------|
| 過去非状態 | シタ | シテイル |
| 過去状態 | シテイタ | シテイル |
| | ダッタ | ダ |
| 過去完了 | シテイタ | シテイル |

3.2.4. 分析

3.2.4.1. 記録・痕跡の把握時へのtの追加設定

上では、「テイル」の記録用法と呼ばれるものが、実はもっと広い現象なのではないかという点について見てきた。以下では、このような現象を、上で行った時間関係の分析に基づいて考察していきたい。

上で見た(158)と(159)の例を以下に再掲する((165)(166))。ここで、(165a)の「飲んでる」は現在完了で、(166)の「飲んでた」は過去完了と言っていいだろう。

(165) (太郎は一昨日薬を飲んだかどうか忘れてしまった。日記で調べたところ、飲んだと記録されているのを発見した際の発言)

花子：一昨日薬飲んだの？

a. 太郎：ええと...、(日記の中に、薬を飲んだという記述を発見して)あ、飲んでる。

b. ??太郎：ええと...、あ、飲んだ。

(166) ((165)の直後の会話。日記を閉じて、部屋を出た後に次郎に向かって話す。太郎は相変わらず、薬を飲んだ時のことが思い出せない。)

次郎：一昨日薬飲んだの？

太郎：うん、今日記で調べたんだけど、飲んでた。

これ((167)に該当部分だけを再掲)を、何のコンテキストも設定せずに作った、(168)のような現在完了(a)と過去完了(b)の文と比較してみる。

(167) a. あ、飲んでる。(現在完了)

b. 今日記で調べたんだけど、飲んでた。(過去完了)

(168) a. 太郎は現時点で薬を飲んでいる。(現在完了)

b. 太郎は一昨日薬を飲んでいる。(過去完了)

(168)の場合には、「現時点」や「一昨日」といった、tにあたる時間が文章内に明示的

に設定されている。しかし、(167)のような記録用法の場合には、そのような時点は文章内に明示的に示されてはいない。この時点は、記録・観察の時を表していると考えられる。つまり、記録・観察の時が現在であれば、「飲んでる」となり、その時点が過去であれば、「飲んでた」となる。

ここで、上で見た定延(2004)の「情報のアクセスポイント」という概念について考えてみたい。定延によると、このアクセスポイントの時点が過去であれば、過去時制になり、現在であれば、現在時制になるということであった。ここで、本稿で見ている時間関係と、定延の「情報のアクセスポイント」との関連を見てみたい。既に見たように、本稿では、完了の場合は t と t_s の関係が「タ」の有無を決定すると考えている。即ち、 t が t_s に先行する関係ならば、「タ」が付加され、そうでない場合は「タ」が付加されないということである。そうすると、「情報のアクセスポイント」を設定するということは本稿で言えば、新たにひとつ t を追加する、即ち、 t を設定するということと同じことになる。

定延(2004)は、情報のアクセスポイントの設定先として、「探索」という体験の時点が選ばれるとしている。探索は、探索領域から出るまで続く。ここで言えば、「日記」が探索領域だとすると、日記を開いている間は探索中だと考えていいだろう(これについては、次章(4.3)でより詳しく見る)。そうすると、この時点(期間)がアクセスポイントとして設定されることになる¹⁰。

このように考えると、「日記を見ている時」が情報のアクセスポイントとして設定されると見ることができる。即ち、新たな t が「日記を見ている時」に設定される。この t は、もちろん t_s である。そうすると、 t が t_s に先行していれば、「タ」ありの形となり、 t が t_s を含んでいれば、「タ」なしの形となる、ということである。

このように考えれば、上のaとbが、なぜそれぞれ「飲んでる」と「飲んでた」になるのかも説明できる。

ただ、「情報のアクセスポイント」と「 t の追加設定」との間には違いもある。「情報のアクセスポイント」が、「タ」の有無(時制)を決めるものとされている一方で、 t は発話時(t_s)との関係では「タ」の有無を決めるが、「テイ」の付加条件でもあるからである。また、定延の「情報のアクセスポイント」は、これに付随する概念などにも詳細な定義が与えられており、両者を一概に同じものと言ってもよいかどうかは分からない。このため、以下では、単に「 t を追加する」と言う。しかし、実際には、これは「情報のアクセスポイントを設定する」という概念に近いものではないかと思われる。(なお、「 t を設定する」と同じ意味で、「 t を追加する」という言い方を用いる場合があるが、両者は同じ意味である)

以下では、このような観点から、「 t の追加」が行われた結果として、どのような時間関係が算出され、その結果として、どのような形態として実現するのか、という観点から、上で見た問題を分析していきたい。

¹⁰ 「探索」には「マクロ探索」と「ミクロ探索」の2種類が想定されており、ここで述べているのは、前者の「マクロ探索」に当たる。これらについては、次章でも見る。

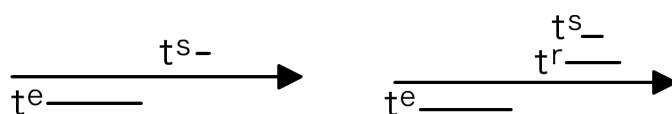
3.2.4.2.元の出来事が「過去(非状態)」である場合

まず、上で見た(165)の事例について、単に「飲んだ」と言うような過去非状態の場合((165a))と比較してみたい。既に見たように、過去非状態相の「飲んだ」の場合、 t^e は存在しない。従って、この場合については、単純に t^e と t^s の時間関係が問題になる。これは、次の(169a)のように示せる。一方、(165b)の「飲んで(い)る」のような場合、「日記を見ている時」という記録を観察時が存在する。この場合は、「日記を見ている時」に $t(t^r)$ が追加されることになる。この「日記を見ている時」は発話時を含むものなので、これは図示すると(169b)のようになる。

(169)

a. 「飲んだ」

b. 「飲んでる」



(170) a. 「飲んだ」

t^e = 出来事(飲む)時

t^s = 発話時

b. 「飲んでる」

t^e = 出来事(飲む)時

t^r = 日記を見ている時

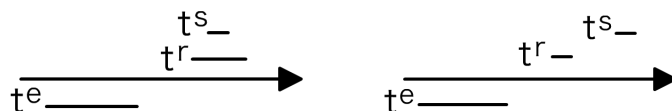
t^s = 発話時

次に上の(165a)の「飲んでる」の場合と(166)の「飲んでた」の場合、即ち、発話時点でもまだ日記を見ている場合と、もう日記を見ていない場合を比較してみたい。既に見たように、(165a)の「飲んでる」は下の(171a)=(169b))のようになる。一方、(166)の「飲んでた」は、同様に日記を見ている時に t を設定することになるが、この場合は、これが発話時以前に存在するので、下の(171b)のようになる。

(171)

a. 飲んでる

b. 飲んでた



次に、このような時間関係の場合に、(171a)と(171b)がそれぞれ「テイル」と「テイク」の形になることが、前章で見た「時間関係と形態の対応規則」(形態規則Aと形態規則B)から導き出せることを、一応確認する。

まず、上の(171a)も(171b)も、「 t^e が t^r に先行する」関係である点は共通している。このことから、「テイ」が付加される。次に、(171a)は「 t^e が t^s を含む」ことから、「タ」は

付加されず、「テイル」になる。また、(171b)は「tがtsに先行する」ことから、「タ」が付加されて、「テイタ」となる。これは、それぞれ(171a)の「飲んでる」と(171b)の「飲んでた」と合致する。

このように見ると、上の記録用法は、次のような原則に従っていると考え、説明がつく。これは、以下のように、記録・痕跡を見ている時にtを追加する、というものである。

(172) 記録・痕跡による把握の原則：

出来事を記録・痕跡から把握した場合には、「記録・痕跡を見ている時」にtを追加する。

3.2.4.3.元の出来事が「過去完了」である場合

ここでは、本来であれば過去完了の「シテイタ」が使われることが予測されるものが、記録・痕跡からの把握の場合に「シテイル」となる場合について考える。

既に見たように、「過去のある時点よりも前」の出来事について述べる場合は、過去完了が用いられる。従って、このような一般則に則れば、「3年前」という過去の時点以前に「首位打者をとる」という出来事が起きたことについて言及する場合には、以下の(173)のように「テイタ」で言われることが予測される。

(173) 太郎は3年前の時点で既に首位打者をとっていた。

しかし、以下の(174)(=(163))のように、この事実を記録・痕跡から知った場合には、「テイル」で言うのが自然になり、「テイタ」と言うのはむしろ不自然である。

(174) (太郎選手の記録を調べている新聞記者二人が)

A：太郎は3年前の時点ではまだ無冠だったんじゃないのか？

B：ええと、ちょっと待ってください。3年前の選手名鑑を見えます。

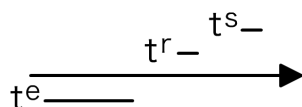
(選手名鑑を調べて)...

あ、「首位打者1回」って書いてある。ほら、これ見てください。この時点で既に首位打者を{とっています/?とっていました}よ。

この場合が従来の記録用法の「テイル」と異なるのは、元の形が「動詞+タ」ではなく、「動詞+テイタ」であるという点である。つまり、ここでは、記録から観察される内容が「過去完了」の事態である、という点である。このような場合、「テイタ」では不自然で、「テイル」という形が用いられる。以下では、前に見た時間関係と形態との間の形態規則A及び形態規則Bと、上で見た「記録・痕跡による把握の原則」に基づいて、この事実が説明できるかについて見る。

まず、元の形である「テイタ」の場合について見てみる。既に見たように、上の(173)のような過去完了の場合の時間関係は以下ようになる。

(175)



(176) t^e = 出来事(「首位打者をとる」)時

t^r = 3年前

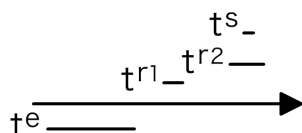
t^s = 発話時

次に、この時間関係((175)(176))に、上で見た「記録・痕跡による把握の原則」を当てはめる。

「記録・痕跡を見ている時」は発話時を含む時間であるため、そこに t が追加されることになる。そうすると、既にある「3年前」という t^r を含め、2つの t^r が存在することになる。ここでは、両者を区別するために、先に設定されていた「3年前」を t^{r1} 、ここで設定した「記録・痕跡を見ている時」を t^{r2} と呼ぶ。この t^{r2} は上の例((175))の t^r とは違い、「首位打者をとる」という事態の記録を発見した時ではなく、「3年前に首位打者をとっていた」という事態の記録を発見した時だと言える。つまり、 t^e を発見した時ではなく、 t^e と t^{r1} の時間関係を発見した時が t^{r2} だと言える。

このように見ると、ここでの時間関係は、次の(177)(178)になる。

(177)



(178) t^e = 出来事(「首位打者をとる」)時

t^{r1} = 3年前

t^{r2} = 記録を見ている時

t^s = 発話時

ここで、形態規則Aを当てはめると、 t^r が存在しているので、「テイ」が付加されることになる。従って、「首位打者をとっている」となる。次に、形態規則Bを当てはめると、ここでは、「 t^s の一つ前の t 」は t^{r2} で、「 t^{r2} が t^s を含む」関係になっているため、「タ」は付加されない。従って、「首位打者をとっている」となる。

以上のように、「記録・痕跡による把握の原則」と形態規則A・Bを適用すると、「テイル」を使って、「首位打者をとっている」という形になることが予測される。これは、(174)の事実に適合する。

また、もしここで「テイル」が使用されることが「記録・痕跡による把握」であることによるものとしたら、上(3.2.4.2)で見たように、「記録・痕跡を見ている時」が発話時以前の場合には「テイタ」が自然に使えるはずである。

下の(179)を見ると、この予測通りになっていることが分かる。この場面は、上の(174)の場面と異なり、Bが資料室で記録を見てきて、Aに報告するという場面である。従って、Bは「とっていました」を発話する時点では、記録を見ていない。このような場合には「テイタ」が自然に使える。

(179) (太郎選手の記録を調べている新聞記者二人が)

A：太郎は3年前の時点ではまだ無冠だったんじゃないのか？

B： ええと、ちょっと待ってください。資料室で3年前の選手名鑑を見てきます。

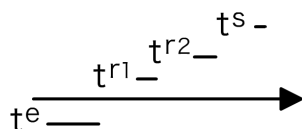
(Bが資料室から戻ってきて)...

A： どうだった？

B： 3年前の時点で既に首位打者をとっていました。3年前の選手名鑑を見たら、「首位打者1回」と書いてありました。

ここでの時間関係は、次の(180)(181)のようなものになっていると考えられる。それぞれの t が何の時間を表しているかという点は上と同様だが、 t^r2 と t^s の時間関係が異なることがわかる。これが形態規則Bにより「タ」が使われる原因となっている。

(180)



(181) t^e = 出来事(首位打者をとる)時

t^{r1} = 3年前

t^{r2} = 記録を見ている時

t^s = 発話時

このように、元の形が「テイタ」であるような場合にも、「記録・痕跡からの把握の原則」が当てはまることが分かる。

3.2.4.4.元の出来事が「過去状態」である場合

ここでは、本来であれば過去状態の「シテイタ」が使われると予測されるものが、記録・痕跡からの把握の場合に「シテイル」となる場合について考える。また、動作性述語の状態相と同じアスペクト的特徴をもつ、状態性述語の場合についても取り扱う。

前章で見たように、動作動詞の過去状態は「テイタ」の形で表される((182))。また、状態性述語の場合は、例えば名詞述語であれば、過去は「ダッタ」で表される((183))。

(182) 動作性述語の過去状態：

太郎は3年前ドラゴンズでプレーしていた。

(183) 状態性述語の過去：

太郎は3年前現役だった。

しかし、以下の(184)に見るように、「記録・痕跡」から過去のある時点での状態を把握した場合には、動作性述語の過去状態(a)の場合、「テイタ」よりも「テイル」が自然になり、状態性述語の過去(b)の場合、「ダッタ」よりも「ダ」の形が自然になる。

(184) (太郎選手の記録を調べている新聞記者二人が)

A：太郎は3年前にはもう引退してたんじゃないのか？

B：ええと、ちょっと待ってください。3年前の選手名鑑をしてみます。

(選手名鑑を調べて)...

あ、太郎載ってますよ。「ドラゴンズ所属」って書いてある。ほら、これ見てください。

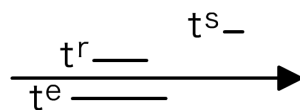
a. 太郎は3年前ドラゴンズでプレー{しています/??していました}よ。

b. 太郎は3年前現役{です/??でした}よ。

このように、過去状態の場合についても、「記録・痕跡からの把握」ということがテンス・アスペクト形式に影響を与えているように考えられる。ここでも、上記の「記録・痕跡による把握の原則」と「時間関係と形態との対応規則」により、この事実が説明できるかどうかを見たい。

まず、動作性述語の過去状態及び、状態性述語の過去の場合の時間関係について確認したい。これについては、共に次のような時間関係になっていることは、前章で見た。この場合には、太郎がプレーしている/現役である期間の中に「3年前」(t^r)という時間が含まれていて、その時間(t^r)が発話時(t^s)以前だということである。

(185)



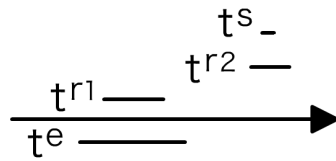
(186) t^e = 出来事(プレーしている/現役である)時

t^r = 3年前

t^s = 発話時

ここで、「記録・痕跡による把握の原則」に基づいて、「記録・痕跡を見ている時」に t^r を設定する。ここでは、「記録・痕跡を見ている時」は発話時を含む。また、このように t^r を追加設定すると、 t^r が2つ存在することになるので、「3年前」を t^{r1} とし、「記録・痕跡を見ている時」を t^{r2} とする。すると、時間関係は次の通りになる。

(187)



(188) t^e = 出来事(プレーしている/現役である)時

t^{r1} = 3年前

t^{r2} = 記録を見ている時

t^s = 発話時

この場合に、「時間関係と形態の対応規則」を当てはめると、どうなるだろうか。まず、形態規則Aを当てはめると、ここでは、 t^e が存在するので、「プレーする」は「テイ」が付加されて「プレーしてい(る)」になる。一方、「現役」のような名詞述語の場合には、そのままの形で「現役だ」となる。次に、形態規則Bを当てはめると、ここでは、「一つ前の t 」である t^{r2} が t^s に先行していない(含んでいる)ので、「タ」は付加されないことになる。そうすると、前者は「プレーしている」に、後者は「現役だ」になる。

このように、「記録・痕跡による把握の原則」と「時間関係と形態の対応規則」を当てはめると、それぞれ「プレーしている」と「現役だ」という形となることが予測され、上の事実と合致する。

また、これが「記録・痕跡による把握」であることによるものだとしたら、「記録・痕跡を見ている時」が発話時以前の場合には「テイタ」及び「ダッタ」が自然になるはずである。この予測が正しいことは、次の(189)を見ればわかる。上で見た(184a)(184b)の例と比べ、ここでは自然に「テイタ」を使うことができる。

(189) (太郎選手の記録を調べている新聞記者二人が)

A: 太郎は3年前にはもう引退してたんじゃないのか?

B: ええと、ちょっと待ってください。資料室で3年前の選手名鑑を見てきます。

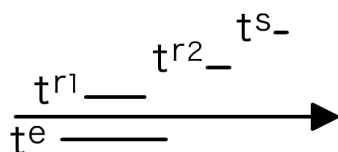
(Bが資料室から戻ってきて)...

A: どうだった?

B: 3年前はまだ{プレーしました/現役でした}。3年前の選手名鑑に太郎の名前が載ってました。

ここでの時間関係は、次の(190)(191)のようなものになっていると考えられる。それぞれの t が何の時間を表しているかという点は上と同様だが、 t^{r2} と t^s の時間関係が異なることがわかる。これが形態規則Bにより「タ」が使われる原因となっている。

(190)



(191) t^e = 出来事(プレーしている/現役である)時

t^{r1} = 3年前

t^{r2} = 記録を見ている時

t^s = 発話時

3.2.5. まとめ

ここまで、記録・痕跡によって出来事が把握された際に使用されるテンス・アスペクト形式について見てきた。従来の研究で、現在完了の「テイル」にこのような用法があることが指摘されてきたが、本章では、まず、この「記録・痕跡による把握」というニュアンスが、必ずしも「テイル」という形で実現されるわけではないことを確認した。その上で、「記録・痕跡による把握」から出来事を述べる際には、「記録・痕跡を見ている時」に t が追加される、という仮説(「記録・痕跡による把握の原則」)を立て、既に見た「時間関係と形態との対応規則」と合わせて、把握される出来事のタイプと、記録・痕跡により把握された出来事として述べる際の形態との対応関係について見てきた。

以上のようにして、「記録・痕跡による把握の原則」と「時間関係と形態との対応規則」が適切な予測を行うことを見てきた。この結果は、以下のような表にまとめることができる。

(192)

| 元の形 | | 記録・痕跡 (現在) | 記録・痕跡 (過去) |
|-------|------|---------------|---------------|
| 過去非状態 | シタ | シテイル | シテイタ |
| 過去状態 | シテイタ | シテイル | シテイタ |
| | ダッタ | ダ | ダッタ |
| | カッタ | イ | カッタ |
| 過去完了 | シテイタ | シテイル | シテイタ |

従来の記録用法に関するアプローチと本稿のアプローチの違いは、前者が形態と用法を

結びつけるアプローチであるのに対し、本稿では形態と時間関係を結びつけた上で、時間関係と用法とを結びつける、というアプローチをとっている点にあると言えるだろう(同様のアプローチは、金水(1998)や井上(2001)、定延(2004)の<発見>の「タ」等の分析にも見られる)。本稿では、記録・痕跡による把握を(「テイル」のような)特定のテンス・アスペクト形式と結びつけるのではなく、tの設定規則のひとつと捉え、tが追加設定されることにより、t間の関係がどのように変化し、結果としてどのような形態で実現されるのか、という観点から分析してきた。このことにより、最小限の規則で、多様な意味と形態の結びつきが説明できることが分かった。

3.3. 「様子からの把握」とtの設定

3.3.1. 背景

本章では、ここまで、出来事そのものを把握(体験)していなくてもその痕跡を把握(体験)した場合には、この時点にtを設定することで、出来事があったことを述べられるという点について見た。この場合、tは痕跡の把握時点に設定されるため、「テイ」はt^eがt^rに先行する関係を表す完了の「テイ」であった。ここで見るのは、次に見るように、出来事が起きている最中の様子を表す「テイ」で、状態相の「テイ」である。

下の(193)では、太郎は次郎がテキストを買おうとしている場面しか見ていない。このような場合、たとえ太郎が「次郎がテキストを買った」と信じていても、「買った」というように「テイ」なしの形で言うのは不自然である。一方、「買って(い)た」ならば自然に言える。

(193) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は前日、次郎が言語学概論のテキストをもってレジに並んでいるのを見た。)

花子：次郎、言語学概論のテキスト買ったのかな？

太郎：うん、{??買った/買ってた}よ。

このように、過去の出来事において、実際にその出来事を直接把握していない場合に「買った」が不自然になり、「買って(い)た」が自然になるような現象については、これまで具体的な指摘はされていないように思われる。

また、この「テイ」について面白いのは、このような「テイ」の使用に人称による自然さの差があるという点である。下の(194)に見られるように、主語が話者自身の場合には、このように「テイ」を使って過去の出来事を表すことができない。

(194) 花子：太郎、言語学概論のテキスト買った？

太郎：うん、買ったよ。

??太郎：うん、買ってたよ。

このような「テイ」の使用と人称(自身/他者)の関係については、人の内的な状態を表す場合においてよく見られる現象である(金水1989、柳沢1994、工藤1995、定延2006)。下の(195)に見るように、他者の内的な状態を表す場合には、「テイ」なしの形(a)で述べる

のは不自然だが、「テイ」ありの形(b)なら自然になる。

(195) a. ??あなたがおかしいこと言うから、次郎君が呆れたよ。

b. あなたがおかしいこと言うから、次郎君が呆れてたよ。

このような問題は心理状態を表す動詞の特徴として論じられることが多かったが、もし、これが上の(193)のような現象と関係しているのだとしたら、これはそのような動詞に限られた問題ではないことになる。また、「テイ」自体が実はアスペクトではなく、このような報告性(柳沢1994)やエビデンシャリティ(定延2006)の意味を表している可能性を指摘する研究もあり、ここでは、このような主張との関係とも合わせて議論をしていく。

3.3.2. 先行研究

上で見たような、過去の出来事について、出来事が起きたことを直接把握していない場合に、「テイ」なしの形では不自然になる一方で、「テイ」を付加すれば自然になる、といった現象について、これまで具体的な記述はないように思われる。しかし、金水(1989)では、心理状態を表す動詞について、「テイ」の有無と人称による自然さの違いについての考察が行われており、柳沢(1994, 1995)では、「テイ」がアスペクトとは異なる意味として「報告性」を表すという考察が行われている。以下では、この点について見ていきたい。

3.3.2.1. 心理状態を表す動詞の人称制限と「テイ」の関係

金水(1989)は(196)のように、「悲しむ」のような動詞は、aのように三人称主語にすると、不自然になるが、このような場合でも、bのように「ようだ/らしい/みたいだ」のようなモダリティをつければ自然になることを指摘している。

(196) a. 「それを聞いて、山田はどうした？」

「うん、?ひどく悲しんだ。」

b. 「それを聞いて、山田はどうした？」

「うん、ひどく悲しんだ{ようだ/らしい/みだいだ...}」

(金水1989:125)

このように、「悲しむ」のような動詞の場合、三人称主語ではモダリティが必要とされる。しかし、下の(197a)のように、「テイ」の形で言えば、このようなモダリティは必要がない。一方で、(197b)のように「悲しい」という形容詞を用いてこれを言うのは不自然だろう。

(197) a. 山田はひどく悲しんでいたよ。

b. 山田は悲しいよ。

このことについて、金水(1989)は次のような説明を与えている。まず、「悲しむ」という動詞は次の(198a)～(198c)のような3つの層から成ると考える。このうち、aは直接知る

ことはできないが、bやcは外部から観察可能である。そして、bやcだけを知っていれば、「悲しんでいた」と言えるのであると考える。

- (198) a. <悲しい>という心的状態
b. 悲しげな表情や動作
c. 「ああ、悲しい」などの発語行為

(金水1989:125)

このように見ると、「テイ」は観察したものを述べる際に使用できることが示されているように見える。しかし、金水(1989)では、「観察」という行為と「テイ」の関係について具体的な結論までは出されておらず、このような現象の指摘にとどめられている。また、動詞についても、心理的な状態と関わる動詞のみを考察対象としている。

なお、金水(1989)では、三人称の場合に「テイ」なしの形では心理状態を表しにくく、「テイ」が必要となるという観察がなされているが、一人称の場合に、逆に「テイ」ありの形が使いにくくなるのかどうかという点については触れられていない。この点について、工藤(1995)では、内的状態を表す動詞が「テイ」と共に用いられた場合は、「1人称であれ2・3人称であれ思考・感情・知覚・感覚の継続性を、対象化して確認・記述している」(工藤1995:89)とし、一人称の場合にも「テイ」が付加できるとしている。例えば、(199)のような場合に「軽蔑している」と「テイ」が付加できるのは、思考の継続性を対象化し、確認・記述しているためだと説明される。

- (199) 「ええ、あの時は、旧式な結婚をけいべつしていました。そして、なにかもつといいものがあつたら、と思っていました。」(女の一生)

(工藤1995:89)

また、定延(2006:176)でも、「自己を他者と同じように「突き放して」「第三者のように」「客観的に」述べるという意図が話し手が持てば、「私は痛みを感じている」のように自身の内的状態を「テイ」を使用して言える点を指摘している。

このように、3人称の場合は、心理状態などの内的な状態を表すのに「テイ」のない形では表現しにくく、「テイ」が必要とされることが先行研究で指摘されている。一方、1人称の場合には、逆に「テイ」が使用しにくいのかという点については、「テイ」を使うことで、心理状態を対象化したり、第三者的に述べたりすることになるとされている。

3.3.2.2. 「テイ」と報告性

柳沢(1994)は、上で見た金水(1989)の考察を利用して、「テイ」が「報告性」をもつこと、そして、これが心理状態を表す動詞に限られないという主張を行っている。

柳沢(1994)は、「テイ」の意味について、その「非アスペクト的意味」として「報告性」の存在を認めている。この根拠として次のような4種類の「テイ」の使われ方を挙げている。

- (200) a. 動作主の三人称化
b. 引用・要約におけるテイル形の使用
c. 解説文におけるテイル形の使用
d. 経験におけるタ形との妥換性と非妥換性

柳沢は、これらのような「テイ」の使われ方が、「テイ」が次のような「報告性」の意味を持っていることの現れだとしている。

(201) 「テイル形の報告性」

- ①話し手は何らかの現象を観察している。
②言表は観察結果の報告である。
③言表は二次的な情報である。

(柳沢1994:172)

つまり、「テイ」で言われる内容は、話し手が観察を行い、観察によって得たその情報を頭の中で処理した上で述べられるものだという事である。このような意味で、「テイ」は①「観察」されたものを②「報告」するものであり、その内容は頭の中で処理された③「二次的」なものだという事である。

柳沢(1994)では、「テイ」のもつこのような報告性について、特に「継続」(本稿の「状態」)や「パーフェクト」(本稿の「完了」)といったアスペクトのタイプによる区別は行わず、一括して「報告」という枠組みで捉えている。また、「テイル形には報告性によってしか説明できない多くの用例」があることから、報告性が「テイ」の第一の意味であり、アスペクトの意味はそこからの派生的な意味であるかもしれないとし(柳沢1994:176)、「テイ」の第一義がアスペクトではない可能性を示唆している。

以上見たように、「テイ」については、「観察したものを報告する」といった意味合いがあることが指摘されている。

3.3.3. 疑問

先行研究において、「テイ」が「観察」「報告」といった意味合いを持つことが分かっているが、金水(1989)では、心理状態を表す動詞のように、直接把握不可能なものを表す動詞に焦点が当てられており、(193)で見た「買う」のような動詞についての考察は行われていない。

また、柳沢では「テイ」が全体として報告性をもつということが述べられているが、具体的な状況において、どのような場合に「テイ」が使われるのか、もしくは使われないのか、という点についての考察は行われていない。

例えば、柳沢(1994:166)では、「テイ」と人称との関係を表す事例として、次の(202)のようなものが挙げられている。柳沢は、このうち、aは「みんな」に話し手が含まれている解釈となるが、bはそのような解釈にならず、主語が三人称の解釈になるとしてい

る。ただ、筆者には、この二つの文の間に、そのような差が特に感じられない。このように、文脈のない単独の文では「テイ」と人称の関係は見えづらいため、文が実際にどのような状況で発せられるのかという観点が重要であると思われる。

(202) a. みんなで歌を歌うよ。(話し手を含む解釈になる)

b. みんなで歌を歌っているよ。(話し手を含まない解釈になる)

また、柳沢(1994)では、「テイ」が「状態(継続)」を表す場合も「完了(パーフェクト)」を表す場合も一括して「報告性」という概念でとりまとめられている。しかし、両者では、「観察」されたものと、述語で表される「出来事」との時間関係がそもそも異なるため、一括して論じるのは難しいように感じる。このような時間関係、即ち、「テイ」のもつアスペクト的な分類を考慮に入れなければ、「テイ」が報告性をもつことがわかって、それがどのように実際に使われるかを予測するのは難しい。

また、工藤(1995)や定延(2006)では、自身の内的状態を対象化することや第三者的・客観的に述べることで、自身の内的状態についても「テイ」で述べられるとされている。上でも見たが、工藤では、自身が主語である場合に「軽蔑する」のような動詞に「テイ」をつけて「軽蔑している」と言える例として、次の(203)のようなものが挙げられている。しかし、(204)のような場合は、自身の場合(a)に「軽蔑している」と言うのは難しい。一方、この場合でも、他者の場合(b)であれば、自然に言える。

(203) 「ええ、あの時は、旧式な結婚をけいべつしていました。そして、なにかもつといいものがあつたら、と思っていました。」(女の一生)

(工藤1995:92)

(204) a. ??その話を聞いて、私、あななを軽蔑してたわよ。(→軽蔑した)

b. その話を聞いて、お母さん、あなたを軽蔑してたわよ。

工藤では、「直接経験の確認・記述」を行う際には「シテイル」の形でなく「シタ」の形が用いられるとされているが、両者がどのように違うのかは説明されていない。

以上見たように、より明確にすべきと思われる点として、①心理状態を表す動詞以外の動詞のもつ「報告性」、②「報告性」の意味が生じる状況、③「テイ」の表す時間関係との関連、④一人称の場合の「テイ」の許容度の揺れ、といったものがある。以下では、これらの点について見ていきたい。

3.3.4. 分析

3.3.4.1. 「様子」による出来事の把握と「テイ」

ここでは、話し手が出来事を直接把握していなくても、「テイ」を使うことで、当該の出来事について述べることができるという点について見る。

次に見るように、ある出来事が起きたことを直接把握していない場合でも、「テイ」を使用すれば、自然に言える場合がある。

下の(205)の例では、話し手(太郎)は、出来事(次郎がテキストを買う)そのものは見ていない。見たのは、出来事が起きる直前の様子だけである。このような場合でも、太郎がこの出来事が起きたということを信じていれば、「買ってた」のように、「テイ」を使用し言うことができる。一方、この場合に「買った」というように「テイ」を使用しない形で言うのは不自然である。

(205) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は前日、次郎が言語学概論のテキストをもってレジに並んでいるのを見た。)

花子：次郎言語学概論のテキスト買ったのかな？

a. 太郎：うん、買ってたよ。

b. ??太郎：うん、買ったよ。

次の(206)の例についても、同様のことが言える。この例で興味深いのは、「寝る」は覚醒状態から睡眠状態への変化の過程を「寝ている」のように「テイ」で表すことはできないのだが、ここでは、その過程が「テイ」で表されているように見える点である(結果状態の「寝ている」もあり得るが、ここでは、寝た後の状態を見ていないので、結果状態だとは考えにくい)。

(206) (花子が、夫の太郎に、息子の次郎が昨日早く寝たかどうかを尋ねる。太郎は、昨日の晩、早い時間に次郎がパジャマを着て部屋に入っていたのを思い出しながら...)

花子：次郎、眠そうね。昨日遅くまで起きてたんじゃないの。

a. 太郎：ううん、早く寝てたよ。

b. ??太郎：ううん、早く寝たよ。

上の(205)(206)の例は、話し手が出来事の起きる直前の様子を捉えた例だが、話し手が捉えたのが必ずしも直前の様子である必要はない。下の(207)の場合、話し手は出来事が起きた後の状態を捉えているが、その場合でも、「テイ」で自然に言うことができる(この場合にも、「テイ」なしで言うのは若干不自然だが、上の例よりは若干容認度が上がるようにも思える)。

(207) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は前日、次郎が言語学概論のテキストを持って、書店から出てきたのを見た。)

花子：次郎、言語学概論のテキスト買ったのかな？

a. 太郎：うん、買ってたよ。

b. ?太郎：うん、買ったよ。

以上の例は、話し手が出来事の起きる直前や直後の様子を捉えた場合の例だが、次の(208)に見るように、出来事そのものを実際に見た場合であっても、「テイ」で言うことは自然である。但し、この場合は「テイ」なしでも自然に言うことができる。

(208) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は、次郎がレジでお金を払って本を受け取っているのを見た。)

花子：次郎、言語学概論のテキスト買ったのかな？

a. 太郎：うん、買ってたよ。

b. 太郎：うん、買ったよ。

このように、出来事の「様子」を把握していただけた場合には、「テイ」を使用しないと言えないが、出来事を直接把握していた場合には、「テイ」を使用しても、使用しなくても、言えることが分かる。しかし、次に見るように、直接把握していた場合についても、状況によって、「テイ」の有無の自然さに差が生じる。

次の(209)は、太郎が、偶然次郎がテキストを買った様子を見かけた場合である。この場合は、「テイ」ありの場合が自然で、「テイ」なしでは若干不自然である。一方、(210)の例は、太郎が次郎と一緒にテキストを買った場合である。この場合は、上の例とは逆に、「テイ」ありの場合が若干不自然で、「テイ」なしの場合がより自然である。

(209) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は、立ち寄った書店で、次郎がテキストを買っているのをたまたま見かけた。)

太郎は次郎には話しかけなかった。)

花子：次郎、言語学概論のテキスト買ったのかな？

a. 太郎：うん、買ってたよ。

b. ?太郎：うん、買ったよ。

(210) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は、次郎と一緒にレジに並び、次郎と一緒にテキストを買った。)

花子：次郎、言語学概論のテキスト買ったのかな？

a. 太郎：うん、買ってたよ。

b. ?太郎：うん、買ったよ。

このように、出来事を実際に見ている場合であっても、「テイ」を使ったほうがより自然である場合もあれば、その逆の場合もあることが分かる。前者((209))は、話し手が部外者として出来事の様子を眺めていたような状況で、後者((210))は、話し手も当事者の一人として出来事に含まれていたという状況である。後者のように自身が当事者である場合に、当該の出来事を「様子」として述べるのは不自然だろう。このようなことから、この「テイ」は「様子による出来事の把握」を表していると思われる。

このように、「テイ」が表すのが「様子」であって、人称制限はその結果として存在するものだと考えると、次のような事例も説明がつく。次の(211)(212)では、主語は人でなく、「車のエンジン」で述語は「かかる」である。このような場合、「エンジンをかける人物」が話者自身であるか他者であるかが「テイ」の自然さに関係している。

(211) (状況)

冬の寒さで花子の車のエンジンがかからなくなったので、次郎が直してあげた。しかし、今朝は冷え込んだので、次郎は、今朝花子の車のエンジンが

かかったかどうか心配している。

太郎は、今朝花子がエンジンがかかるかどうか確認し、ちゃんとエンジンがかかったところを見ていた。

(会話)

次郎：今朝は冷え込んでたけど、花子ちゃんの車のエンジン、大丈夫だったかな。

太郎：うん、ちゃんとエンジン{??かかった/かかってた}よ。

(212) (状況)

冬の寒さで太郎の車のエンジンがかからなくなったので、次郎が直してあげた。しかし、今朝は冷え込んだので、次郎は、今朝太郎の車のエンジンがかかったかどうか心配している。

太郎は、今朝エンジンがかかるかどうか確認し、ちゃんとエンジンがかかったのを確認した。

(会話)

次郎：今朝は冷え込んでたけど、車のエンジン、大丈夫だった？

太郎：うん、ちゃんとエンジン{かかった/?かかってた}よ。

ここで、上の(211)で「テイ」がある方が自然なのは、話者(太郎)自身がエンジンをかけているわけではないからだろう。この場合、太郎はこの事実を自身の体験として捉えるのは難しく、「様子」として捉えるのが自然だろう。一方、(212)では、話者(太郎)自身がエンジンをかけている。この場合、太郎はこの事実を体験として捉えることができるため、「テイ」なしでも自然になるのだと考えられる。なお、この例((212))の場合、「テイ」ありの形でも許容度は比較的高いように感じられるが、これは、主語が「エンジン」であることによるものと思われる。この場合、話者(太郎)は「エンジン」を自身とは切り離して、観察対象として見るからではないかと思われる。

また、もしこの「テイ」が「様子による出来事の把握」を表しているのであれば、「テイ」がついた表現に、推量を表す表現を付加するのは不自然になることが予測される。なぜなら、そうすると、「当該の出来事が起きた」ことが推測される、という意味ではなく、「当該の出来事が起きた様子である」ことが推測される、という意味になってしまうからである。(213)の例を見ると、実際にこの予測のようになることが分かる。

(213) (学生たちは、教授から言語学概論のテキストを買うように言われている。太郎は前日、次郎が言語学概論のテキストをもってレジに並んでいるのを見た。)

花子：次郎言語学概論のテキスト買ったのかな？

a. 太郎：うん、買ったと思うよ。

b. ??太郎： うん、買ってたと思うよ。

この(213)は、aのように「テイ」なしの場合には「と思う」のような推測の表現を伴わせることができるが、「テイ」ありの場合にこのようにすると不自然になる。もし、太郎はbのように言ったとすると、「当該の出来事があったと思う」ということを述べるというよりは、「自分には当該の出来事があったように見えた」、ということを述べているよ

うになってしまう。

このように見ると、「テイ」は「と思う」のような表現と自然に置き換えることはできても、「と思う」を追加することはできない(した場合には意味が大きく変わってしまう)ことがわかる。このことから、この「テイ」が単なる時間関係を表すために使用されているわけではないことがわかる。

なお、次の点を補足しておきたい。それは、「テイ」の使用は、推量表現とは異なり、話し手が「出来事が起きたかどうか確信がない」ということを表しているわけではない、ということである。例えば、次の(214a)(215a)のように、話し手が出来事が起きたことに確信がない場合には、「テイ」を使っても不自然で、この場合は(214b)(215b)のように「と思う」のような推量表現を使用する必要がある。

(214) 花子：次郎、言語学概論のテキスト買ったかなあ。

a. ??太郎：買ったよ。でも、もしかしたら、買わなかったかもしれない。

b. 太郎：買ったと思うよ。でも、もしかしたら、買わなかったかもしれない。

(215) 花子：次郎、きのう早く寝たかなあ。

a. ??太郎：早く寝たよ。でも、もしかしたら、遅くまで起きてたかもしれない。

b. 太郎：早く寝たと思うよ。でも、もしかしたら、遅くまで起きてたかもしれない。

このことから言えるのは、「テイ」を使うことで、(A)「直接には把握していない」ということと、(B)「出来事が確実に起きた」と話者が信じているということとを同時に意味できるということである。このようなことは、「と思う」のような他の推量表現を用いて行うことはできない。これらの表現は、(A)は意味できても、(B)は意味できないからである。これについては、3.2.2.1で「記録・痕跡による把握」の場合にも同様のことが言えることを見た。このことは、次節で見ると、他者の心理状態を描写する際に「テイ」が用いられる理由となっている。

また、このように、自身の行為を「テイ」を使って様子として叙述するのは不自然だということを見たが、これは自身の行為に「テイ」が付加できないという意味ではない。例えば、以下のように、自身の行為(「テキストを買う」)を「テイ」を付加して述べることは自然である。

(216) 花子：太郎、言語学概論のテキスト買った？

太郎：うん、君から電話が来た時、ちょうどテキスト買ったんだよ。

詳しくは3.3.4.3で述べるが、これは、次のように説明できる。「テイ」が使用されるということは、 ψ が設定されているということであるが、ここでの ψ は「様子の把握時」として設定されているわけではない。「君から電話が来た時」という時間節によって導入された ψ である。このような「テイ」は話者の何らかの認識を表すものではないため、一人称の場合であっても、「テイ」は使用できる。言い換えると、この場合は「テイ」は把握時

に t_e が設定されたことによる「テイ」ではなく、単なる過去状態の「テイ」だということができる。

ここでは、次のことを確認した。

- (217) a. 「テイ」を使うことで、直接には把握していない過去の出来事を表現することができる。(但し、話者が出来事が起きたことを信じている場合のみ)
b. 直接把握した出来事であっても、「様子」として把握された場合には「テイ」が自然である。
c. aやbが可能なのは、主語が話し手自身でない場合のみである。

このうち、aとbは、「様子から出来事を把握した際に「テイ」が使用される」と一般化していいだろう。また、cについても、自身の行為について述べる際に、「様子」を述べるというのは不自然になるのは当然なので、これも、この一般化に含まれるものだと考えてもいいだろう。

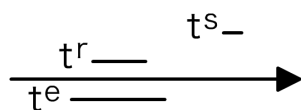
このように考えると、「テイ」の使用は次のように一般化できる。

(218) 様子から出来事を把握した際に「テイ」が使用される。

ここで、前章で見た「時間関係」とこの「テイ」の関係について考えてみたい。上の「記録・痕跡による把握」のところで見たとように、「テイ」なしの形でもって、直接把握していない出来事を指すのは不自然になる。これは、ここで見ている例にも当てはまる。「記録・痕跡による把握」の場合には、「記録・痕跡」から出来事を把握するケースで、「記録・痕跡を見ている時」に t_e を設定することで、これを記録・痕跡により把握された出来事を表現することができることを見た。これを、ここで見ている事例に当てはめると、どうなるだろうか。

ここでは、「様子」から出来事を把握するケースを見ている。「記録・痕跡」の場合と並行的に考えると、「様子を見ている時」に t_e を設定することで、様子から把握された出来事を表現することができるということになる。そうすると、上の例の状況の時間関係は次の(219)(220)のように示すことができる。

(219)



(220) t^e = 「買う」様子の持続期間

t^r = 話者が「買う」様子を観察している時

t^s = 発話時

ここで特徴的なのは、 t^e が「買う」という出来事の持続期間ではなく、その「様子の持続期間」を表しているという点である。「買う」の「様子の持続期間」とは、単純に「お金を店員に渡す」瞬間とか「本を受け取った」瞬間という、取引の成立時点に限らず、「レジに並んでいる」とか「本を持って書店から出てくる」という場面までをも含んだもの

のである。従って、話し手がその間のどこかの時点を見ていれば、「テイ」でこれを表現できる。このことにより、「寝る」のように、本来動作の継続を表せないようなものについても、このような場合には「テイ」が使用されることを説明できる。なぜなら、ここでの出来事時(t_e)とは、「睡眠状態に変化する」時点だけではなく、「パジャマを着て寝室に入る」という場面までをも含んだものだからである。

以上見てきたことから、このような「テイ」は次のような原則にしたがって現れるものだと考えられる。

(221) 様子による把握の原則：

出来事をその様子から把握した場合には、様子を観察している時に t_e が設定される。

3.3.4.2. 「様子による把握の原則」と内的状態を表す動詞の人称制約について

上で見たように、出来事の様子の観察時点に t_e を設定することで、直接体験していない出来事について、その出来事が起きたことを述べることができる。このことで、上に述べた心理動詞の人称制約を説明することができる。

既に見た通り、他者の内的状態を心理動詞で表現する場合、「テイ」なしで表現するのが不自然になり((222))、逆に、自身の内的状態の場合には、「テイ」をつけて表現するのが不自然になる((223))という現象が見られる。

(222) (突然会社を辞めた太郎に対し、姉の花子が)

花子：あなたが会社やめるって聞いて、

a. お母さん{驚いてた/呆れてた/がっかりしてた}わよ。

b. お母さん{??驚いた/??呆れた/??がっかりした}わよ。

(223) 花子：あなたが会社やめるって聞いて、

a. 私{??驚いてた/??呆れてた/??がっかりしてた}わよ。

b. 私{驚いた/呆れた/がっかりした}わよ。

この現象について、上で見た「様子による把握の原則」に基づいた説明をしてみる。まず、過去の出来事を直接体験したものとして述べる場合には、 t_e の設定が不要なので「テイ」なし(=「タ」)で表され、そうでない場合には様子の観察時点に t_e が設定され、「テイ」を付加して(=「テイタ」)表される。上で見たような、通常の動詞の場合には、場合によって、この両者が使い分けられていた。一方、内的な状態を表す場合にも、この原則が守られるとすると、内的な状態を体験した場合には「テイ」なしで、体験していない場合には「テイ」が付加されて表されることになる。自身の内的状態の場合には、「体験していない」ということがあり得ないため、必然的に前者の形となる。一方、他者の内的状態の場合には、「体験している」ということはあり得ないため、必然的に後者の形にな

る、と言えるだろう。

つまり、上で見たような、通常の動詞と異なるのは、内的な状態を表す動詞の場合、他者が主語である場合には、「直接把握」の解釈があり得ず、「様子」の解釈しかあり得ないため、必ず t が設定され、「テイ」ありの形で現れる、ということである。

金水(1989:123)は、次のような原則(というより「普遍的な事実」)をあげているが、本稿でもこれに従うとする。

(224) 他人の心的状態を直接知ることはできない。

(金水1989:123)

そうすると、この(224)の原則と、上で挙げた「様子による把握の原則」を組み合わせることで、通常の動詞と内的な状態を表す動詞との違いを説明できる。

このように、人称制限と「テイ」の関係が内的状態を表す動詞に限られているように見えるのは、上の(224)のような原則があるためだということがわかる。しかし、ここまでの議論から、「テイ」を付加するかしないかは「様子による把握の原則」に従っており、通常の動詞と同じ原則が適用されていることがわかる。

3.3.4.3. 「様子の観察時」の t と「単なる設定時」の t

内的状態を表す動詞のアスペクト形式と人称の関係については、次のような疑問もあった。上で見たように、自身の内的状態を表す場合には「テイ」の付加が不自然になる(225a)=(223a)ことを予測し、実際、そのような事例もある一方で、「テイ」が自然に付加できる(225b)場合もあるという点である。

- (225) a. 花子：あなたが会社やめるって聞いて、
私{??驚いてた/??呆れてた/??がっかりしてた}わよ。
b. 花子：太郎、なんであの時何も言わなかったの？怒ってたの？
太郎：違うよ。{驚いてた/呆れてた/がっかりしてた}んだよ。

このような問題に対する解決案として、ここでは「自身の内的状態を第三者的に述べる」ということを行っているのだ、という説明も考えられる。しかし、このような説明では、「テイ」が付加できることを説明できても、「テイ」の付加が不自然になる場合があることを説明できなくなってしまう。つまり、上の(225a)のような場合に「第三者的に」自身のことを述べられないのはなぜか、という疑問が生じる。

この点について考える前に、 t の設定が、必ずしも「様子による把握」によるものとは限らないことを確認したい。本章では、「様子による把握」によって t が設定されるという点に注目しているが、 t の設定は必ずしもこのような動機付けによるものだけではない。例えば、次の(226)のように言う時、 t は花子の質問によって「(花子が太郎に)電話した時」に設定されている。このように、「体験」の有無などとは関係なしに t は設定され得るが、ここでは、これを「単なる設定時」と呼ぶことにする。

(226) 花子：昨日私が電話した時、何してたの？

太郎：ああ、あの時はテレビ見てたよ。

このように考えると、「単なる設定時」として t が設定される場合と、「様子の観察時」として t が設定される場合とがあることがわかる。このように見ると、上の(225b)でなぜ「テイ」が自然に言えたかも説明できる。ここでは、「あの時」という時間設定がされているので、自然に「テイ」が使用できる。つまり、この場合の t は「様子の観察時」として設定された t ではないので、主語が自身であっても、自然に使用できるわけである。

(227) a. 単なる設定時としての t

b. 様子の観察時としての t

このように見ると、次のようなことが予測される。即ち、「単なる設定時」として t が追加される場合でなければ、一人称の場合に「テイ」が不自然になるということである。

単なる設定時として t が追加しにくい場合には、例えば、次のように出来事を継起的に述べるような場合がある。出来事を継起的に述べる場合には、非状態相(完成相)が好まれるとされる(工藤1995)。以下の(228)のような場合、下線部の動詞を「テイ」を付加して言うのは不自然だろう。これは、本稿の言い方で言えば、このように継起的に出来事を述べる場合には t の追加設定がしにくい、ということの意味している。

(228) 「それから、わたしはうちへ帰ったの。そしてテレビをつけた。今日のお買物案内というのが終わって、すぐニュースが始まったわ。つまらないから切っちゃった」(影の告発)

(工藤1995:131)

このことを踏まえ、次の(229)(230a)(230b)を見ていきたい。(229)((199)を再掲)は、既に見た工藤による例であり、この場合は自身の内的状態(「軽蔑する」)に「テイ」をつけた形が自然に利用できる。一方、(230a)の場合には、それは不自然である。

(229) 「ええ、あの時は、旧式な結婚をけいべつしていました。そして、なにかもっ
といいものがあつたら、と思っていました。」(工藤1995)

(230) a. ??その話を聞いて、私、あなたを軽蔑してたわよ。(→軽蔑した)

b. その話を聞いて、お母さん、あなたを軽蔑してたわよ。

(229)は「あの時」という時間指定表現があることから分かるように、 t が「単なる設定時」として設定されていることがわかる。一方、(230a)は、「その話を聞く」という原因と、「軽蔑する」という感情の結果の継起的な関係を表している。上で見たように、このような継起的な関係を述べる場合には t は追加設定されないはずである。従って、このような場合に設定される t は「様子の観察時」として追加された t のはずである。その場合、(230a)のように、一人称で述べるのは不自然になる。

次の(231)のような例も、同様に説明できる。aは「10分前」のように単なる設定時として t が追加された場合である。一方、bは「手に触れる」という原因と「(静電気を)感じ

る」という知覚のように継起的な時間関係を表すもので、本来tは追加設定されないはずである。このような場合、主語が自身(太郎)の場合には「テイ」の使用が不自然になる。一方、主語が他者(花子)の場合には「テイ」が自然に付加される。これは、tが「様子の観察時」として設定されているためである。

(231) a. 私は10分前痛みを感じていた。

b. (太郎の手と花子の手が触れあった瞬間、静電気が走った。太郎と花子は、お互いびっくりして、手を離れた。そのことを思い出しながら、太郎が話す。)

太郎：彼女の手に触れて、僕は静電気を{感じました/??感じてました}。

花子ですか？はい、花子も{??感じました/感じてました}。

以上見たように、他者の内的状態を「テイ」を使用して表現できるのは、「様子による把握の原則」に基づいているということで説明できる。また、自身の内的状態を「テイ」で表せないという点についても、同様に「様子による把握の原則」で説明できる。ただ、自身の内的状態を「テイ」で表せる場合もあるが、その場合の「テイ」は「様子の観察時」としてtが設定された結果としてのものではなく、「単なる設定時」として設定されたものだと言うべきだろう。以上のことをまとめると、次の表のように示せる。

(232)

| | 自身 | 他者 |
|--------|-----|-----|
| 単なる設定時 | +テイ | +テイ |
| 様子の観察時 | × | +テイ |

3.3.5. まとめ

ここでは、様子の把握によりtが設定される場合について見てきた。即ち、話者が出来事を直接把握・体験したものとしてでなく、当該の様子の観察によって、間接的に把握・体験した場合に使われる「テイ」について見てきた。

ここでわかったのは、当該の出来事が起きたことが確実であっても、話者が様子の観察によってそれを知った場合には、「テイ」なしの形でこれを述べるのが不自然だという点である。しかし、これは、あくまでも話者が当該の出来事をどのように捉えているのか、ということに依存する。従って、同じ過去の場面であっても、話者がそれを「自身の体験」として捉えていれば、「テイ」なしの形で自然にこれを述べるができる。一方、「様子の観察」と捉えていれば、「テイ」が使用される。

また、このことから、話者自身の行為のように、「直接把握・体験」の解釈以外が不可能な場合については、このような「テイ」の使用は不自然になる。

このことから、出来事を直接把握していない(ものとして捉える)場合には、「様子の把握時」にtを設定する、という「様子による把握の原則」が存在すると考えられる。

この原則は、人の内的状態を表す動詞の振る舞いを説明するのに有用である。人称と「テイ」の関係は、これまでは知覚動詞など、人の内的状態を表す動詞に特徴的なものとして取り上げられてきたが、①「なぜ三人称の場合には「テイ」がないと不自然になるのか」という点や、②「(a)なぜ一人称の場合には「テイ」があると不自然になる場合もあれば、(b)あっても不自然にならない場合があるのか」という点に対する原理的な説明はされてこなかった。しかし、これらの点についても、「様子による把握の原則」を使えば、説明ができることを見た。

①の、三人称だと「テイ」が必要であることと、②(a)の、一人称だと「テイ」があると不自然になる場合があることについては、「テイ」が「様子の観察時」に t が追加設定された結果として表れるものだと考えれば、説明ができる。また、②(b)の、一人称でも「テイ」を付加して自然に使用できる場合があるという点については、 t が「様子の観察時」としてでなく、「単なる設定時」として設定された結果現れた「テイ」であるという理由で説明ができることを見た。

このように、ここでは、「様子の観察時」として t が設定されることがあり得ること、そして、「単なる設定時」としてこれが設定されることがあり得ることにより、「テイ」の様々な振る舞いについて説明してきた。

3.4. 間接的把握の原則

以下では、本章で見てきた「様子の把握による原則」は、上で見た「記録・痕跡による把握の原則」の関係について考えた上で、より広い概念としてこれを一般化したい。

「記録・痕跡による把握の原則」と「様子の把握による原則」とは互いに無関係ではないと考えられる。なぜなら、これらは、共に、出来事を「直接把握していない」ものとして述べる際に使用されるものだという点で共通しているからである。これらは、共に、出来事を「記録・痕跡」や「様子」といった、間接的な証拠から把握した場合に、その間接的証拠の把握時点に t が追加設定された結果として表れる「テイ」である。このように見ると、両者はある意味で同じものと言える。

一方、両者には違いもある。それは、出来事そのものとの時間関係である。出来事と「記録・痕跡」の時間関係は、必然的に出来事が先で、「記録・痕跡」が後になる。一方、「様子」の場合は、出来事は「様子」と同時進行である。このように、両者には、出来事そのものとの時間関係の違いがある。つまり、 t_e が t を含む関係であるか、それとも t_e が t に先行する関係であるか、という違いがある。既に見たように、 t_e と t の関係にかかわらず、 t が存在しさえすれば「テイ」は付加されるので、両者は同じ形態で現れるのである。(ただし、既に見たように、「記録・痕跡による把握」の場合には、「テイ」以外の形でこれが実現される場合もある)

ただ、「記録・痕跡」であれ、「様子」であれ、出来事を間接的な証拠を介して述べていることには変わりがない。従って、「記録・痕跡による把握の原則」と「様子による把握の原則」は、互いに無関係ではない。

握の原則」を統合して、次のようなひとつの原則を立てることができるだろう。(ここで言うtは必然的にtとなる)

(233) 間接的把握の原則：

出来事を間接的な証拠から把握した場合は、証拠を観察している時にtが追加される。

この「間接的把握の原則」と前章で見た「時間関係と形態との対応規則」の組み合わせで、ここで見えてきたような「テイ」を説明することができる。

また、このような一般化を行うことで、ここまでの分析には当てはめられない、次のような現象も説明できるようになる。(234)(235)の例は、話者は出来事そのもの(「着く/学生だ」)は認識していない。このため、「着いた」とか「学生だった」とは言いにくい。この点については、ここまで見てきたものと同じである。しかし、一方で、ここでは「記録・痕跡」や「様子」を把握しているわけでもない。にもかかわらず、これらの例は「記録・痕跡」のところで見たのと同じような振る舞いをしている。即ち、「着いている」や「学生だ」のように、非過去の形を用いて述べている。

(234) 花子：次郎もう東京着いたかな？

太郎：今何時？12時か。10時にこっち出るんだったよね？で、新幹線がのぞみって言ってたから、1時間40分ぐらいか。あ、じゃあもう{??着いた/着いてる}ね。

(235) 花子：お兄ちゃん、お父さんって50年前まだ学生だったかな。

太郎：ええと、お父さんって何年生まれだっけ。1945年？じゃあ...、(しばらく計算して)あ、そうだね。50年前はまだ{??学生だった/学生だ}ね。

では、ここでtが現在に設定されているのはなぜだろうか。これは、話者がどうやって、これらの出来事の把握にたどり着いたのかを考えればいい。ここで、話者は論理的な思考を巡らせて、「(もう)着く」や「(3年前)学生だ」という出来事が過去に起きたということ把握した。つまり、「記録・痕跡」や「様子」ではなく、「論理」を証拠に、出来事を把握したわけである。そして、この「論理」は現在のものである。従って、「現在」にtが設定され、「着いている」や「学生だ」という形式として現れるわけである。

このように、一般化した原則である「間接的把握の原則」を定めることで、「記録・痕跡」や「様子」といった概念に限定されず、「間接的な証拠」の把握時と出来事時との時間関係で、「テイ」と「タ」の有無の組み合わせを説明することができる。

このように考えると、(156)で見た、定延(2004)の例も説明がつく。これも、「ピサの斜塔」の過去の状態を現在の「論理」という証拠から把握したものであるため、現在にtが設定された結果として、「タ」のない形として現れるのである。これは、定延の「情報のアクセスポイント」による説明とほぼ同じものだが、これを「tの追加設定」の問題として見ることで、「テイル」の記録用法と呼ばれるものや心理動詞の人称制限と言われるもの、さらにここで見た定延(2004)の事例などの、一見独立した問題に見える現象を、同

一の原理に基づくものとして説明することが可能になる。

このように、「間接的把握の原則」によれば、「テイ」と「タ」のさまざまな振る舞いについて説明することができるが、注意しなければならないのは、常に出来事の把握方法を示すために t が追加されるわけではない、という点である。例えば、「10分前何してた？」とか「3年前って、もう卒業してたっけ？」などと言うような場合の「テイ」は、「出来事の把握」などとは関係なく単に任意に設定された時点と出来事時との関係を表すだけのものである。このように、「単なる設定時」として t が設定された結果の「テイ」もあり得る。従って、「間接的把握の原則」で「テイ」と「タ」の全ての振る舞いが説明できるというわけではない。

このように見ると、柳沢(1994)が「非アスペクト的」と呼ぶような「テイ」と「アスペクト的」と呼ぶような「テイ」の違いは、確かに存在するように思える。即ち、前者が「証拠の観察時」として t が設定された結果として表れた「テイ」であり、後者が「単なる設定時」として t が設定された結果として表れた「テイ」だと言えるだろう。ただ、共に、 t の追加設定によって現れた「テイ」であるという点は変わらず、どのような形態で実現されるかは「時間関係と形態との対応規則」に従っている。このような点で、両者は同じもので、単に t が設定される動機だけが異なるものだとも言えるだろう。つまり、 t の追加設定の動機という点から見ると、二種類の「テイ」があるが、「テイ」の表す時間関係そのものは単一の規則に従っていると言えるだろう。

以上、本章では、まず、「記録・痕跡による把握」による t の設定についての考察を行い、次いで、「様子による把握」による t の設定について考察し、最後に、両者を統合し一般化を行った。本章では、「テイ」「タ」という形態に対応する意味を記述するという方法ではなく、「 t の設定」という観点から実際の使用場面における「テイ」「タ」の振る舞いを分析することで、これまで個別に扱われてきた「テイ」および「タ」の組み合わせと話者の事態認識との対応関係を、横断的に分析することを可能にした。

第4章

情報の有意性によるtの設定(状態相のテンス)

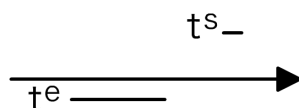
4.1. 背景

以下では、状態相の時制に関する問題について見ていく。

状態相は、時制に関して、非状態相にはない特徴を持っている。それは、非過去形と過去形が共に真となる場合が存在するという点である。既に見たように(2.4.2.2.2)、状態相の過去が真になるには、出来事時の「一部」が発話時に先行していればいいため、出来事時が発話時を含んでいる場合にも、過去形が使用できる。この場合、当然、現在形も使用できるため、異なる時制で言っても真となる場合が出てくるわけである。

例えば、発話時と出来事時の関係が以下の(236)のようである時、設定時の設定のしかたによっては、過去時制とも現在時制ともなり得る。例えば、(237)のaのように設定時を設定すれば、過去時制となるし、(237)のbのように設定時を設定すれば、現在状態となり得る。

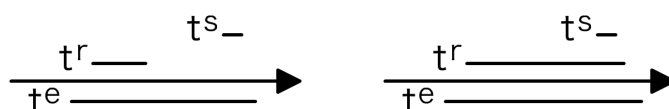
(236) 出来事時と発話時だけの時間関係：



(237) 設定時を含めた時間関係：

a. 過去状態

b. 現在状態



例えば、(238)のaのように現在時制で言っても真となり、bのように過去時制で言っても真になる、ということは、当然あり得る。

(238) a. 次郎の彼女はかわいかった。(過去状態)

b. 次郎の彼女はかわいい。(現在状態)

金水(2001)は、静的述語(本稿の状態相に相当)のもつこのような特徴を、「部分的期間の定理」と呼んでいる(金水2001:64-67)。部分的期間の定理は、例えば「アル」という動詞を例にとると、次のように説明できる。

(239) 部分的期間の定理

発話時現在を含むことによってアルを適切とする状態があるとき、その状態の継続期間のうち、発話時現在以前の部分を取り出すことによって、必ずアッタも適切となる。

つまり、例えば「椅子がここにある」が言える時は、必ず「(x秒前/x分前/x時間前)椅子がここにあった」と言うこともできる(金水2001:64-67)。

このように、状態相では非タ形で言える場合にはタ形で言うこともできるわけだが、問題は、常にどちらを使用しても構わないというわけではなかったり、どちらを用いるかでニュアンスが変わったりするという点である。

例えば、次の(240)のような場合、太郎が過去形で「かわいかった」と言うことができる場合は限られているだろう。太郎が既に次郎の彼女をよく知っているような場合、タ形では言いにくい、最近太郎が初めて次郎の彼女を見る機会があったような場合なら、タ形で自然に言えるだろう。

(240) 花子：太郎、次郎の彼女ってかわいい？

太郎：うん、ゆりちゃんは{かわいい/かわいかった}よ。

また、現在形で「かわいい」と言う場合、次郎の彼女が必ずしも太郎の目の前にいなければならないわけではない。例えば、太郎がここ半年次郎の彼女に会っていなかったとしても、「かわいい」と自然に言うことができる。これは、人の顔がそう頻繁に変化するものではないと考えれば、自然である。しかし、そのような場合(半年間会っていない場合)でも、状況を少し変えると、現在形「かわいい」が使いにくくなる場合がある。

例えば、次の(241)のように、太郎がもう今後は次郎の彼女と会うことがないだろうと考えているとすると、時間的には上と同じ状況(半年前から会っていない)であったとしても、現在形で「かわいい」と言うのはおかしくなる。

(241) (次郎は半年前彼女と別れた。太郎はそれ以来次郎の彼女に会っていないし、今後会うこともないと思っている)

花子：太郎、次郎の前の彼女知ってる？どんな子？見た目は？

太郎：うん、ゆりちゃんでしょ？ゆりちゃんは{??かわいい/かわいかった}よ。

このように、ある状態が現在も続いていると想定されているとしても、常に現在形でその状態を表すのが自然になるわけではない。

また、次の(242)のように、現在目の前に存在する状態でも、これを現在形でなく過去形(タ形)で表す場合もある。ここでは、「タ」を使うことで「発見」したという意味合いが生じる。

(242) (ポケットに手を入れたら、小銭が入っていた)

あ、ポケットにお金が入ってた。

この場合、お金は話者の目の前にあるにもかかわらず、タ形が使用されている。ここでは「入ってる」と現在形で言ったとしても構わないが、この場合、「発見」という意味合

いは薄れるだろう。このように、過去形を使うか現在形を使うかで、出来事に対する話し手の態度が異なって解釈される場合もある。

これまで、この状態相の時制に関しては、特に最後の例のように過去形の使用が話者の態度に関わっていると考えられるようなものについて多くの考察が行われてきた。このような「タ」はムード的な「タ」などと呼ばれている。

本章では、従来の研究とは逆に、まずはムード的な「タ」に焦点を当てるのではなく、ムード的でない、ないしはムード的と言にくい状態相の時制の用法に注目し、この用法の背景にある状態相の時制の決定要因となっている原則を導き出す。そして、その上で、この原則を応用することでムード的な「タ」についての説明を行っていく。

4.2. 先行研究

4.2.1. ムード的な「タ」

上で述べたように、状態相の文では、発話時現在に状態が存続していることが明らかであるにもかかわらず「タ」が使用されることがあり、これらの場合には「タ」がムードやモダリティの意味を付加するとされる。以下では、まず、このような「タ」について、先行研究の成果をもとに概観していく。

このような「タ」に関する言及は古くからあるが、以下では、まず、寺村(1984)による分類をもとに、この「タ」について概観していきたい。

寺村(1984)は、時制についての考察の中で、単純に「過去・現在・未来」という時制の一般則では説明できないタイプの時制を「叙想的テンス」と呼び、これらを意味機能ごとに以下のように分類している。

- (243) a. 期待(=過去の心象)の実現
- b. 忘れていたことの想起
- c. 過去の実現の仮想を表す
- d. 差し迫った要求
- e. 判断の内容の仮想

この分類のうち、本章の「状態相の「タ」の問題」に関わってくるのは、aの<期待(=過去の心象)の実現>とbの<忘れていたことの想起>である。以下では、まずaについて見、続いて、bについて見る。

まず、これまでの研究でこの現象がどのような観点から見られてきたのか、という点を2つ挙げておきたい。①1つ目は、非タ形の形でも言えるのにタ形が使われる場合、タ形が使用されることで、どのようなことが意味されるのか、という点である。そして、②2つ目は、そのようなことが意味される際に、なぜ過去形であるタ形が選ばれるのか、という点である。以下では、この2つの観点からムード的なテンスについて見ていきたい。

- (244) a. ムード的な「タ」はどのような場合に使用されるのか。
b. なぜ、過去形である「タ」の形が使われるのか。

4.2.2. 「発見」および「知識修正・補強」

4.2.2.1. 「期待(=過去の心象)の実現」

この「タ」は、次のように、話者が何かを発見したような場合に使われるものである。

- (245) (ポケットに手を入れたら、小銭が入っていた)
あ、ポケットにお金が入ってた。

上の文では、細かい文脈が設定されていないが、上の例にもう少し細かい状況設定をするとすると、次の(246)のaとbのような二種類に分けることもできるだろう。両者の違いは、aが話者が小銭を発見するまでそこに小銭があるということを考えていなかった場合で、bは話者がそこに小銭があることを想定していた場合である。

- (246) a. (ポケットに手を入れたら、小銭が入っていた。ポケットに手を入れて初めて気づいた場合)
あ、ポケットにお金が入ってた。
b. (話者はいつも父がポケットに小銭を入れているのを知っているので、父のズボンのポケットに手を入れて小銭を探す。小銭を見つけて言う。)
あ、やっぱりポケットにお金入ってた。

先行研究では、この二種類が分けられていない(三上1953, 寺村1984, 益岡,2000, 福田2002)場合もあるし、分けられている(金水2001, 井上2001, 定延2004)場合もある。例えば、寺村(1984)では、これらは共に「期待(=過去の心象)の実現」を表すものとされている。分類名からも分かるように、寺村によるこのタイプの「タ」は、話者が当該の状態を発見した際に事前の期待(=過去の心象)を持っているような場合のものである。

例えば、以下の(247)のaは話者が「傘がある」という期待を、bは「店が休みである」という期待を予めもっている。

- (247) a. (忘れた傘を教室に取りに戻る。傘を発見して...)
「あ、あった。」
b. (店が休みかなと思いながらやってきて)
「やっぱり休みだった。」

(寺村(1984:105-106)。一部改編。)

このような「期待」の存在を指摘する一方で、寺村は別段「期待」のようなものが存在しないような場面でも「タ」が使用できることも認めている。以下の(248)の例では、話者はそこに銭があるということを予め期待していたわけではない(少なくとも、そのように振る舞っている)が、このような場合でも「タ」は使用できる(寺村(1984:106)より引用)。

(248) この男は、ほかにも妙な癖がある。自分の持っている錢を、人の知らない間に石崖の穴かどこかに隠しておいて、
「おや、ここに錢があつた。こいつで一ぱい飲もう」と云って人に御馳走する癖がある。

(井伏鱒二「駅前旅館」)

寺村は、このような「タ」は「発見」の「タ」と呼ぶべきものかもしれないとしつつも、これを別の分類として立てるといことはしていない。

4.2.2.2. 「発見」の「タ」

上で見たように、寺村(1984)等では「発見」を独立した分類としていないが、金水(1998)、井上(2001)、定延(2004)などでは、「発見」は独立した分類として設けられている。ただ、「発見」の定義自体は少しずつ異なる。

「発見」は、「期待」のようなものが存在しなくても「タ」が使えるという点で、「期待の実現」とは異なるように見えるが、本当に何の「期待」もないという状況で発見され場合にも「タ」が使用できるのかどうかということが問題となる。上で見たように、寺村は「存在を期待していたわけではなく、偶然見つけた」(寺村1984:106)場合にも使われる「タ」があるとしており、金水(2001:61)では、「何の前提もなく文字通り「発見」された」場合がこれに当たるとしている。一方、「発見」の「タ」に何らかの前提が必要だとする立場もある(益岡2000:24, 井上2001:44, 定延2004:27)

例えば、金水(2001)は何の前提もなく文字通り「発見」された場合の例として次のようなものを挙げている。

- (249) a. おや、こんな夜遅くに汁粉屋が開いてたよ。
b. あら、ご飯が炊いてあつたわ。お昼にいただくかしら。

(金水2001:62)

確かに、これらの例では、話者が予め「汁粉屋が開いている」とか「ご飯が炊いてある」という予測をしていたわけではないので、寺村の言う「期待」のようなものは存在しないと言える。

一方、何の前提もないような場合には使いにくいとする立場からは、実際に「タ」が使いにくい例も提示されている。

例えば、井上(2001)では、次の(250)のような例が挙げられている。

- (250) (誰のものかわからない財布が落ちているのが偶然目に入って)
a. あれ？こんなところに財布が落ちてる。(どういうこと?)
b. ??あれ？こんなところに財布が落ちてた。

(井上2001:145)

井上(2001)では「発見」の「タ」は「観察行為→状態の判明」というプロセスがあった

ことを表すとされているが、「観察行為がなされる背景には、何らかの予測や問題意識があることが多い」ため、このような予測や期待のない場合には「タ」が使用されにくいとしている(井上2001:144)

定延(2004:15-)では、「探索」という概念を用いることで、「発見」の「タ」が使用できる場合とできない場合があることが説明されている。

例えば、以下の(251)のaとbはどちらも同じような状況(サルを見かけた)であるが、それがどこであるかによって、「タ」の自然さが異なっている。もし、発見の「タ」が何の前提もなく発見がなされた場合にでも使用できるのであれば、下のbのように言うこともできるはずだが、実際にはこれは言えない。定延(2004)は、これを「探索」(定延1999, 2000, 2001a等)という概念を用いて説明している。

(251) a. (山の中をハイキング中にサルを見かけた場合)

あ、サルがいたよ。

b. (自宅の庭でサルを見かけた場合)

??あ、サルがいたよ。

(定延(2004:20)から引用。一部改編。下線及び許容度の判断(??)は著者による。)

定延(2004)の議論の前提として、「タ」は「情報のアクセスポイント」が過去であることを表す(定延2001, 2004, 2010)のものであり、情報のアクセスポイントは「探索体験」の時点におかれる、ということがある。この場合、「山」はよく知らない場所であり、「探索」が行われやすい。一方、「庭」のようによく知っている場所では、「探索」は行われにくい。このため、前者の場合には「探索」の時点に情報のアクセスポイントが設定され、その結果として過去形である「タ」が使用される、と説明できる。

ただし、このように、「山」のように探索が行われやすい場所である場合に「発見」の「タ」が使われると考えると、次の(252)のような例をどう説明するのか、という問題が生じる。

(252) (洗面所にゴキブリを発見して)

「お〜い、ゴキブリがいた。殺虫剤持ってきて〜！」

(定延(2004:21)より引用。下線は筆者による。)

この場合、自宅の洗面所ということで、探索意識が働きやすい環境ではない。このような場合でも「タ」が使用できるのはなぜだろうか。これに対し、定延(2004)は「これはゴキブリがひどく嫌われる害虫であって、家の中にゴキブリがいないかと家族が常々(もちろん潜在的にはあるが)気を付けているという想定が自然だから」(定延2004:21)だとしている。このように、たとえよく知っている場所であっても、探索課題が設定されていれば、探索は行われやすいため、ここでは「タ」が使用できると説明されている。

また、井上(2001)や定延(2004)、福田(2002)では、発見したその場での発話ではないものも「発見」の「タ」と同じ枠組みで説明されている。

例えば、井上(2001)では、以下の(253)のような例が挙げられている。この例は、日記

内の記述であることからわかるように、当該のCD自体は目の前にはない。このような点で、典型的な「発見」の「タ」ではない。井上は、このような「タ」は「発見」の「タ」とは言えないとしながらも、「タ」が使用されるメカニズム自体は「発見」の「タ」と同じものだとしている。

(253) (今日太郎からもらったCDを聞きながら、日記を書いている)

今日太郎からCDをもらった。

ベートーヴェンの「第九」だった。

今聞いているが、なかなかいい演奏だ。

(井上(2001:138-139)より引用)

井上によると、「発見」の「タ」は「観察行為→状態の判明」というプロセスが存在するものであり、このプロセスの存在は「見たら...だった」を伴えるかどうかという基準で判定することができる。上の例の場合、「見たら...だった」と言えることからわかるように、このようなプロセスが存在している。これは、上の例を次のように言い換えられることを見てもわかる。

(254) 見たら、ベートーヴェンの「第九」だった。

一方、このような「観察行為→状態の判明」というプロセスの存在しないものについては、次の(255)のような例が挙げられている。この例の場合、話者は自分自身でCDを買っている。この場合、「タ」の使用は不自然である。この場合、(256)のように言い換えても不自然だが、井上によると、(255)が不自然なのは、(256)が不自然なのと同じ理由によるものだということである。

(255) 今日CDを買った。

??ベートーヴェンの「第九」だった。

今聞いているが、なかなかいい演奏だ。

(256) 見たら、ベートーヴェンの「第九」だった。

また、定延(2004)でも同様に、次のようなものも「発見」の「タ」とされている。

例えば、以下の例((257))では、話者の発話は山を下りてからのものである。この場合もやはりサルが目の前にいる状況ではないので、典型的な「発見」の「タ」とは異なる。

(257) (山をハイキング中に大きなサルを見かけた人が、山を下りてから言う。)

「あの山のサルは大きかったよ。」

(定延2004より引用。一部改編。)

上で見たように、定延(2004)では、「発見」の「タ」は「探索」が過去のものである場合に使用されるとしているが、上の例で「タ」が使われるのも、やはり「探索」の時点が過去であったという理由によるということである。ただ、両者は「探索」の種類が異なるものとされている。上の例の場合、探索はミクロ探索であり、(257)の場合はマクロ探索である。

ミクロ探索とマクロ探索との違いは、次のようなものである(定延2004:14-15)。ここで

は、上の例のように発話現場にサルがいる場合はミクロ探索であり、山を下りてサルが発話現場にはいない場合には、マクロ探索となる(探索についてより詳しくは定延(1999, 2000, 2001a))。

(258) a. ミクロ探索：

一瞬一瞬連続して行われる。

b. マクロ探索：

探索者が探索課題を解決するか、探索領域を退出するかしてはじめて終了する。

このように、定延(2004)では、ミクロ探索であるかマクロ探索であるかの違いはあれ、「発見」の「タ」は探索体験の時点が過去であることを表すものとされている。

4.2.2.3. 知識修正・補強

このタイプは、上で見た「発見」と似ている面がある。実際、これが「発見」とは区別されずに分析されることもある(三上1953, 寺村1984, 福田2002)。しかし、上で見た金水(2001)、井上(2001)、定延(2004)等では、これらが区別され、別に分類されている。

金水はこのような「タ」を「関連づけ」と呼び、「発見」とは区別している。これは、次の例のような「タ」である。

(259) (ドリルの答え合わせをして)おや、答えは3番だったか。

(金水2001:60より引用)

この「タ」について、金水は次のような意味を持つものだとしている(金水2001:60)。

(260) a. 言語主体がある状態(例えば、ドリルの答)について知ろうとしていた時点、あるいは知っておくべきであった(と後から考えられる)時点、がある。その時点ではその状態についての正しい知識を得ることができなかったり、正しい知識があることすら思いも寄らなかった場合が多いが、とりあえず暫定的な(あるいは誤った)答えを得ることができた場合もある。

b. aの時点以後、例えば発話時に、その状態について再び考える機会があった。例えば、正しい状態について知識が得られた場合など。

c. その状態は発話時現在も成り立っている。

金水(2001)では、「発見」は「何の前提もなく文字通り発見」されたものとされているので、この「関連づけ」は「発見」とは異なるものといえることができるだろう。上で見た寺村(1984)の「期待の実現」は、これに相当することになる。

井上(2001)でも、この「関連づけ」に相当すると思われる分類がある。井上(2001)では、これが「認識の補強・修正」と呼ばれている(井上2001:146-)。ただし、井上では、これは「タ」ではなく、「タ(ノ)カ」の形で分類されている。井上によると、この「タ」と「発見」の「タ」の違いは、「発見」の「タ」が「見たら...だった」を補って自然に言

えるのに対し、この「タ」はそれが不自然になる、という点がある。

例えば、以下の(261)のaとbは前提となる状況も文もほぼ同じである。違いは文末が「タ」であるか「タノカ」であるか、ということである。しかし、前者の場合には「よく見たら」が言えるのに対し、後者の場合には言えない。このことから、aが「発見」で、bが「認識の補強・修正」と言えるわけである。

(261) (前に探していたものが予想外の場所で偶然見つかった)

a. 何だ、(よく見たら)こんなところにあった。

b. ??何だ、(よく見たら)こんなところにあったのか。

また、無意識に誤った認識を持っていたような場合にも、その認識が改められる場合に「タ」が用いられる(益岡2000:25)が、このようなものも、井上(2001)ではここに分類されている。例えば、以下の(262)のような場合がそれに当たる。この場合は、特に予想や期待のようなものは存在しないが、話者は誤った想定を持てしまっている。

(262) (話している途中で、相手がそれまで別の話題について話をしていたことに気がついて)

何だ、その話でしたか(その話だったんですか)。

このように、井上(2001)では、明確な「期待」や「知ろうしていた時点」がなかったものも、ここに含めている。

また、定延では、このタイプの「タ」は「知識修正」と呼ばれている。基本的には井上(2001)と同じ立場であるが、「発見」との違いとしては、「発見」が先に見たように「探索」という体験に重点が置かれているものであるのに対し、「知識修正」は古い知識が新しい知識に置き換えられるという点に重点が置かれているものだと説明されている(定延2004:44)。

本稿では、このタイプの「タ」を「知識修正・補強」と呼ぶことにする。

4.2.3. 思い出しの「タ」

このタイプの「タ」は、「回想」「想起」などと呼ばれてきているもので、次のようなものがある(金田一1955:32)。これらは、忘れていたことを思い出した、ということを表すものである。(寺村1984:107)

(263) そうそう、今日はぼくの誕生日だった。

(金田一(1955:32)より引用)

このタイプの「タ」の例として、寺村(1984)では次の(264)のようなものが挙げられている。これらの「タ」も、単純に「過去」を表しているとはいいいにくい。aの場合、「ある」のは現在のことであり、「帰る」は未来のことである。

(264) a. 俊樹は買ったての新しい手提げ鞆を膝の上に取り上げて、準備して来た金を出した。

そして隠岐氏が受領書に署名している時、ふいと彼は云い出した。

「そうでした。僕、伴子さんにお頼まれしていたことがあるんです。守屋さんの京都の旅館の名なんですけれど…」

(大仏次郎「帰郷」)

b. 英子は後から階段を駈けるようにしておりて来て、会社の出口に信吾たちと並んで立った。ひどい雨なので、顔もなおさなかったのだろう。

「どこまで帰るんだったかね」と信吾は言おうとしてやめた。もうおそらく二十度も聞いておぼえないことだ。

(川端康成「山の音」)

(寺村1984:107)

これらは、過去にそうであったが、よく覚えていない、というようなことが意味されている。例えば、次のaのように過去形で言うと、単に過去と解釈されるが、bのように過去形に「ノ」と「ダ」の過去形を付加すると、「昔確かそうだったと思うが、よく覚えていない、それを確かめるために聞く」(寺村1984:107)、というニュアンスになる。

(265) a. 君、ビール飲んだね。

b. 君、ビール飲むんだったね。

(寺村(1984:107)より引用)

寺村では、これらの「タ」は「名詞+ダ」の形と、「ある」「いる」の場合が多いとされている。益岡(2000)も同様の立場で、動的な述語の場合には「ノダ」を付加する必要があるとしている(益岡2000:30)。

このタイプの「タ」の表す意味については、金水(2001)が、以下のように分析している。

(266) a. かつて言語主体(話し手など)が直接その事柄を知る機会があった。

b. 文脈により、aの時点が前面化されている。

c. 当該の事柄は、現在も成り立っている。

d. 知っていたのに忘れていた、あるいははつきり思い出せないという文脈が多い。そのために、相手に質問したり確かめたりする発話となっている場合がある。

(金水2001:59)

井上(2001)では、以下の(267)のような例が挙げられている。井上(2001)では、「思い出し」の「タ」は「「その場の問題解決に有効な情報が話し手自身の過去の体験の中に見いだされた」ということを述べる表現」(井上2001:150)とされおり、「思い出し」が「過去の体験」に関するものとされている。

(267) 甲：今、過去形の意味・用法の対照研究をやっているんですけど、何か参考になる本か論文はありませんか？

乙：この間、『「た」の言語学』という本が出ましたが、ご存じないですか？

甲：そういえば、そういう本がありましたねえ。

(井上(2001:151)より引用)

井上(2001)の特徴としては、この「思い出し」の「タ」を「体験」という観点から捉えているところにあるだろう。

この「タ」については、どのような述語の場合に、「思い出し」の意味が生じるか、という問題がある。この「タ」は上の寺村の例に見るように、「ノダ」を付加してさらに「タ」を加えた「ンダッタ」の形で用いられることが多い。このような「ノダ」の形ではなく単に「タ」だけが付加された形の場合に思い出しの意味が生じる例としては、寺村(1984)では①名詞文と②予定の「ある」の2種類が挙げられているのみである。

三上(1953:226)では、これら以外に、「油絵をお描きになりましたね？」のように習慣を表すものも挙げられている¹。上で見たように、寺村(1984)では同様のものは「思い出し」ではなく「単なる過去」になるとして、除外されている。また、金水(2001)や定延(2004)でも、このような習慣を表すもの、また、真理を表すようなものの場合でも「思い出し」の意味が生じるとしている。

このように、三上(1953)や寺村(1984)では、状態性の述語の中でも、形容詞や状態動詞(予定の「ある」を除く)以外のものは挙げられておらず、状態性述語全般にこの「思い出し」の「タ」が当てはまるとはされていない。

一方、井上(2001)の場合は、上で見たように、存在の「ある」のような述語も挙げられている。また、金水(2001)では、「この椅子は先刻からここにあった」のようなものも「思い出し」と同じ分類とされている(この例の場合、上で見た条件のdは当てはまらないが、金水(2001)では、dは必須ではないとされている)。

このように、思い出しの「タ」を作る述語の種類については、以下の表に見るように先行研究間で違いが存在する。

¹ 三上(1953:226)では、これは「儀礼的な問い」という分類になっているが、「想起」に似たものだとされているため、ここではこの分類に含める。

(268)

| | ノダ | 名詞 | 予定の 「ある」 | 習慣・真理 | 存在の 「ある」 |
|-----------------------|----|----|-------------|-------|-------------|
| 寺村(1984) | ○ | ○ | ○ | | |
| 三上(1953) | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 井上(2001)・ 金水(2001) | ○ | ○ | ○ | *○ | ○ |

(*井上(2001)では「習慣・真理」のようなものについては触れられていない)

4.2.4. 取り返しがつかないことを表す「タ」

この「タ」は、定延(2004)で「反実仮想」の「タ」として挙げられているものである。「反実仮想」は必ずしも状態相の時制に関わる問題というわけではないため、本章で扱わないが、状態相の「タ」に関わる面があるため、その点についてここで見ておきたい。

定延(2004)が注目しているのは、この「タ」が、述語の表す出来事が起こる(はずだった)時間よりも前の時点でも使用できてしまうという点である。

以下、若干会話の状況が込み入っているので、該当部分を直接引用する。「たとえば、Xがテレビゲームで、或るロールプレイングゲーム(ゲームの主人公を操ってそのゲーム世界を冒険するゲーム)をやっているとす。また、Xの友人であり、このロールプレイングゲームの熟練者であるYが、これを横から観戦しているとしよう。ゲームの或る場面で、Xが操る主人公は商人から、或るアイテムを買わないかと誘われたが、Xはこれを断った。これを見ていたYが「今おまえの判断はまずかった」という感想」(定延2004:53)を述べるのに言う文としては、次の(269)のaもbも共に可能である。

(269) a. 誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火が上がるんだけどなあ。

b. 誘いを受けてアイテムを買えば、ゲームのエンディング場面で打ち上げ花火が上がったんだけどなあ。

(定延(2004:53-54)より引用)

この場合、後者は「タ」を使用しているが、実際には、まだエンディング場面は迎えていない。従って、これには説明が必要だろう。

定延では、このことが「情報のアクセスポイントは運命の分岐点に設定される」ということで説明されている。ここでは、Xがアイテムを買ったか否かが、その後の運命(打ち上げ花火が上がるか否か)を分ける分岐点になっている。つまり、ここでアイテムを買わなかったことで、既に取り返しのつかない状況になっていると考えることができる。この「運命の分岐点」に情報のアクセスポイントが設定されると考える、発話時の時点では既

にこの時点は過去になっているので、「タ」が自然に使用されることが説明できる。実際、もし取り返しがつくという状況であったとしたら、(269)のbのように「タ」で言う場合の許容度は低くなるように思える。

このように、運命の分岐点にアクセスポイントがあると考ええると、次のような反実仮想ではない事例も説明できる。この例は状態相の時制に関わる問題で、本章での問題に関わってくる。

以下で2つの例((270)(271))を見るが、それぞれの例で「2つ前の停留所」について言う場合と「2つ後の停留所」について言う場合がある。このうち、後者の「2つ後の停留所」に関して、タ形の自然さに(270)と(271)で差が生じるという問題がある。

(270) (2人の日本人が、香港でアバディーンという停留所に行こうとバスに乗ったものの、バス停の名前表示や車内放送が中国語でわからず、バスの中で途方にくれている。アバディーンはどの停留所だろうかと話し合ううちにバスはいくつもの停留所を過ぎていく)

- a. 「アバディーンって、ひょっとして2つ前の停留所だったんじゃない？」
- b. ?? 「アバディーンって、ひょっとして2つ後の停留所だったんじゃない？」

(271) (バスの中で「どこがアバディーンだろうか」と話している2人の日本語が癢にさわったのか、なぜかバスの運転手が2人に対して怒りだし、2人は途中でバスから道ばたに降ろされてしまった。走り去るバスを見ながら言う)

- a. 「こわかったね～。ところでさ、アバディーンって、ひょっとして2つ前の停留所だったんじゃない？」
- b. 「こわかったね～。ところでさ、アバディーンって、ひょっとして2つ後の停留所だったんじゃない？」

(定延(2004:49)、定延(2004:58)より引用。状況説明文は著者により一部改編。)

二つの例の文脈の違いで重要なのは、前者はまだバスを降りて折らず、後者は既にバスを降りているという点である。そして、形式の違いで重要なのは、「2つ後」の停留場について言う場合に、前者は過去形で言うのが不自然だが、後者は過去形で自然に言えるという点である。

(272) 文脈による過去形の使用の自然さの違い

| | 2つ手前の停留所 | 2つ後の停留所 |
|------|----------|---------|
| 降りる前 | タ形○ | タ形× |
| 降りた後 | タ形○ | タ形○ |

(表は筆者による)

このうち上の例は上で見た「知識修正」で説明が可能なものだが、下は「知識修正」ではうまく説明できず、「運命の分岐点」を利用して説明する必要がある。まず、「知識修

正」で説明できる前者について見る。

(270)の例では、aは既に通過済みの「2つ前の停留所」について話しており、bはまだ通過していない「2つ後の停留所」について話している。ここでaの場合は「タ」が自然に言えるのに対し、bの場合は「タ」は不自然になる。aで「タ」が自然になることについては、2つ前の停留所を過ぎた辺りで、2人が無意識に「ここはたぶんアバディーンでない」という認識を持っており、その認識が発話時に修正されたと考えれば説明できる(定延2001)。また、bで「タ」が不自然になるのは、bの場合は2つ後の駅であり、修正されるべき当該の認識を話者が持っていないので、当然だと言える(定延2004)。

ここで興味深いのは、(271)のような場合には、aの場合だけでなく、bの場合にも「タ」が自然になるということである。このことは、次のように、「運命の分岐点」にアクセスポイントが設定されるとすることで説明ができる。

(271)の例では、(270)の例とは違い、2人の話者は既にバスを降りて(降ろされて)しまっている。このため、2つ後の駅で降りるということはもう不可能であり、取り返しのつかない出来事である。ここでは、バスを降りる時点が「運命の分岐点」として存在しており、発話時がこの分岐点の後にあるため、「タ」が自然に使用できるわけである。この文は反実仮想の文とは言えないが、運命の分岐点という概念でここで「タ」が使える理由をうまく説明できる。

4.2.5. 過去形(「タ」)が使われる理由

ここまで、「タ」の使用によってムードやモダリティの意味が付加される例について、それがどのようなムード・モダリティ性であるのかという点について見てきた。これらの意味が「タ」の表す過去という時制的な意味とどのような関係にあるのかについては、必ずしも詳しく論じられてこなかった。しかし、金水(2001)、井上(2001)、定延(2004)では、この点についても考察がなされている。以下では、このように、なぜこれが「タ」という過去時制で表されるのかという点について見ていきたい。

(273)

| | 分類 | | | |
|----------|----------|--------------|------|----------------------------|
| | 寺村(1984) | 期待の実現(発見) | | 忘れていたことの想起 過去の実現の 仮想 |
| 金水(2001) | 発見 | 関連づけ | 回想 | |
| 井上(2001) | 発見 | 認識の補強・ 修正 | 思い出し | |
| 定延(2004) | 発見 | 知識修正 | 思い出し | * 反実仮想 |

(※取り返しがつかないことを表す「タ」は定延(2004)の「反実仮想」に入る)

4.2.5.1. 「発見」が「タ」で表される理由

まず、「発見」について、金水(2001)は「話者がその情報と出会った後の段階にある」(金水2001:76)としており、このことから、当該の情報が「タ」で表されることが説明できる。

井上(2001)では「発見」の「タ」は「発話時以前のある時点で観察された状態pを、発話時における同一の状態pから切り離して独立に叙述する(前景化させる)」(井上2001:139)としている。井上によると、「観察された状態p」がこのようにして切り離されることで、発話時以前の状態となり、過去時制の「タ」が使用されることが説明できる。

定延(2004)では、既に見たように、「発見」は「探索」という体験の時点が過去であり、この「探索」の時点に情報のアクセスポイントが設定されるため、「タ」が使用されると説明されている。

4.2.5.2. 「知識修正・補強」が「タ」で表される理由

このタイプの「タ」は、金水(2001)では「関連づけ」と呼ばれているが、これは「過去のある時点にその情報が必要であったにも関わらず、その情報に出会うことができなかったことを示す」(金水2001:75-76)とされており、当該の情報が必要だった時点が過去であるため、この情報が過去時制で表されることが説明できる。

また、井上(2001)では、「認識の補強・修正」と呼ばれるこの「タ」について、「発話時以前に話し手が認識すべきであった状態pを、発話時における同一の状態pから切り離して独立に叙述する」(井上2001:147)とされている。ここでは、「認識すべきであった状態

p」が発話時と切り離されて叙述されているため、pが過去形の形で言われることが説明できる。

定延(2004)では、既に見たように、このタイプの「タ」は古い情報が新しい情報に書き換えられることを表しているとされているが、この、古い情報の登録時点に情報のアクセスポイントが設定されるとしている(定延2004:43-44)。

4.2.5.3. 「思い出し」が「タ」で表される理由

このタイプの「タ」は金水では「回想」と呼ばれているが、これは「過去にその情報に出会ったことを示す」(金水2001:75)とされており、情報と出会ったのが過去であるという点で、過去時制が使用されると説明できる。井上(2001)は、この「タ」について、「話し手が過去に体験した状態pを、発話時における同一の状態pから切り離して独立に叙述する」としており、「体験した状態p」が発話時と切り離されることで過去時制になると説明している。定延(2004)は「現在というアクセスポイントがうまく働かず、その知識情報に触れた過去の体験時点がアクセスポイントとして選ばれる結果」(定延2004:41)、過去時制となるとしている。このように考えると、ここで現在というアクセスポイントがうまく働いていないのは、話者が当該の知識情報をすぐに思い出せないためだと説明できる。

(274) 過去形が使われる理由の説明のまとめ：

| | 発見 | 知識修正・補強 | 思い出し |
|--------------|--|---|---|
| 金水 (2001) | 話者がその情報と出会った後の段階にある | 過去のある時点にその情報が必要であったにも関わらず、その情報に出会うことができなかった | 過去にその情報に出会った |
| 井上 (2001) | 発話時以前のある時点で観察された状態pを、発話時における同一の状態pから切り離して独立に叙述 | 発話時以前に話し手が認識すべきであった状態pを、発話時における同一の状態pから切り離して独立に叙述 | 話し手が過去に体験した状態pを、発話時における同一の状態pから切り離して独立に叙述 |
| 定延 (2004) | 「探索」という体験の時点に情報のアクセスポイントが設定される | 古い情報の登録時点に情報のアクセスポイントが設定される | 現在というアクセスポイントがうまく働かず、その知識情報に触れた過去の体験時点がアクセスポイントとして設定される |

4.2.6. 取り返しがつかないことが「タ」で表される理由

このタイプの「タ」については、上で見たように、定延(2004)は「運命の分岐点」に情報のアクセスポイントが設定されるためだとしている。従って、この運命の分岐点が発話時以前であることによって、これが過去時制になることが説明できる。

このように、これらの研究では、このような「タ」の表すムード・モダリティ性が「過去」という意味とどのような関係にあるのかについて考察がなされている。

4.2.7. ムード的な「タ」についての疑問

ここまで、これまでの研究をもとに「ムード的な「タ」」と呼ばれてきたものについて見てきたが、これらの研究成果を踏まえ、ムード的な「タ」について残っている疑問について考えてみたい。

まず、状態相の「タ」は、もちろん、ムード的な「タ」だけではない。しかし、ここまでの研究では、ムード的な「タ」とムード的でない「タ」との関係についてはあまり論じられてきていないように思える。そもそも、「ムード的でない「タ」」というのは、どのような「タ」のことだろうか。これは、「ムード的な「タ」」がどこまでを含むのか、という問題の裏返しとも言えるが、この点についてはあまり問題とされてきていない。このように、ムード的な「タ」とムード的でない「タ」との関係という点で疑問が残っている。

また、上で見たように、ムード的な「タ」がなぜ過去時制で表されるのか、という点についても様々な考察がなされているが、これらの考察の中では、「発見」「知識修正・補強」「思い出し」のそれぞれの「タ」について、個別の説明が与えられている。

井上(2001)では、状態pが発話時において存在する状態pと「切り離される」という点では共通しているが、当該の「切り離し」が行われる条件については、それぞれの用法において個別の条件が与えられている。また、定延(2004)では、情報のアクセスポイントの設定が過去であるという点では共通しているが、情報のアクセスポイントが設定される時点の定められ方については、それぞれの用法に個別の条件が設定されている(上の表を参照)。このように井上(2001)の言う「切り離し」や定延(2004)の「アクセスポイントの設定」がなされる条件について、より一般化された説明はできないだろうか。

このようなことを踏まえ、ムード的な「タ」については、ムード的ではない「タ」との関係も含めて、より包括的な一般化が可能ではないか、という点について考察の余地があると言えるだろう。

4.3. 分析

4.3.1. ムード的な「タ」とムード的でない「タ」

4.3.1.1. ムード的な「タ」の範囲

「タ」の中には、先行研究では「ムード的」な「タ」と区別されていないが、あまり典型的なムード的な「タ」とは言えないような「タ」も存在する。

例えば、典型的な「発見」の「タ」と言えば、以下の例((275))のように、発見がなされたその時点で発せられるような「タ」だろう。そもそも、このような「タ」が注目されるのは、目の前に当該の状態が存在するにもかかわらず、「タ」が使用されるからである。

(275) (ポケットに手を入れたら、小銭が入っていた)

あ、ポケットにお金が入ってた。

しかし、上で見たように((255)(257))、当該の状態が既に目の前にないものについても「発見」の「タ」の例として挙げられる場合がある。

例えば、井上(2001)では、「発見」の「タ」とは異なるとしながらも、「タ」が使用されるメカニズムが同じであるものとして、次の(276)のような例が挙げられている。

(276) (甲の妻が無事出産した。甲はすぐに病院から母に電話をかけた。)

甲：今、生まれたよ。

母：そう。で、どっちだった? (→見たらどっちだった?)

甲：男だったよ。(→見たら男だった。)

(井上2001)

4.2.2.2でも述べたように、井上(2001)による発見の「タ」の判定条件は「観察行為→状態の判明」というプロセスが存在するかどうかであり、これは、「見たら...だった」という表現を自然に伴えるかどうかで判断することができる。上の例では、このように言えるので、「発見」と同じメカニズムに支えられているということができる。

また、定延(2004)では、次の(277)のような例が「発見」の「タ」の例として挙げられている。この場合も、サルを見た瞬間の発話ではなく、発見後時間が経ってからの発話である。

(277) (山をハイキング中に大きなサルを見かけた人が、山を下りてから言う。サルはもういなくなっている。)

あの山のサルは大きかったよ。

(定延2004より引用。一部改編)

定延(2004)では、「タ」は「探索体験」の時点を表すとされている。この場合、「山」が探索領域となっており、話し手が山に入ってから山を下りるまで「探索」が続く。山を下りた後は「探索」は終了しているので、「タ」が使えることが説明できる。

このように、井上(2001)や定延(2002)では、発見時に発せられるものではない「タ」に

ついても、「発見」の「タ」と同様の原理に基づくものとして説明されている。ただ、ここでは、このように、当該の状態が発話時の時点で既に目の前に存在しないものについては、発話時の時点で状態がまだ目の前にあるもの、とは区別し、「発見後」の「タ」と呼ぶことにする(本稿でも、両者は同じ原則に基づくものとするが、ひとまず区別して記述する)。

井上(2001)や定延(2004)では、「発見」の「タ」がどこまで適用されるのかについて積極的に論じられていないが、この「発見後」の「タ」を「発見」に含めると、このタイプの「タ」に含められるものの範囲はかなり広くなることが予測される。

例えば、定延(2004)で挙げられる上のような例を発見の「タ」と同じメカニズムに基づいていると考えれば、以下の(279)のa～cのようなものも、発見の「タ」だと言えるだろう。aの場合は彼女に会っている間が、bの場合は、レストランに入ってから出るまでが、cの場合は、ソウルに行ってからソウルを発つまでが、探索の探索領域であったと考えれば、aと同じメカニズムに基づいていると言える。また、「見たら」や「～てみたら」を自然に伴えることから、井上(2001)の「発見」の判定条件にも適合していると言える。

(278) あの山のサルは大きかったよ。

(279) a. 次郎の彼女は(見たら)かわいかったよ。

b. ソウルの気候は(行ってみたら)寒かったよ。

c. あのレストランの料理は(食べてみたら)おいしかったよ。

もし、このようなものを「発見」の「タ」と考えると、次のようなものも「発見」の「タ」と言えるのではないだろうか。以下の(280)のa～cで、話者がそれぞれ初めて「次郎の彼女に会った/ソウルに行った/料理を食べた」のであった場合、これらの「タ」も全て「発見」の「タ」だということになる。

(280) a. 昨日次郎の彼女に会ったんだ。次郎の彼女かわいかったよ。

b. 先週末、ソウルに行ってきたよ。ソウルは寒かったよ。

c. 昨晚、駅前のレストランに行ってきたんだ。あの店の料理おいしかったよ。

しかし、これらについては、「タ」がムードを表しているとは言いにくい面もある。なぜなら、「昨日」や「先週末」、「昨晚」といった時を表す副詞で、「会う」や「行く」が過去であることが指定されている。このため、「タ」が使用されるのは、ある意味で当然のことである。ただ、その一方で、これら場合にも非タ形で「かわいいよ/寒いよ/おいしいよ」のようにも言うことができ、「タ」があるのとないのとで異なる意味合いとはなる。

また、以上のようなものが「発見」に含まれるのならば、次の(281)のようなものはどうだろうか。これら場合は、そもそも「かわいい/寒い/おいしい」のように現在形で言うことができないものである。ただ、これら場合にも「観察行為→状態の判明」というプロセスが存在しないわけではないため、ある意味では「発見」と言えるものである。

- (281) a. 次郎の彼女は昨日もかわいかった。(??かわいい)
 b. 今年もソウルに行ってきたが、とても寒かった。(??寒い)
 c. 昨晚も、駅前のレストランに行ってきた。ピザを食べたが、おいしかった。
 (??おいしい)

このように、これらの「タ」を「発見」の「タ」と考えると、「発見」の「タ」の範囲はかなり広がる。

また、「思い出し」の「タ」についても、井上(2001)は(267)で見たような例を挙げているが、これは、以下の(282)のような例と何らかかわるところはないとしている。(282)は、そもそも「タ」で言えないものだが、井上によると、これも「思い出し」の「タ」と同様のメカニズムに基づくものだということになる。

- (282) そういえば、以前そういう本がありましたねえ。
 cf. *そういえば、以前そういう本がありますねえ。

(井上2001)

この場合、「以前」という時間副詞があることから「過去」であることが特定されるため、そもそも非タ形は使用できない。このようなものも「思い出し」と同種のものと認めるとすると、「思い出し」の範囲も広がりそうである。

このように見ると、ムード的な「タ」は、見方によっては、三上(1953)や金田一(1955)、寺村(1984)等で典型的なものとして挙げられたものよりも、かなり広範囲に及んでいる見ることもできる。ただ、ここまでムード的な「タ」(及びこれと同じ原理で使用される「タ」)の範囲が広がると、むしろ疑問に思われるのは、「ムード的ではない「タ」」とはどんな「タ」なのか、という点である。以下では、この点について見ていきたい。

4.3.1.2. ムード的でない「タ」

ここまでは、ムード的な「タ」と呼ばれる「タ」について見てきたが、ここでは、ムード的な「タ」として研究されてきたものとは異なる「タ」について見てみたい。

冒頭の例でも見たように、状態相の現在形(非タ形)は、当該の状態が目の前で成立しているわけではなくても、もちろん使用できる。Xがここ半年Yに会っていなくても、Xは「Yはかわいい」と言うことは可能である。しかし、これも冒頭の例で見たように、ここで現在形を使用するのが不自然になる状況もあり得る。そ107れは、Xがもう二度とYに会うことがないだろうと思っているような場合などである。このような問題は、ムード的な「タ」の問題とは異なる問題のように見える。以下では、福田(2002)による、この問題についての考察について見ていきたい。

福田は、状態相のテンスをムード的なものとそうでないものとに分けて議論しているが、ここでは、後者の、ムード的と分類されていない方のものについて見る。このようなものとして、次のようなものが挙げられている(福田2002:27)。

(283) a. 別れた彼って背が高かったのよね。(八亀2001)

b. きのう私に道を尋ねて来た人は、外国人でした。

ここで、(283)のaとbでは共にタ形が使用されている。例えば、aは「高い」がタ形で言われており、bでは「外国人だ」がタ形で言われている。しかし、これらは、「別れた彼」や「昨日道を尋ねて来た人」が現在背が低くなっていたり、国籍が変わって日本人になっていたたりするということを意味するものではない。

では、このようにムード的ではないものの場合、テンスはどのように決定されているのだろうか。福田によると、状態相のテンスは、以下のように福田が「情報時」と呼ぶものが発話時以前か否かによって決まる(福田2002:26)。

(284) 静的述語のテンス性の定められ方：

a. 「情報時」が発話時以前→タ形

b. 「情報時」が発話時と同時→非タ形

c. 「情報時」が発話時以後→非タ形

ここで重要なのが、「情報時」という概念だが、情報時は、次のように「即時情報」という概念を使って定義される。(福田2002:26)

(285) a. 情報時：述語が表す事態についての即時情報が取得される可能性のある時

b. 即時情報：事態の時におけるその事態についての情報

この定義内からは「即時情報」の説明内の「事態の時」や「事態についての情報」が何を表すのかははっきりしないが、これは、次のような例を挙げて説明されている。

例えば、以下の(286)の例では、問題となっている情報は「(彼が)家にいる」というものである。ここで重要なのは、「即時情報」とは単に「(彼が)家にいる」という情報のことではなく、当該の時(ここでは、「私が訪ねた時」)に得られた情報(「(彼が)家にいる」)だという点である。

(286) 彼はきのう、私が訪ねた時、家にいました。

従って、次の(287)のような場合には、「(彼が)家にいる」という情報は「即時情報」には当たらない。この場合には、「(彼が)家にいる」という情報を、得たのが「きのう」ではなく、発話時現在だからだと考えられる(ここでは、そもそも「いましたよ」が不自然になるが、この点についての議論はここでは省く。詳しくは福田(2001)参照。)

(287) A：彼はきのうどこにいましたか？

B：おとといの打ち合わせで、きのうは家にいることになっていましたから、家に{??いましたよ/いたでしょう}。

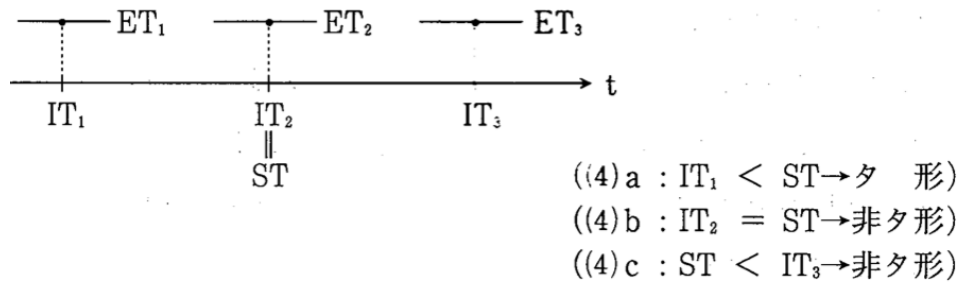
(福田(2002:27)より引用。下線は筆者による。)

福田によると、上の例で「タ」が使用できないのは、「別れた彼の背の高さ」や「きのう道を尋ねて来た人の国籍」という情報は、発話時現在では即時情報として取得することができないため、と説明できる。この場合、「発話時において状態主が消息不明、あるいは話者が事態についての情報を取得する意思をもっていない」(福田2009:29)ために、

「タ」が使用されると説明される。

このようにして、「情報時(IT)」と「発話時(ST)」との関係で状態相のテンスが定められる。これは、次の(288)のように図示できる(福田2002:29)。

(288)



(福田(2002:29)より転載)

このように、「情報時」という概念を用いれば、冒頭で見たような問題に対する説明が可能である。

4.3.1.3. ムード的な「タ」とムード的でない「タ」についての疑問

上で見てきた金水(2001)、井上(2001)、定延(2004)、福田(2009)等の考察から、ムード的な「タ」が使用されるメカニズムという観点から見ると、ムード的な「タ」の適用範囲が意外と広いということ(井上2001、定延2004)、また、ムード的ではない「タ」について「情報時」という概念が有効なこと(福田2009)がわかった。

このような観点から、以下の(289)のような例について考えてみたい。ここでは、花子の質問に対し、太郎はaのように現在形「かわいい」で答えることも、bやcのように過去形「かわいかった」で答えることもできる。

(289) (花子が次郎の今の彼女について、太郎に聞く。)

花子：次郎の彼女ってかわいい？

a. 太郎：うん、かわいいよ。

b. 太郎：うん、先週会ったけど、かわいかったよ。

c. 太郎：ええと、どうだったかなあ。あ、そうだそうだ、かわいかった。

(289)のうち、aで現在形「かわいい」が使われることは「発話時に即時情報が取得可能である(情報時と発話時が同時である)」という観点から説明される。一方、bで過去形「かわいかった」が使われることは「観察行為があった/探索があった」という観点から説明される。また、cで過去形「かわいかった」が使われることは「以前の体験の思い出し」という観点から説明される。

このように見ることで生じる疑問として、「情報時」や「観察」や「探索」、「思い出し」という概念が互いにどのように関係しているのか、という点だろう。これらについ

て、個別の規則が存在しているというよりは、何らかの共通した原則が存在していると考えすることはできないだろうか。

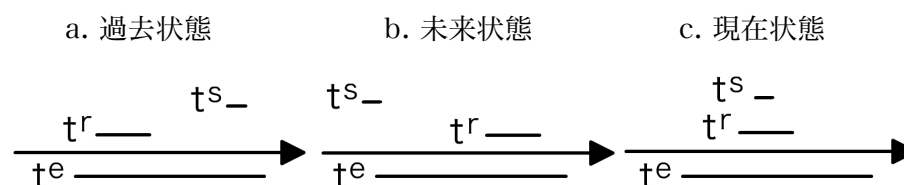
以下では、このような点について見ていくことで、ここまで見てきたムード的な「タ」やそうでない「タ」に当てはまる一般原則の存在を明らかにすることを試みる。

4.3.2. 設定時との関係から見たムード的及び非ムード的「タ」

以下では、この問題を本稿の時間関係図における「設定時」との関係において、上で見た問題に取り組んでいく。

2.4.2.2で見たように、本稿では、(290)のように状態相のテンスは設定時(t^r)と発話時(t^s)との関係から説明されるという立場をとっている。ここまで見てきたことを、設定時という観点から捉えなおすと、どのようになるかという点について考えてみたい。

(290) 状態相のテンス²：



まず、福田(2002)の「情報時」によるテンスの説明は、「情報時」を「設定時」と置き換えれば、本稿の説明とも相反しない。ただ、上で見た福田の図は本稿の時間関係図とは次の二つの点で異なっている。ひとつは、①「情報時」が時間幅のないものとして記述されているという点、②もうひとつは、これとも関わっているが、②情報時と発話時が「同時」の場合に現在時制となるという点である。本稿では、これを「同時」ではなく、設定時が発話時を「含む」場合と考えている。

この二点がなぜこのようになっているのかについて、福田(2002)では説明されていないが、これについては、本稿の設定時のように(i)「情報時」を幅のあるものとして捉え、(ii)情報時が発話時を含む場合に現在時制になる、と考えた方が福田(2002)の主張する「情報時」の概念にとっても都合のいいものではないかと思われる。既に見たように情報時とは、「即時情報が取得される可能性のある時」と定義されているが、これが一瞬の時間を表しているとは考えにくい。例えば、上の例で言えば、恋人と別れる前はずっと情報時であると考えられる。従って、情報時は幅のあるものだと考えた方がよさそうである。また、このように考えると、現在時制になるのが情報時と発話時が同時の場合、というのも考えにくい。この場合には、やはり、情報時が発話時を含む場合に現在時制になると考えた方がいいと思われる。

² ここでは、 t^e が時間軸の全てを覆うという形の記述になっているが、必ずしもこのようである必要はない。 t^e が t^r を含んでいさえすればよい。ここではムードの「タ」の例として恒常的な状態の例が挙げられることが多いので、このような記述としている。

このように考えると、福田(2002)の分析を本稿の時間関係概念に当てはめると、情報時が設定時として設定される、と言い換えられると考えてよさそうである。

(291) $t =$ 情報時

では、上で見た「発見後」の「タ」についてはどうだろうか。「発見後」の「タ」については、「タ」が使用される場合を中心に見てきたが、これは、状態が「発見」された時点が過去であるために「過去」となるという説明は難しい。

次の(292)では、もし、何の前提もなしにこのように言ったとしたら、相手(花子)は太郎が既に食事を終えていると感じるだろう。もし太郎がまだ食事中であれば、過去形では言いにくい。逆に言うと、もし太郎が食事を終えているのであれば、過去形で言うのは自然である。

(292) (太郎は初めて行ったレストランで食事をしている。食事しながら携帯電話で花子と話す。太郎はまだ食事中である。)

花子：そうか、あのレストランで食事してるのね。

??太郎：うん、料理おいしかったよ。

このように見ると、ここでは太郎が食事を始めてから終えるまでの間が設定時として存在しているということになる。4.2.2.2で見たように、定延(2004)はこのような発見後の「タ」を「マクロ探索」の時点に情報のアクセスポイントが設定されるものとしている。ここでは、食事を始めてから終えるまでの間が「マクロ探索」が行われている間だと考えられる。従って、定延のマクロ探索が行われている間に設定時が設定されると言い換えられるだろう。

(293) $t =$ マクロ探索時

また、「思い出し」については、話者がこの情報を覚えていた期間内であれば、当然、非過去形が使われると考えられる。従って、この場合は、「覚えている間」というのが設定時として存在すると考えられる。

(294) $t =$ 覚えている期間

では、「情報時」という概念や「マクロ探索」という概念、また「覚えている」ということはそれぞれどのように関係しているのだろうか。以下では、この問題について見ていきたい。

4.3.3. 「体験」と「知識」

既に見たように、状態相の場合は、(295)(296)のように、同一の状況で現在形で答えても過去形で答えてもいい場合が存在する。

b. 次郎の彼女の料理はおいしかった。

112

したりするのはおかしい。もし、このように言うことができる者がいたとしたら、それは、一緒に宇宙に行ってきた同僚の宇宙飛行士だろう。つまり、話者と共に、地球を見るという体験をした宇宙飛行士だけが、このように言うことができる。

(299) a. 研究者A：地球は、現在は青いが、太古の昔は赤かった。

研究者B：それは違う。地球は昔から青かった。

b. 宇宙飛行士：帰還する時、宇宙から見たら、なぜか地球は赤かった。

??研究者：それは違う。地球は青かった。

(定延(2004:5-6)を会話文に改編)

以上のように、文によって伝えられる情報は、情報の共有度の違いから区別することができる。

このように、定延では体験と知識とが情報の共有度という観点から対置させられているが、定延によるこの例を上例に当てはめると、上の(295)の例についても(295b)は体験を表していると言えるだろう((295a)については純粹の知識とは異なるが、これについては後述する)。

上で見たように、定延では、知識と体験を共有度の違いで表現しているが、上の(295a)と(295b)についても、共有度の違いが存在する。(295a)の場合、太郎と花子が一緒に次郎の彼女を見たり、一緒にレストランで食事したりしていなくても、以下の(300)や(301)のように言うことができる。

(300) 太郎：次郎の彼女、かわいいよね。

花子：そうだね。かわいいね。

(301) 太郎：あのレストランの料理おいしいよね。

花子：そうだね。おいしいよね。

一方、(295b)の場合は、二人がこれらの体験を一緒にしていなければ、(302)や(303)のように言うことはできない。たとえ二人が共にそのような体験を有していたとしても、2人がそれぞれ個別にこの体験を行っていた場合は、このように言うのは不自然だろう。つまり、2人が一緒に当該の体験をしたという場合(仮に「共同体験」と呼ぶ)以外は、不自然になる。

(302) (太郎も花子も次郎の彼女を見たことがある。しかし、2人で一緒に次郎の彼女を見たことはない。)

??太郎：次郎の彼女、かわいかったよね。

??花子：そうだね。かわいかったね。

(303) (太郎もそのレストランに行ったことがある。しかし、2人で一緒に行ったことはない。)

??太郎：あのレストランの料理おいしかったよね。

??花子：そうだね。おいしかったね。

このように、(295a)は共同体験の有無とは無関係に共感表現が使用できるのに対し、(295b)は共同体験がない場合には共感表現が使用できないことがわかる。

なお、上の例で時制が過去時制となっているが、以下の例((304)～(305))で、時制が共有度の違いを引き起こしているわけではないことを確認したい。(304)～(305)では、「昔の次郎の彼女/昔のレストランの料理」についての「知識」の共有を行っている。このような場合は、体験ではなく知識の共有であるため、共同体験がなくても共感表現が使用できる。このことから、共感表現の許容度の違いの原因となっているのは、時制の違いではなく、体験と知識の違いであることが分かる。

(304) (太郎も花子も次郎の彼女を見たことがある。しかし、2人で一緒に次郎の彼女を見たことはない。)

太郎：次郎の彼女って、昔かわいかったよね。

花子：そうだね。かわいかったね。

(305) (太郎もそのレストランに行ったことがある。しかし、2人で一緒に行ったことはない。)

太郎：あのレストランの料理って昔おいしかったよね。

花子：そうだね。おいしかったね。

このように、先に見た(295b)は定延の(298b)に相当すると考えられ、「体験に基づく知識」に相当するものだと言えそうだが、本稿では、次に述べる理由から、上の(295b)のようなものは単に「体験」と呼び、(295a)のようなものを「体験に基づく知識」と呼びたいと思う。

4.3.3.2. 把握の直接性

上で見たように、上の(295b)は、定延の(298b)に相当すると考えられるが、(295a)については、定延の(298a)に相当するとは言にくい。それは、次のような(306)を見ればわかる。太郎が実際に次郎の彼女に会ったことがなければ、「と思う」などを付加しないで「かわいい」と言い切るのは不自然になる。

(306) (太郎は次郎の彼女には会ったことがないが、次郎の彼女がとてもかわいいという噂はよく聞いている)

花子：太郎、次郎の彼女知ってる？どんな子？

a. ??太郎：次郎の彼女？ すごくかわいいよ。

b. 太郎：次郎の彼女？ すごくかわいいと思う(みたい/ようだ/らしい)よ。

このように、「純粋な知識」は「と思う」や「と言っていた」のような推量表現や伝聞表現を用いずに、確言の文で言うのは難しい。このような「純粋な知識」を確言の文で言うことができるのは、(154)(=(307)に再掲)で見たように、「歴史的叙述」(福田2002)や「語り」(金水1989)の場合だけだろう。

(307) a. およそ1億年前、この辺りは海だった。ウミガメの祖先やアンモナイトが棲んでいた。

b. A: 1億年ぐらい前は、この辺は海だったんだって。

B: へえ。じゃ、首長竜とかいたのかな。

??A: さあね。ウミガメの祖先やアンモナイトは棲んでいたけどね。

(→棲んでいたみたいだけど)

実際、上で見た(298a)(299a)のような例も、(307a)のような「歴史的叙述」に近いものだと考えられる。実際の日常会話では、このような対話は上の(307b)のように、不自然になる(ただし、この不自然さは、情報の共有可能性によるものではないため、上の(299a)の文の判定の妥当性を損なうものではない。この不自然さは「と思う」を補えば解消されるが、上の(299b)の文の場合には、このような表現を補っても、不自然さは解消されない)。

ここで注意したいのは、確言の文で言えるか否かの違いは、必ずしも話者の確信度の違いによるものというわけではないという点である。たとえ上の例で話者が情報源のことを100パーセント信じていたとしても、やはり確言の形で言うのは自然ではない。前章でも見たが、確言の形で言えるか否かは出来事の把握の直接性に関わっていると考えべきだろう。

4.3.3.3. 「情報の共有度」と「把握の直接性」による「知識/体験」の分類

以上のことから、「知識」には、定延(2004)が挙げているような「純粋な知識」もあれば、上で見た(295a)のような、「体験に基づく知識」もあることが分かる。「純粋な知識」の場合は、通常の会話の場合、推量や伝聞表現を伴わないと不自然になるが、「体験に基づく知識」の場合はそうではない。

(308) a. (純粋な)知識:

(見たことはないが、伝え聞いた場合)「次郎の彼女はかわいい(らしい)。」

b. 体験に基づく知識:

(見たことがある)「次郎の彼女はかわいい。」

c. 体験

(昨日見たが)「次郎の彼女はかわいかった。」

なお、ここでは上の例に合わせてcの「体験」だけが過去形になっているが、実際には、(308)のa～cのどれも現在形でも過去形でもあり得る。例えば、(308a)について言えば、「次郎の彼女は昔かわいかったと思う」と過去形で言えるし、(308b)についても、「次郎の彼女は昔かわいかった」(昔から知り合いの場合)と過去形で言える。また、(308c)について言えば、ここでは過去形になっているが、(次郎の彼女を目の前にして)「わ、かわいい」と現在形で言うこともできる。

ここでは、二種類の基準からの判定を行った。ひとつは、情報の共有度という基準で、

共感表現の許容度によって判定された。「体験」を述べている場合、共同体験が存在しない限りはこの判定の結果は不適切になる。つまり、情報は共有されていない。一方、「体験を伴う知識」は共同体験の有無とは無関係に判定結果は適切なものとなった。ここでは、「純粋の知識」の判定結果については見なかったが、以下の(309)に見るように、これについても、「体験に基づく知識」同様に、共同体験の有無とは関係無しに許容される(この場合は「たぶん」のような推量のモダリティが必要になるが、上で見た通り、これは情報の共有の許容度とは無関係である)。

(309) 太郎：昔って、水も木もなかったはずだから、たぶん地球って赤かったよね。
花子：そうだね。

このように見ると、「体験」が情報の共有が不可なもので、「体験に基づく知識」と「純粋な知識」は情報の共有が可能なものだということがわかる。

もうひとつの基準は、情報の把握の直接性である。これは、確言の文としての述べた場合の自然さによって判定された。これについては、「体験」と「体験に基づく知識」の場合にはこの判定の結果が適切となり、「純粋な知識」の場合には不適切となることが分かった。

このことから、上のa～cは以下のような交差分類が可能だと考えられる。³

(310)

| | 共有○ | 共有× |
|-------|----------|-------|
| 直接把握○ | b. 体験+知識 | c. 体験 |
| 直接把握× | a. 知識 | なし |

(310a)は体験を伴わない単なる知識である。例えば、人から伝え聞いたり本で読んだりして取得した情報がこれに当たる。この場合は、直接出来事を把握したわけではないため、確言の文として述べるのは不自然であるが、知識であるため、他者と共有することはできる。(310b)は実際に出来事を直接把握することによって得た情報である。この場合、直接把握が存在するために、確言の文で述べることもできるし、知識であるために共有も可能である。(310c)は出来事を直接把握した際の体験そのものについての情報である。この場合は、直接把握した出来事であるため、確言の文で述べることはできるが、共同体験者以外の他者とこれを共有することはできない。

³ ここで見ている「知識」と「体験」の関係は、Individual-levelとStage-levelの違い(Carlson1979)や、属性叙述と事象叙述の違い(益岡1987, 益岡2006)等の事象タイプの違い(槇野2006, 岩男2006)にも関係がありそうに見える。実際、高橋(1986)ではそのような観点から状態相のテンスを分類している(「アクチュアルな特性」と「コンスタンとな特性」として分類)。しかし、ここでは「かわいい」のようなIndividual-levelないしは属性叙述述語についても、場合によって「知識」と「体験」の区別があるため、これらの概念で分類するのは難しいように思われる。

4.3.4. 「体験」のテンスについて

4.3.4.1. 「体験」と情報の新規性について

ここまでの議論から、(295)のaとbは、文で述べられる情報が「体験+知識」(a)であるか、それとも「体験」(b)そのものであるかの違いがあることが分かる。上で見たように、(295)のaは「情報時」に基づいてテンスが定められるもので、bは「発見後」の「タ」であった。従って、上で「発見後」の「タ」と呼んできたものは、「体験」を表しているとも言えることがわかる。

このように体験時が過去であることを表す「タ」であるが、当該の情報を取得した場合に、常に過去形で言えるというわけではない。

既に見たように、井上(2001)は「見たら...だった」という基準を用い、これが言えるかどうかで、「観察行為→状態の判明」というプロセスがあったかどうかを判定している。では、「観察行為→状態の判明」というプロセスがない、ということはどういうことだろうか。つまり、このようなプロセスの有無は、そもそも何を表すものなのだろうか。

これは、「話者が当該の知識を予め持っていなかったかどうか」と言えるのではないだろうか。例えば、次の例のような場合、過去形「かわいかった」は言いにくい。下の(311)は、太郎が既に何度も次郎の彼女に会っているという場合で、次郎の彼女が「かわいい」という情報は太郎にとっては新しくない。この場合、過去形は使いにくい。

(311) (太郎は何度も次郎の彼女に会ったことがある。昨日も、次郎の彼女に会って一緒に食事をした。)

花子：次郎の彼女ってかわいいのかな？

太郎：次郎の彼女？(次郎の彼女){かわいい/??かわいかった}よ。

また、次の(312)も、話者が予め当該の知識を持っていなかったという場面であるが、やはり、過去形「いた」は言いにくい。ここでは、太郎が次郎が研究室にいることを予め知っていた上で、次郎に会いに行っている。もし、太郎が「次郎が研究室にいる」ということを知らずに研究室へ行き、たまたま次郎がいたような場合であれば、過去形「いた」は自然になるだろう。

(312) (太郎は次郎と研究室で研究の相談をする約束をした。相談が終わって、研究室を出たところで、花子に会った。)

花子：次郎どこかなあ？

太郎：次郎？次郎なら研究室に{いる/??いた}よ。

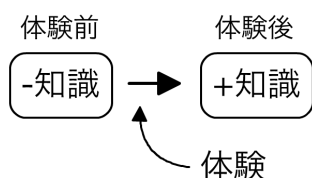
このように見ると、「観察行為→状態の判明」というプロセスがあるということは、当該の体験をする前と後とで、話者の知識が更新されているということだと言えるだろう。従って、話者の知識の変化を伴うような体験があったのであれば、過去形で自然に言えることがわかる。

これを図にすると、次の(313)のように示せるだろう。(313)のaは体験により知識の更新があったことを示しており、bの場合は知識の更新がなかったことを示している。この

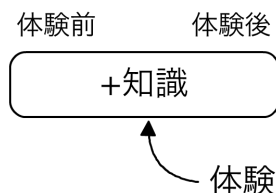
うち、aの場合にのみ、体験を述べるのが自然になる。bの場合には知識を述べるのは自然だが、体験を述べるのは自然ではない。

(313)

a. 更新あり



b. 更新なし



以上見てきたことから、知識の更新があった場合に当該の状態を体験として述べられるという点を見たが、これに対し、次のような反論があるかもしれない。例えば、次の(314)のような例の場合、もう既に次郎の彼女がかわいいことを知っていたはずなので、知識の更新はなかったはずである。しかし、過去形「かわいかった」が自然に使用できる。これはなぜだろうか。

(314) 昨日また次郎の彼女に会った。次郎の彼女は昨日もかわいかった。

ここで重要なのは、何が新しい情報なのか、という点である。ここでは、確かに「かわいい」は新しい情報ではないが、「昨日もかわいい」は新しい情報である。従って、この場合には知識の更新があったことになり、体験を述べるのも自然ということになる。

また、次の(315b)のような例も、一見上で見た原則に反するものであるように見えるかもしれない。以下の(315)の場合、aは、普通に考えると、不自然である。この場合、「また」とあることからわかるように、話者がそのレストランの料理の味を知らなかったということが考えにくいからである。ただ、そのような状況(例えば、以前に行った時は飲み物しか注文しなかった、など)を想定すれば、aも自然になり得る。

一方、(315)のbの場合は、初めての体験でないにもかかわらず、特別な状況を想定せずとも自然な文として解釈できる。これはなぜだろうか。

(315) a. ??昨日また駅前のレストランに行った。あのレストランの料理はおいしかった。

b. 昨日また駅前のレストランに行った。きのうはピザを食べた。おいしかった。

これは、「ピザがおいしい」というのが新しい情報だと考えれば、説明がつく。つまり、ここで言われているのは、「このレストランの料理がおいしい」ではなく、「ピザがおいしい」ということで、これが新情報だという解釈が自然であるため、この文は自然になる。

このように、知識の更新がなければ、知識として述べるのが自然であり、知識の更新があった場合は、その更新の原因となった体験について述べるのも自然になることがわかる。

4.3.4.2. 「体験」と設定時(t^r)

ここまで、体験を過去形で表す場合について見てきたが、体験を現在形で表すのは、どのような場合だろうか。

ここまで、「次郎の彼女はかわいかった」は次郎の彼女がかわいいという体験をした時が過去であるという点について見てきたが、この「体験」とは具体的どの時点を表すのだろうか。

下の(316)のような場合、何の前提もない限りは過去形「かわいかった」は不自然である。もし仮に太郎が事前に花子と「次郎の彼女がかわいいかどうか」ということについて話をしていたような場合には過去形でも言えるが、そうでないかぎり、不自然になる。

(316) (太郎は今次郎の彼女と食事をしているが、携帯電話でこっそり花子と話している)

花子：太郎、次郎の彼女ってかわいいの？

太郎：うん。{かわいい/??かわいかった}よ。

これは、次の(317)のような場合も、同様である。

(317) (太郎は今研究室にいる。太郎は花子と携帯電話で話す。)

花子：太郎、次郎研究室にいる？

太郎：うん。{いる/??いた}よ。

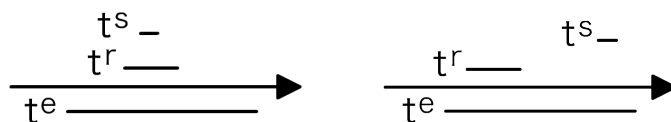
このように見ると、「体験」と言っても、それは、当該の情報を得た瞬間の体験のことを表しているわけではないことが分かる。

ここで自然に過去形「かわいかった/いた」が使用できるのは、太郎が食事を終えて次郎の彼女と別れた後であったり、太郎が研究室から出てきた後だろう。つまり、「次郎の彼女と会ってから別れるまで」や「研究室に入ってから出るまで」という期間が存在し、発話時がその期間内であれば非タ形が使用され、その期間が発話時に先行していれば、過去形が使用されることが分かる。これは、設定時と発話時、出来事時の時間関係で示すと、次のように示すことができる。

(318)

a. かわいい/いる

b. かわいかった/いた



(319) t^e =(彼女が)かわいい/(次郎が)いる

t^r =食事している間/研究室にいる間

t^s =発話時

このように、「体験」を表す場合、当該の情報を得た瞬間が設定時になるというわけではなく、その情報を得ることができる期間(食事をしている間/研究室にいる間)が設定時に

なっていることが分かる。このように見ると、上で見た福田(2002)の「情報時」という概念との関係が見いだせそうに見える。以下では、このような観点から、情報が「体験」を表す場合のテンスと福田(2002)の情報時との関係について見ていく。

4.3.5. 「知識」のテンスについて

既に見たように、(320)のように、同一の状況で、「体験」を過去のものとして、「体験に基づく知識」を現在のものとして述べることができるという場合はあり得る。

(320) (花子が次郎の今の彼女について、太郎に聞く。)

花子：次郎の彼女ってかわいい？

a. 太郎：うん、かわいいよ。(体験に基づく知識)

b. 太郎：うん、かわいかったよ。(体験)

これは、「体験」は当該の体験の場面が過ぎ去れば過去のもものとなってしまう一方で、「知識」は、一旦得てしまえば保有し続けることができるものであるため、現在形で言うことができるのだと考えられる。

しかし、既に見たように、次の(321)のような場合であれば、「体験に基づく知識」も過去形「かわいかった」で言うのが自然で、現在形「かわいい」で言うのは不自然になる。

(321) (次郎は彼女と別れた。太郎はそれ以降その彼女は見していない。)

太郎：次郎の前の彼女は{??かわいい/かわいかった}。

上で見たように、福田(2002)では、このことが「情報時」という概念で説明されている。即ち、この時点では、太郎は「次郎の彼女がかわいい」という即時情報を取得できないため、過去形「かわいかった」が自然になる、と説明できる。これは、太郎が今後次郎の彼女に会うことがないと思っているためだと説明ができる。

しかし、実際には、以下の(323)に見るように、情報の取得が可能でも、「体験に基づく知識」が現在形で言えない場合がある。

以下の(322)と(323)とでは、現在形の許容度が異なる。(322)では、過去形・現在形共に自然に使えるが、(323)では、現在形「ちょうどいい」が不自然になる。これらの場面は、太郎が既に風呂から出ているという点では、同じ状況である。違うのは、太郎の後に風呂に入る人がいるかどうかの違いである。

(322) (太郎と花子は夫婦である。太郎は風呂から出たが、次に花子が入る予定。)

花子：太郎、湯加減どうだった？

太郎：ちょうど{いい/よかった}よ。

(323) (太郎と花子は夫婦である。太郎は風呂から出た。家族はもうみんな風呂に入ったので、太郎の後には誰も風呂に入らない。)

花子：太郎、湯加減どうだった？

太郎：ちょうど{??いい/よかった}よ。

以下の(324)(325)も、これと同様のものである。(324)では過去形・現在形共に自然に使えるが、(325)では、現在形が不自然になる。(324)と(325)の違いは、花子も同じコートを買おうと思っているか否かの違いである。

(324) 花子：太郎、いいコートだね。私も同じの買おうかな。それ{高い/高かった}？

太郎：うん、まあまあね。

(325) 花子：太郎、いいコートだね。それ{??高い/高かった}？

太郎：うん、まあまあね。

ここでは、(322)と(323)、及び(324)と(325)は即時情報の取得可能性という点では同じである。即ち、これらはどちらも共に話者は即時情報(湯加減/コートの値段)を取得できる状況にある。そうでなければ、(322)や(324)で現在形が自然であることが説明できない。しかし、そうすると、今度は(323)や(325)で現在形「ちょうどいい/高い」が不自然になることを説明するのが難しくなってしまう。

このように、「即時情報の取得可能性」という見方では、これらの例は説明できない。ただ、福田(2002)は「発話時において状態主が消息不明、あるいは話者が事態についての情報を取得する意思をもっていない」(福田2009:29)場合に現在形が使いにくいという説明もされており、単に情報の取得可能性だけでテンスが決まっているわけではなさそうである。ここで言う、「情報を取得する意思をもっていない」ということがどういうことであるかについて、福田は触れていないが、ここでは、この点についてもう少し考察してみたい。

4.3.6. 「情報の有意性の原則」による一般化

4.3.6.1. 情報の有意性について

(322)～(325)の例から分かるのは、これらの場合には当該の情報(風呂の湯加減/コートの値段)が、他の目的(風呂に入る/コートを買う)と結びついており、それらの出来事が達成済みである場合には、当該の情報が役割を果たして用済みになっているということである。

(326) a. 情報：湯加減

b. 目的：風呂に入る

(327) a. 情報：コートの値段

b. 目的：コートを買う

「風呂のお湯」((322)(323))の場合で言えば、(322)と(323)の違いは風呂の湯加減を「取得する意思」の有無の違いとは必ずしも言いにくい。なぜなら、このように考えると

(322)の例では話者(太郎)が湯加減を取得する意思がある場合には現在形「ちょうどいい」が使われることが予測されるが、実際には、(322)で現在形「ちょうどいい」が使用される場合でも、話し手が風呂に戻って湯加減を確認する(湯の温度に関する情報を取得する)意思をもっているとは考えにくいからである。しかし、(322)の場合に湯の温度に関する情報が意味のあるものであるのに対し、(323)の場合には、この情報は無意味なものになっているとは言えるだろう。なぜなら、もう誰も風呂に入らないので、この情報が活用されることはないからである。

「コートの値段」((324)(325))の例についても同様のことが言える。これについても、(324)で現在形「高い」が使われる理由を、話者が「コートの値段」という情報を「取得する意思」をもっているため、と説明するのは難しいが、「コートの値段」が(324)の場合には意味のある情報である一方で、(325)の場合には意味のない情報になっているとは言えるだろう。

この証拠に、以下の(328)(329)のように、情報がまだ有意である状況では、過去形「ちょうどよかった/高かった」は使いにくい(もし、この会話がなされる前に、2人が「湯加減はどうだろうか/値段は高いかどうか」ということを話し合ったりすれば、過去形も自然に言えるが、そのような前提がないかぎり、過去形は不自然になる)。(328)の場合、まだ風呂に入っているところであるため、「湯加減がちょうどいい」という情報は有意であり、(329)の例の場合、まだ購入が済んでいないので、「コートの値段が高い」という情報は有意である。

(328) (太郎が風呂で湯につかっている。風呂場の外から、花子が話しかける。)

花子：湯加減、どう？

太郎：ちょうど{いい/??よかった}よ。

(329) (太郎と花子は服屋にいる。太郎がコートを試着している。)

花子：いいコートね。{高い/??高かった}？

太郎：うん、まあまあね。

このように考えると、福田(2002)で言われている「話者が情報を取得する意思をもっている」を「情報が意味をもつ」というものに置き換えると、うまく説明できそうである。つまり、例えば上の湯加減の場合で言うと、(322)の場合は、「湯加減」という情報を有意意味だと捉えることができるので、現在形「ちょうどいい」を使用することができる。一方、(323)の場合は「後には誰も風呂に入らない」という文脈によって、この知識が有意意味だという解釈がブロックされているため、現在形が使用できない、ということである(なお、「体験」の解釈はこれとは無関係に可能であるため、タ形は(322)、(323)どちらでも許容される)。この説明は、上のコートの例にも当てはまるだろう。

このことから、次のようなことが言えるのではないだろうか。

(330) 当該の知識が有意意味だと捉えられれば、非タ形が使用され、そうでない場合はタ形が使用される。

4.3.6.2. 「情報の有意性」による状態相のテンスの一般化

上記の原則は、ここで見ている例だけでなく、ここまで見てきた他の例についても当てはまる。例えば、次の(331)のような例の場合、太郎はもう次郎の前の彼女とは会わないので、この彼女が「かわいい」という知識は、意味を持たない情報である。極端なことを言えば、この時点で次郎の前の彼女の顔が変わっていたとしても、太郎はそれを知る立場にないため、そのことの影響を受けるわけでもない。一方、もし、太郎がまだ次郎の前の彼女に会うのであれば、この知識は意味をもつ情報だろう。従って、(331)に見るように、この場合には過去形「かわいかった」は使いにくい。

(331) (次郎は彼女と別れた。太郎はそれ以降その彼女は見していない。)

太郎：次郎の前の彼女は{かわいい/?かわいかった}。

このように、「即時情報が取得できない」という理由で過去形が使いにくい場合についても、情報の有意性という観点から説明ができる。

また、「体験」についても同様のことが言える。(316)の場合、「かわいい」は太郎の体験を表している。この場合、太郎が次郎の彼女との食事を終えて別れた後であれば、過去形「かわいかった」で言えることを見た。この場合も同様に、次郎の彼女が「かわいい」という情報は、太郎が次郎の彼女との食事を終えて別れてしまえば(太郎はもう次郎の彼女の顔は見ないので)、意味のないものとなる。

ここで生じる疑問として、ここで太郎がまた次郎の彼女と会う可能性がある場合であっても、体験の場合には過去形「かわいかった」で言えるのはなぜか、というのがあるだろう。確かに、そのような場合、「次郎の彼女がかわいい」は太郎にとって有意味な情報ではあるが、これは、太郎の「知識」として有意味なのであって、この日の太郎の「体験」には影響を及ぼさない。従って、太郎がまた次郎の彼女に会うと考えていれば、非タ形で言うこともできる。

このように、「知識」と「体験」とで分けることで、過去形しか言えない場合、現在形しか言えない場合、どちらも言える場合について、次のような説明ができそうである。即ち、(i)体験の有意性は既に失われているが、知識の有意性は持続している場合、「過去の体験」として述べることもできるし「現在の知識」として述べることもできるため、タ形・非タ形ともに自然になる((322))。また、(ii)体験としても既に有意性が失われており、知識としても既に有意性が失われている場合には、「過去の体験」として、ないしは「過去の知識」として述べることになるため、「現在」の解釈は不可能で、過去形だけが自然になる(323)。そして、(iii)体験としても知識としても有意性が残っている場合は、「現在の体験」として、ないしは「現在の知識」として述べることになるため、「過去」としての解釈は不可能で、現在形だけが自然になる(328)。

(332)

| | 知識の有意性○ | 知識の有意性× |
|---------|---------|---------|
| 体験の有意性○ | 現在形 | |
| 体験の有意性× | 現在形/過去形 | 過去形 |

このようなことから、次のような原則があると考え、ここまで見てきた例を説明することができるのではないだろうか。

(333) 情報の有効性の原則

情報を取得してから、情報の有効性が失われるまでの時にtを追加設定する

以下では、この原則が、通常の状態相の「タ」ではないもの、即ち、典型的なムード的な「タ」等の説明にどう役立つか見てみたい。まず、定延(2004)の「反実仮想」の「タ」の説明に含まれる、取り返しがつかない場合の「タ」について見てみる。

4.3.7. ムード的な「タ」の説明

4.3.7.1. 取り返しがつかない場合の「タ」について

4.2.4で見たように、定延(2004)では、取り返しのつかない出来事について述べる場合には過去形が使用されることが指摘されている。これは、「運命の分岐点」に情報のアクセスポイントが設定され则认为ることで説明できることを見た。以下では、「情報の有効性の原則」と「運命の分岐点」の関係について見てみたい。

以下に、4.2.4で見た例((270)(271))を再掲((334)(335))する。

(334) (2人の日本人が、香港でアバディーンという停留所に行こうとバスに乗ったものの、バス停の名前表示や車内放送が中国語でわからず、バスの中で途方にくれている。アバディーンはどの停留所だろうかと話し合ううちにバスはいくつもの停留所を過ぎていく)

a. 「アバディーンって、ひょっとして2つ前の停留所だったんじゃない？」

b. ?? 「アバディーンって、ひょっとして2つ後の停留所だったんじゃない？」

(335) (バスの中で「どこがアバディーンだろうか」と話している2人の日本語が瘡にさわったのか、なぜかバスの運転手が2人に対して怒りだし、2人は途中でバスから道ばたに降ろされてしまった。走り去るバスを見ながら言う)

a. 「こわかったね～。ところでさ、アバディーンって、ひょっとして2つ前の停留所だったんじゃない？」

b. 「こわかったね～。ところでさ、アバディーンって、ひょっとして2つ後の停留所だったんじゃない？」

(334)に見るように、この2人がまだバスの中にいるという状況の場合は、「2つ後の停留所だったんじゃない」のように過去形で言うのは不自然である一方で、(335)に見るように、2人が既にバスから降りてしまっている場合には、過去形で言っても自然である。前者で過去形が不自然なのは、知識修正の「タ」で説明ができたが、後者のようにバスを降りた後で過去形が自然になるのは、知識修正の「タ」では説明できなかった。

(336)

| | 2つ手前のバス停 | 2つ後のバス停 |
|------|----------|---------|
| 降りる前 | タ形○ | タ形× |
| 降りた後 | タ形○ | タ形○ |

(334)では、まだバスの中におり、2つ「前」の停留所については、そこで降りなかった時点で、運命の分岐点を過ぎてしまっており、取り返しがつかなくなっている。一方、2つ「後」の停留所については、まだ下りることができるため、運命の分岐点は過ぎておらず、取り返しのつく状態である。

(337) a. 2つ「前」の停留所で降りる→取り返しがつかない。

b. 2つ「後」の停留所で降りる→取り返しがつく。

(334a)については、もう取り返しのつかないので、(334a)の情報(「アバディーンは2つ前の停留所」)は、ここでは既に意味のないものになってしまっている。従って、これを過去形で言うのは自然だろう。

一方、(334b)については、まだ取り返しがつくため、(334b)の情報(「アバディーンは2つ後の停留所」)は、ここでまだ有意義なものだと言える。また、この場合、2つ「後」の停留所で降りる、という体験はまだなされていないので、体験が終了したという解釈も当然不可能である。このことから、(334b)が「タ」で言えないことは、情報の有意性の原則通りになっていると言える((338))。

(338) a. 2つ「前」の停留所で降りる→有意性のない情報

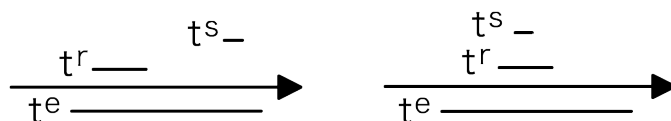
b. 2つ「後」の停留所で降りる→有意性のある情報

(334a)の場合は、この情報が有意であった期間は発話時以前なので、次の(339a)のような時間関係になる。また、(334b)の場合は、この情報が有意である期間は発話時を含むので、次の(339b)のような時間関係になる。

(339)

a. 「2つ前」で降りる

b. 「2つ後」で降りる



(340) t^e =2つ前(後)の停留所がアバディーンである

t^r =情報が有意な間(アバディーンを通過する前の間)

t^s =発話時

次に、バスを降ろされてしまった方の場合は、2つ「前」の停留所についても、2つ「後」の停留所についても、取り戻しがつかない状態である。

(341) a. 2つ「前」の停留所で降りる→取り戻しがつかない。

b. 2つ「後」の停留所で降りる→取り戻しがつかない。

ここでは、(335a)についても、(335b)についても、取り戻しがつかない状態なので、(335a)の情報も(335b)の情報も、既に意味をなさないものになっている。この場合は(335a)も(335b)も過去形で言えることが、情報の有意性の原則から予測されるが、実際に、その通りになっている。

(342) a. 2つ「前」の停留所で降りる→有意性のない情報

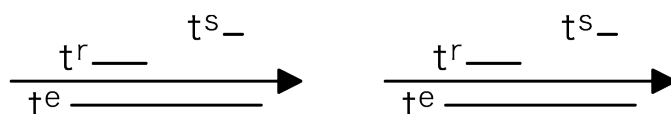
b. 2つ「後」の停留所で降りる→有意性のない情報

ここでは、aの場合もbの場合も情報の有意性は失われているので、時間関係は次のように示せる。

(343)

a. 「2つ前」で降りる

b. 「2つ後」で降りる



(344) t^e =2つ前(後)の停留所がアバディーンである

t^r = 情報が有意な間 (アバディーンを通過する前の間(a)/バスに乗っている間(b))

t^s =発話時

このように、情報の有意性の原則は、定延(2004)による「運命の分岐点」の分析とも合致する。運命の分岐点以降に「タ」が使用できないのは、情報の有意性が、その分岐点で失われるためだと考えられる。そうすると、その時点以降では、タ形が自然になると言える。

4.3.7.2. 「発見」及び「知識修正・補強」の「タ」

以下では、「発見」や「知識修正・補強」の「タ」について見る。これらの「タ」の使われ方における問題は、発話時点で話者の目の前にある状態をなぜ過去形で言うのか、というものであった。以下では、これらの例が「情報の有意性の原則」でどう説明できるのかについて見ていきたい。

4.3.6.1で見たように、情報の有意性は、特定の目的と結びついている場合があり、この場合、この目的が確定されることで、情報が役割を果たして用済みとなり、意味のないも

のとなる。例えば、「買う」という目的と結びついた「安い」という情報は、「買う」が確定した瞬間に、役割を果たして用済みとなり、それ以降は過去形「安かった」が自然となる。以下では、このように情報と目的の関係から、「発見」および「知識修正・補強」の「タ」について見ていく。

4.3.7.2.1.明確な情報取得意図のある場合

まず、(247) ((345)(346)に再掲) で見た寺村(1984)の例のように、話者が明確にまだ知らないある状態の存在を「期待」しており、期待通りの状態を発見した場合について見てみる。ここでの話者の目的は「傘を見つける」ことである。そして、話者にとって重要な情報は傘が「あるかどうか」ということである。そうすると、この場合は、「傘を見つける」が確定されることで、「傘があるかどうか」という情報は不要になったと判断されるわけである。

(345) (忘れた傘を教室に取りに戻る。傘を発見して...)

「あ、あった。」

(346) a. 情報：「傘がある」

b. 目的：傘を見つける

(寺村1984より引用。一部改編。)

このように見ると、ものを探すが目的であるような場合、当該の目的が達せられると同時に、情報が不要になるということが起きる。つまり、「傘がある」という情報は、話者が傘を見つけた瞬間に不要なものとなるのである。従って、話者が傘を見つけた瞬間、「傘があった」と言えるわけである。

このようなものは、ものを探す場合だけではない。(347)に見るように、具体的な数値を取得するような場合もある。以下の例の場合、目的は「体重の取得」であり、問題となっている情報は「体重」である。この場合、体重の取得そのものが目的であるため、体重が取得された時点で、情報は役割を果たして用済みのものとなる。従って、話者が体重を知った瞬間に「タ」が使用できることとなる。

(347) 甲：体重は何キロですか？

乙：最近はかってないんで、よくわかりません。

甲：じゃ、その体重計ではかってもらえますか。

乙：はい。(デジタル式の体重計にのり、数値を確認する)

甲：(数値を見ている乙に)

何キロでした？

乙：(数値を見ながら)

60キロでした。

(井上(2001:140)より引用)

(348) a. 情報：「(体重が)～キロだ」

b. 目的：体重が何キロか確認する

このように、情報の取得自体が目的になっている場合には、当該の情報が取得された時点で情報の有意性は失われ、過去形が使用されることになる。

なお、上の場合でも、「(傘が)ある」や「(体重は)60キロです」のように現在形でも言える。これは、話者が今日の前に傘があるという「体験」の最中であるため、自然なことである。しかし、この場合は、情報が「情報の取得」という目的と結びつけられずに述べられているため、「達成・確定」というニュアンスは薄れることになる。

4.3.7.2.2.明確な情報取得意図のない場合

上では、話し手が予め明確な情報の取得意図があった場合の例を見たが、必ずしも話し手はそのような意図を持っているとは限らない。例えば、話し手が無意識に誤った想定を持ってしまっている場合などがこれに当たる。次の(349)のような場合、話し手は「現在の話題は何か」ということを明確に知ろうとしたりはしていないと考えられるが、このような場合でも「タ」は使用される。

(349) (話している途中で、相手がそれまで別の話題について話をしていたことに気がついて)

何だ、その話でしたか(その話だったんですか)。

(井上(2001:148)より引用)

このような場合、状況は異なるが、上の場合と似たようなプロセスで「タ」が使用されていると思われる。この場合は、取得された情報は「過去の誤った想定を修正する」ために使われることになる。つまり、話し手は、相手が話していた話が何であったか気づくと同時に、間違っていた想定を修正することになる。そうすると、この修正が終了すると同時に、この情報は不要なものになると言えるだろう。つまり、ここでは、問題となっている情報と目的は次の(350)のようなものと言える。

(350) a. 情報：「(今している話が)その話である」

b. 目的：誤った想定 of 修正

また、次の(351)のようなものは、「知識修正」ではなく「発見」の「タ」とされるもののだが、「タ」が使用されるプロセス自体は同じだと考えられる。

(351) (前に探していたものが予想外の場所で偶然見つかった)

何だ、こんなところにあった。

(井上2001:144)

この場合、話者は当該の場所には捜し物が「ない」ということを、無意識に想定していたと考えられる。しかし、それを発見した瞬間に、その誤った想定は修正される。このことで、「こんなところにある」という情報は既に役割を果たして用済みとなるわけであ

る。従って、「タ」で言われるのだと考えられる。

(352) a. 情報：「(前に探していたものが)こんなところにある」

b. 目的：誤った想定 of 修正

なお、(251)((353)(354)に再掲)で見たように、定延(2004)では、場所によって、「発見」の「タ」の許容度が変わることが指摘されている。

(353) (友人と山をハイキング中にサルを見かけて)

「あ、あんなところにサルがいたよ。」

(354) (自宅の庭でサルを見かけた)

??「あ、あんなところにサルがいたよ。」

(定延(2004:20)から引用。一部改編。下線及び許容度の判断(??)は著者による。)

定延(2004)ではこれは「探索意識」の強さの違いとして説明されている。即ち、前者の「山」のようにあまり知らない場所のほうが後者の「家の庭」のような場所よりも「探索」されるという解釈が自然であり、「タ」がより自然になるということである。

しかし、次のような場合には、自宅のようによく知っている場所でも「タ」が使用できるとも述べられている。

(355) (洗面所にゴキブリを発見して)

「お～い、ゴキブリがいた。殺虫剤持ってきて～！」

(定延(2004:21)より引用。下線は筆者による。)

これについて、定延(2004)では、この例の場合には「ゴキブリ」が探索課題として設定されており、このために探索意識が活性化しているため、「タ」が自然になると説明している(定延2004:21)。

ただ、このように考えると、「山」の場合にもやはり「サル」が暗に探索対象として設定されていると考えてもいいのではないだろうか。つまり、「サルがいない」ということが暗に想定されており、その想定が修正されたのだと考えることもできるのではないだろうか。「山」であれば、「サルがいない」という想定も自然であるが、自宅の庭の場合はこのような想定は不自然だろう。このような理由で、(354)の例が不自然になっていると考えてもよさそうである。このように考えれば、(353)や(355)の例についても、対象の発見と同時に誤った想定 of 修正が行われ、情報が役割を果たして用済みのものとなることで、「タ」が使用されると説明することができる。

(356) a. 情報：「サル/ゴキブリがいる」

b. 目的：誤った想定 of 修正

このように、「情報の取得」という明確な目的をもっていなかった場合でも、情報が取得されると同時に、その情報が役割を果たして用済みになるということはある。このようなプロセスで、無意識の誤った想定を修正する場合にも過去形が使用されると考えられる。

以上で見たように、状態が目の前に存在するにもかかわらず過去形が使用されることは、これらの場合には当該の「情報の取得自体が目的である」ということによって、説明ができる。即ち、これらの場合、その情報を取得した時点でその情報が役割を果たして用済みになり、このことによって、「タ」が使用されるわけである。

このように、「発見」や「知識修正」と言われる「タ」についても、「有意性の原則」に基づいて「タ」の有無(過去形/現在形)が使い分けられているとすることができる。

4.3.7.3. 「思い出し」の「タ」

4.3.7.3.1. 名詞述語の場合

既に見たように、「思い出し」の「タ」はどんな種類の述語のタ形がこの意味を生じさせるかという点について、先行研究の間で相違があった。上で見た表を以下に再掲する。

(357)

| | ノダ | 名詞 | 予定の 「ある」 | 習慣・真理 | 存在の 「ある」 |
|-----------------------|----|----|-------------|-------|-------------|
| 寺村(1984) | ○ | ○ | ○ | | |
| 三上(1953) | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 井上(2001)・ 金水(2001) | ○ | ○ | ○ | *○ | ○ |

(※井上(2001)では「習慣・真理」のようなものについては触れられていない)

以下では、まず、名詞が述語である場合と、形容詞や存在の「ある」が述語である場合とに分けて考えてみる。以下の(358)(359)に見るように、名詞文の場合、「タ」を付加することで、「思い出し」という解釈が生まれる。これは、これまで指摘されてきている通りである。

(358) 太郎：地球って、恒星だよ。

花子：え、地球は惑星だよ。

太郎：(理科の先生が地球は恒星だと言っていたのを思い出して)

あ、そうだそうだ。惑星だった。

(359) 太郎：ねえ、韓国の首都って、プサンだよ。

花子：え、首都はソウルだよ。

太郎：(社会の先生が韓国の首都はソウルだと言っていたのを思い出して)

あ、そうだそうだ、ソウルだったね。

これは、次の(360)のように疑問文にした場合についても、有効である。この場合、話

者が忘れたことを確認するという意味合いになる。

(360) a. 花子：太郎、地球って惑星だった？

太郎：うん、惑星だよ。(??惑星だったよ)

b. 花子：太郎、韓国の首都って、ソウルだった？

太郎：うん、ソウルだよ。(ソウルだったよ)

なお、この場合、質問者側(花子)は「タ」の形で「恒星だった？/ソウルだった？」と質問しているが、回答者側(太郎)がこれと同じ「タ」の形で「恒星だったよ/プサンだったよ」と答えるのは不自然である(回答者自身も忘れていて、思い出しながら答えるような場合は自然に言えるが、単に答えるような場合には不自然になる)。

4.3.7.3.2.形容詞、存在の「ある」、動詞が述語である場合

上のように、名詞が述語である場合、そのまま「タ」を付加することで、「思い出し」の意味が生じるが、形容詞や存在を表す「ある・いる」が述語である場合、単に「タ」を付加しただけの場合に不自然になる場合がある。以下の(361)のaとbは、太郎が当該の経験がないという状況での会話だが、この場合、思い出しの「タ」を使うことはできない。これらの場合には、「ンダッタ」を使えば、自然になる。

(361) a. 太郎：ねえ、渋谷には都庁があるんだよね。

花子：え、都庁は新宿にあるよ。

太郎：(太郎は新宿には行ったことがないが、社会の先生が新宿に都庁があると言っていたのを思い出して)

??あ、そうだそうだ、新宿にあったね。(→あるんだったね)

b. 太郎：ソウルって、東京より暖かいんだよね。

花子：え、東京より寒いよ。

太郎：(太郎はソウルには行ったことがないが、社会のソウルは寒いと言っていたのを思い出して)

??あ、そうだそうだ、ソウルはあった寒かったね。→(寒いんだったね)

また、(362)のような疑問文の場合でも、以下のように聞いた場合、話者が忘れてしまったというニュアンスよりも、相手の実際の経験について聞いているような解釈になる。

(362) a. 花子：太郎、都庁って渋谷にあった？

太郎：うん、渋谷にあったよ。

b. 花子：太郎、ソウルって、東京より暖かかった？

太郎：うん、暖かかったよ。

この場合にも、もし話者が忘れてしまったというニュアンスを出したいのであれば、以下の(363)のように、「あるんだった？」や「暖かいんだった？」のように「ンダッタ」を使用する必要がある。

(363) a. 花子：太郎、都庁って渋谷にあるんだった？

太郎：うん、渋谷にあるよ。

b. 花子：太郎、ソウルって、東京より暖かいんだった？

太郎：うん、暖かいよ。

また、(362)の場合は「あった？/暖かかった？」という質問に対し、「あった/暖かかった」と同じ形で答えるのは自然である。このような意味で、この例は名詞文の場合(360)とは異なる。一方、(363)の場合は、「あるんだった？/暖かいんだった？」という質問に対し、「あるんだった/暖かいんだった」と同じ形で答えるのは不自然であり、名詞文の場合(360)と同様の振る舞いを見せることが分かる。

なお、以下の(364)に見るように、話者が実際に当該の体験をしている場合には、単に「タ」を付加した形で言うのも自然になる。

(364) a. (太郎は新宿で都庁に行ったことがある。その時のことを思い出して話す。)

あ、そうだそうだ、新宿にあったね。

b. (太郎はソウルに行って、その寒さを体験したことがある。その時のことを思い出して話す。)

あ、そうだそうだ、寒かったね。

逆に、このように直接の体験を思い出して言う場合には、「ンダッタ」の形で言うのは不自然になる(365)。

(365) a. ??(過去の体験を思い出して)あ、そうだそうだ、あるんだったね。

b. ??(過去の体験を思い出して)あ、そうだそうだ、寒いんだったね。

このように、体験を伴う思い出しと体験を伴わない思い出しとでは、「タ」と「ンダッタ」のどちらが自然になるかという点に違いがある。

ここで「体験」というものは、必ずしも「当該の場所に行く」というようなことを意味するわけではない。例えば、以下の(366)のような場合、必ずしも話者自身が宇宙に行って地球の色を確認する必要はない。写真などで確認した場合でも、話者は「地球は青い」を確認したと言えるだろう。このように、視覚的に確認することで当該の事態を体験できる場合もある。

(366) 太郎：地球って、緑色なんだよね。

花子：え、地球は青いよ。

(以前宇宙から取った地球の写真を見たときのことを思い出して)

太郎：あ、そうだそうだ、青かったね。

以上のようなことから、形容詞や状態動詞等の述語の場合には、「体験」を伴わない思い出しの場合には単に「タ」を付加する形は不自然になり、「ンダッタ」の形にしなければならないこと、また、「体験」を伴う思い出しの場合にはこの逆になることが分かる。

(367) 形容詞・存在の「ある」等の場合

| | タ | ンダッタ |
|------|---|------|
| 体験あり | ○ | × |
| 体験なし | × | ○ |

また、上の例のように「地球は青い」のような恒常的な属性についても「体験」の必要性が存在することから、これが述語の表す事態が一時的か恒常的なか(荒1989, 工藤2002)という問題とも独立した問題であることがわかる。

以下の(368)や(369)のように、習慣や真理を表す文についても同様に、名詞文やノダ文にしない限りは、実際の体験なしで「タ」を使うのは難しく、「ンダッタ」が自然になる。

次の(368)は、恒常的な真理を表す文だが、この場合も、「タ」が自然に言えるのは、話者が実際に「 $1 \div 7$ 」を計算してみた場合や、人が計算した結果を見せてもらったような場合だけで、単純に人から聞いたり場合や本を呼んで知ったような場合には、そのまま「タ」と言うのは不自然で、「ンダッタ」と言うのが自然だろう。

(368) 太郎：7分の1って、割り切れるよね。

花子：え、割り切れないよ。

(先生が7分の1は割り切れないと言っていたのを思い出して)

太郎：あ、そうだそうだ。{??割り切れなかった/割り切れないんだった}ね。

次の(369)のように総称的に習慣を表す動詞文についても、同様のことが言える。ここでも、話者が「タ」と言って自然なのは、話者がクマが野菜を食べているところを実際に見たり、写真や動画などで見たりしたような場合だろう。そうでない場合には「ンダッタ」が自然となる。

(369) 太郎：クマって、野菜食べないよね。

花子：え、食べるよ。

(先生がクマは野菜を食べると言っていたのを思い出して)

太郎：あ、そうだそうだ、{??食べた/食べるんだった}ね。

4.2.3で見たように、三上(1953)では「油絵をお描きになりましたね」のような文も思い出しの「タ」として挙げられているが、この場合もやはり、このように言っている時、話者は以前その人が絵を描いているのを見た時の体験を思い出していたり、その人が描いた絵を見たりした時の体験を思い出しているのだと考えられる。もし、油絵を描くということだけを単に口頭で聞いただけではあれば、「お描きになりましたね？」は言いにくく、「お描きになるんですかね？」と「ンダッタ」を使つて言った方が自然ではないだろうか。

以上見たように、述語が恒常的な真理や習慣を表すような場合も、実際の体験がない場合には「タ」で言うのは不自然で、「ノダ」を付加して「ンダッタ」と言う必要がある。

名詞文・ノダ文・予定の「ある」以外の状態相の述語について、上で見てきたことをまとめると、次のように言える。

まず、平叙文の場合については、体験を伴う思い出しの場合には「タ」で言うことができるが、体験を伴わない思い出しに関しては、「タ」で言うことができない。また、前者の場合は「ンダッタ」が不自然になるのに対し、後者の場合は、「ンダッタ」を使うことで、体験を伴わない思い出しを表すことができる。

次に疑問文に場合については、「タ」を使うと、相手の体験について聞いていることになるのに対し、「ンダッタ」を使うと、自身が忘れてしまったことを確認のために聞くことになる。

これを、表にまとめると、以下ようになる。

(370) 名詞文/ノダ文/予定の「ある」以外の述語の場合

| | タ | ンダッタ |
|-----|-------------|---------------------|
| 平叙文 | 体験を思い出す | 体験を伴わず思い出す |
| 疑問文 | 相手の過去の体験を聞く | 自身が忘れていたことを確認のために聞く |

4.3.7.3.3.名詞文の場合

(358)～(360)で見たように、名詞文の場合は、体験を伴った思い出しであるかどうかとは関係なしに「タ」が使える。単に人から聞いたり本で読んで知ったりした場合であっても、自然に「タ」が使える。

また、次の(371)(372)ように、(368)(369)の例を意味を変えずに名詞文で言い換えた場合でも、やはり自然に「タ」が使用できるようになる。

(371)は、(368)の「7分の1は割り切れない」の代わりに「7分の1は循環小数だ」と言うものであり、(372)は(369)の「クマは野菜を食べる」の代わりに「クマは雑食だ」と言うものである。これらの場合には、体験の有無に問題なく「タ」で思い出しの意味を表すことができる。

(371) 太郎：7分の1って、割り切れるよね。

花子：え、7分の1は循環小数だよ。

太郎：(授業で先生が7分の1は循環小数だと言っていたのを思い出して)

あ、そうさそうさ、7分の1は循環小数だったね。(??割り切れなかったね)

(372) 太郎：クマって、野菜食べないよね。

花子：え、クマは雑食動物だよ。

太郎：(授業で先生がクマは雑食動物だと言っていたのを思い出して)

あ、そうさそうさ、クマは雑食動物だったね。(??野菜食べたね)

また、以下の(373)に見るように、形容詞では体験を伴わない思い出しの「夕」が不自然になるのに対し、その形容詞によって修飾される名詞を述語にした場合には体験を伴わない思い出しの「夕」が自然に作ることができる。

(373) 子：あ、山田先生の授業の宿題するの忘れちゃった。どうしよう。

母：え、そうなの！？どうしよう？先生に怒られちゃうんじゃない？

子：まあ、大丈夫。山田先生は優しいから。

(母は山田先生には会ったことがないが、以前、子供が山田先生が優しい先生だと言っていたのを思い出した。)

母：そうかそうか。山田先生は{??優しくかった/優しい先生だった}ね。

このように見ると、述語の表す意味というよりも、品詞が名詞であるか否かが問題となっているように見える。しかし、下の(374)に見るように、名詞であっても、実際に体験や実感がないと使いにくいものがある。

(374) 太郎：新宿って、人少ないんだよね。

花子：え、そんなことないよ。すごく混んでるよ。

太郎：(以前、人から新宿の人混みの話を聞いたのを思い出して)

あ、そうだそうだ。新宿はいつも{??大混雑だった/大混雑なんだった}ね。

このように、体験を伴わない知識の思い出しの「夕」が可能かどうかは、単純に品詞かどうかという観点からも説明ができない。

まず、ここまで見てきたことから、次の二種類があると言える。上で見た「大混雑」のようなものを除く名詞文やノダ文、予定の「ある」などが(375a)に当たり、それ以外の形容詞や状態動詞等が(e75b)に当たる。

(375) a. 「体験」の有無が問題とならない述語

b. 「体験」の有無が問題となる述語

まず、「夕」で体験を伴わない思い出しの意味を表せるものについて見る。上で見た「雑食動物」や「循環小数」という名詞が述語になっている例は、「クマ」や「7分の1」といった主語と、これらの述語の関係が、「主語=カテゴリーの成員/述語=カテゴリー」というものである。また、「韓国の首都はソウルだ」や「明日は母の誕生日だ」のような場合には、主語と述語は同じものを指示している、即ち、「同一指示」の場合である。

(376) a. 主語が述語の表すカテゴリーの成員である

b. 主語の指示物と述語の指示物が同一である

ここで、上の(376a)や(376b)を「体験」とはどういうことだろうか？つまり、「XはYのカテゴリーの成員である」とか「XとYは同一のものである」ということを体験するとは、どういうことだろうか？これは、主語を述語のカテゴリーに入れたり、主語と述語を「=」で結んだりすることだろう。そうすると、人はこの「体験」を、この知識を手に入れた時点で得ることができると考えられる。例えば、XがYに「韓国の首都はソウル

だよ」と教えられたとする。そうすると、Xは「韓国の首都」と「ソウル」を「=」で結ぶことになる。つまり、この場合、上のbが「体験」されたと言える。また、XがYに「地球は惑星だ」と教えられたとする。そうすると、Xは「惑星」カテゴリーに「地球」を入れることになる。従って、この場合、上のaが「体験」されたと言える。「優しい先生」の例についても、同様のことが言える。⁴つまり、このようなタイプの述語は、人から聞いたり本で読んだりしただけで、それを体験することができる、ということである。

このように見ると、(376)のような意味を表す述語(文)は、下の(377)のような特徴を持っていると言える。

(377) 知識を得るということと、体験を得るということが同一のものとして捉えられる。

このように考えると、これらの述語で、知識の取得時点を「タ」で表せるのは、「体験」と「知識」とを同一のものと捉えられるからだと説明できる。

4.3.7.3.4.未来の予定を表す文の場合

先行研究では、下の(378)(379)のように、未来の予定を表す文の場合にも「思い出し」の「タ」が使用できることが指摘されている。(378)のaとbは名詞述語文で、(379)は予定の「ある」が述語になっているものである。これらについては、どのような説明が可能だろうか。

(378) a. そうだ、あしたは母の誕生日だった。

b. そうだ、あしたは会議だった。

(379) そうだ、あしたは会議があった。

まず、上の(378a)については、「明日」と「母の誕生日」は同じものを指示するので、「同一指示」ということで説明できるだろう。また、(378b)の「明日は会議だ」の場合は、「明日」と「会議」は同一指示ではないが、この場合は「会議」は「会議の日」ということを意味していると思われ、ここに含められるだろう。

予定の「ある」が述語である場合については、次のように説明できる。

「会議がある」は「会議が行われる予定である」ということを意味しており、「会議が行われる」ということを意味しているわけではない。これは、以下の(380b)が不自然になることを見ればわかる。

(380) a. 会議が行われる予定だ。

b. ??会議がある予定だ。

⁴ 益岡(2006)では、属性を表す述語の種類が細かく分類されているが、この分類に従うと、ここで言う「カテゴリー」を表す名詞述語は、最も「属性」的であるカテゴリー属性述語として分類される。また、「優しい」のような述語は本来は主語の所有する性質を表す「所有属性」であるが、これが「優しい人」のように名詞文に言い換えられると、カテゴリー属性述語となるとされており、ここでの分析もこれと一致する。

ここで、「会議がある」を体験するという事は、「明日会議が行われる予定だ」という事実を「知る」と同一だと考えられる。そうすると、この場合もやはり、「体験」と「知識」とを同一のものと捉えることができると考えられる。そうすると、「タ」で知識の取得時点を表すことができることも説明できるだろう。

このように見ると、上で見てきた二種類の場合-知識の取得時点を「タ」で表せる場合と表せない場合があり、これが述語の種類と関係していることを説明できる。形容詞や状態動詞、一部の名詞などが述語である状態相の文は、「知る」と「体験」することとが同一のこととして捉えられず、「タ」は体験の取得時点を表すことになる(381a)。一方、カテゴリーや同一指示を表す名詞が述語である場合や、予定の「ある」が述語である場合には、「知る」と「体験」することとが同一のものとして捉えられるため、「知識」の取得時点は即ち「体験」の取得時点と捉えられ、これを「タ」で表すことができる(381b)。

- (381) a. 「知る」と「体験」することとが同一のこととして捉えられない場合
→知識の取得時点を「タ」で表せない。
b. 「知る」と「体験」することとが同一のこととして捉えられる場合
→知識の取得時点を「タ」で表せる。

以上のように見ることで、「タ」が知識の取得時点を表せたり表せなかったりすることが説明できる。

4.3.7.3.5. 「体験」の思い出と「情報の効力の原則」

ここまで、思い出しの「タ」の表す意味について見てきたが、以下では、なぜ「思い出し」の場合に過去形である「タ」が使用されるのかについて考える。

井上(2001)では、思い出しの「タ」として、次の(382)(383)のような例が挙げられているが、井上によると、この「タ」は(383)のような「タ」と何ら変わるところがないということである。(383)は、「以前」という時間副詞で、過去であることが既に指定されている。このため、そもそも「タ」が不自然になる。

(382) 甲：今、過去形の意味・用法の対照研究をやっているんですけど、何か参考になる本か論文はありませんか？

乙：この間、『「た」の言語学』という本が出ましたが、ご存じないですか？

甲：そういえば、そういう本がありましたねえ。

(383) そういえば、以前そういう本がありましたねえ。

cf. *そういえば、以前そういう本がありますねえ。

(井上(2001:151)より引用)

このように見ると、(383)の例は「以前」という副詞句が「タ」を導入しているのであり、「思い出し」とは無関係に見えるかもしれない。しかし、この「以前」という副詞句

が生じるプロセスが重要であり、これが、この「タ」を「思い出し」の「タ」としていると考えられる。

井上(2001)は、ここで「タ」が使用されるプロセスを、次のように説明している。

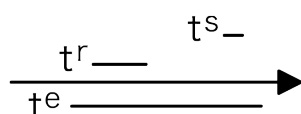
- (384) 「思い出しの「...タ」は、「その場の問題解決に有効な情報が話し手の「...という状況を以前どこかで体験したことがある。ということが暗示される。「自らの体験」という話し手にとって最も身近なところに問題解決に有効な情報が見いだされたというわけである」

(井上2001:151)

以下では、井上(2001)で述べられているこのようなプロセスを、本稿の時間関係図と合わせて考えてみる。

上で見た「情報の有効性の原則」によると、情報が有効である期間に t が設定される(t^e)。そして、この期間に発話時が含まれていれば現在形、この期間が発話時に先行していれば過去形となる。今回の場合、発話時の時点で話者は当該の情報を忘れていたので、もちろん、発話時の時点で情報は有効ではない。有効であったのは、話者がそれを覚えていた期間であり、これは発話時に先行する。

(385)



(386) t^e =(そういう本がある

t^e =話者が覚えていた期間

t^s =発話時

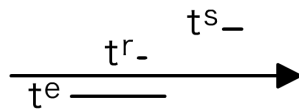
従って、発話時の時点でまだ思い出していなければ、以下の(387)のように言うことになる。このように思い出す前の段階の場合、そもそも現在形で「ソウルは寒いかなあ/循環小数かなあ」と言うのは不自然である。これは、この時点での時間関係が上のようなものだからである。これは、上で見た井上(2001)の言葉を借りれば、「問題解決に有効な情報」を探している段階での時間関係図だと言えるだろう。

(387) a. ええと、どうだったかなあ。ソウルは寒かったなあ。

b. ええと、どうだったかなあ。7分の1は循環小数だったかなあ。

もし、ここで、話者が当該の事実を思い出したとする。そうすると、話者は上の t^e の中のどこかの時点における自分の体験を思い出していることになる。それは、初めてソウルに行った($7 \div 1$ を計算してみた)時のことかもしれないし、二度目の時のことかもしれない。いずれにしる、ここで、上の t^e の中の特定の部分が設定時として設定されることになる。これは、井上(2001)の言う「問題解決に有効な情報」が見つかった段階の図だと言うことができる。

(388)



(389) t^e =(そういう本が)ある/(7分の1が)循環小数である

t^r =話者によって思い出された体験がなされた時

t^s =発話時

(390) a. あ、そうだそうだ。ソウルは寒かった。

b. あ、そうだそうだ。7分の1は循環小数だった。

このように考えれば、「思い出し」の場合に「タ」が使用されるのは自然に見える。つまり、思い出す前の時点で「覚えていた間」(=情報が有意だった間)に設定時が設定され((385)(386))、思い出した時には、その体験をした時が設定時が設定されて発話がなされる((388)(389))ため、「タ」が使用されるのだと考えることができるだろう。

上で見たように、この設定時は人にその話を聞いた時であったり、本で読んだ時に設定される場合もある。ただ、この場合には、形容詞や状態動詞、特性を表す名詞などは「ンダッタ」の形にする必要がある。

4.4. まとめ

本章では、状態相の時制について、設定時がどこに設定されるのか、という観点から考察を行ってきた。

状態相のテンスについては、これまで、「タ」が話し手の態度を反映するという現象が注目されてきており、この「タ」が表す意味および「タ」という過去時制を表す形態が使用される理由についての考察がなされてきた。後者の点については、最近より詳細な研究が行われてきているが、①それぞれの現象が個別に説明されるにとどまっており、②ムード的でない状態相の「タ」のもつ特徴が十分に踏まえられていないことから、議論の余地が残っていると思われる。このような観点から、本章では、ムード的ではない(ないしはムード的と言にくい)「タ」に関する一般原則の導出から、さまざまなムード的な「タ」をこの原則で説明する、という考察を行った。

まず、本章では、状態相のテンスについて、伝えられる情報が(i)「知識」の場合と(ii)「体験」の場合とに分けられることを見た。その上で、この両者に共通するテンス設定の原則として、情報が有意だと捉えられる期間に設定時(t^r)を設定する、という「情報の有意性の原則」が存在することを主張した。

その上で、この原則に基づき、(a)取り戻しが見つからない場合の「タ」(b)発見、知識修正・補強の「タ」(c)思い出しの「タ」、という3種類のムード的な「タ」について、なぜこれらの場合に「タ」が使用されるのかを説明した。

(a)取り戻しが見つからない場合の「タ」については、運命の分岐点を過ぎた以降は「タ」が使用されるが、これは、運命の分岐点を過ぎることで、当該の情報が有意性を失ってしま

い、設定時が過去になるため、「タ」が使用されると説明した。

(b)発見、知識修正・補強の「タ」のように目の前に当該の状態が存在するにもかかわらず「タ」が使用されるものについては、情報の取得が目的である場合には、情報が取得された時点でその情報が役割を果たして用済みとなり、有意性を失うために、設定時が過去となり「タ」が使用されると説明できることを見た。また、話者が無意識にもっていた誤った想定が修正される場合にも「タ」が使用されることについても、これと同様の原理で説明できる、即ち、誤った想定が修正が済んだ時点で情報が用済みとなり有意性を失うために設定時が過去となり「タ」が使用されるという説明が可能であることを見た。

(c)思い出しの「タ」については、まず、この「タ」を作ることができる述語のタイプを整理する上で、「体験」を伴う思い出しと、そうでない思い出しを区別する必要があることを論じた。その上で、「タ」が使用される理由について、現在は当該の情報を忘れている話者が、その情報を「覚えていた時」(情報が有意であった時)の中から「体験した時」を特定することで、過去の体験時に設定時(t)が設定され、このことで「タ」が使用されるということを見た。

以上のようなことから、「情報の有意性の原則」に基づき、状態相の「タ」のさまざまな振る舞いを、ムード的な「タ」と呼ばれるものについても、そうでないものについても説明ができることを見た。ここでは、この「有意性」が失われるケースに様々なバリエーションがあることから、様々な「タ」の用法があることを説明してきたことになる。

この「有意性が失われケース」についてのより綿密な考察を行うことで、状態相のテンズについてより詳細な記述が可能になると思われる。この点は今後の課題としたい。

第5章

おわりに

5.1. まとめ

本稿では、「テイ」や「タ」といった、アスペクト・テンス形式の用法の中で、非アスペクト的・非テンス的とされるものについて、これをアスペクト・テンスと同じ時間関係の中で説明できることを見てきた。

第2章では、まず、「状態/非状態」の対立、及び「完了/非完了」の対立を表す「テイ」と「過去/非過去」の対立を表す「タ」の組み合わせが表す時間関係を、出来事時(t_e)、発話時(t_s)、設定時(t_r)の3つの時間(t)の組み合わせで記述した。また、「テイ」の有無と「タ」の有無の対立が、時間関係のどの対立に対応しているのかを、時間関係を算定するプロセスを記述することで、明らかにした。「テイ」の対立は、設定時(t_r)の有無の対立に対応しており、「タ」の対立は、発話時の一つ前の時間(t)が発話時(t_s)に先行する関係か否かに対応していることを見た。これにより、「テイ」の有無という1つの形式的対立が「状態/非状態」と「完了/非完了」という2つの意味的対立に対応しているという、対立構造の非対称性の問題を解消した。また、「タ」の有無という形式上の二項対立が「過去/現在/未来」という意味上の三項対立に対応しているという非対称性の問題を解消した。これにより、「時間関係と形態の対応規則」の存在を明らかにした。

第3章では、大きく2つの節に分けて、第2章で求めた時間関係と形態の対応規則に基づき、出来事の把握の間接性とテンス・アスペクト形式との対応関係の背後にある原則として、「間接的把握の原則」の存在を確認した。

第3章前半では、まず、「記録用法」と呼ばれる「テイ」に関する現象が、従来指摘されているよりも広い現象であることを指摘した。例えば、過去の状態を表す名詞文が現在形で表される現象や、過去完了の事態が現在完了の形で表される現象等の存在を確認した。このことから、「記録用法」を「テイ」の一用法という捉え方ではなく、設定時(t_r)の設定原則として捉えるべきであることを見た。そして、「記録・痕跡」から出来事を把握した際に、その記録・痕跡を把握している時に設定時(t_r)が設定される、という原則の存在を確認した。

第3章後半では、人の内的状態を表す場合に使用される「テイ」と人称制限の問題を取り上げ、この問題が従来言われているような、内的状態を表す動詞に限った問題ではなく、通常の動詞にも見られる現象であることを確認した。その上で、これらが様子から出来事が把握された際に、様子の把握時に設定時(t_r)が設定されるという「様子による把握の原則」に基づいていることを見た。

このように、第3章では、「記録・痕跡による把握の原則」と「様子による把握の原

則」という二種類の原則の存在を確認し、これらの原則を「間接的把握の原則」として一般化した。この一般化により、上記2つの原則だけでは説明できる現象に加え、その他の間接的な出来事把握の現象についても説明できることを見た。

第4章では、状態相の時制の決定の背後にある設定時(*tr*)設定の原則について考察し、「情報の有意性の原則」に基づくと考えることで、通常の状態相のテンスとムード的な状態相のテンスの両方を同一の原則から説明できることを見た。ここでは、まず、通常の状態相の文が表す情報の種類を「知識」と「体験」という観点から分類し、それぞれの場合について、どのように設定時(*tr*)が設定され、「タ」の有無が決定されるかを見た。そして、「知識」と「体験」の設定時(*tr*)の設定原則として、情報が有意である期間が設定時(*tr*)として設定されるという、「情報の有意性の原則」が存在することを確認した。その上で、「情報の有意性の原則」がムード的な「タ」と呼ばれる「タ」がなぜ使用されるのかも説明することができることを見た。このようにして、この第4章では、非テンス的と言われる「タ」を通常の「タ」と同一の原則で説明できることをみた。

以上のように、本稿では、非アスペクト的と言われる「テイ」や非テンス的と言われる「タ」について、これらがどのような文脈情報に基づいてどのような意味を表しているのか、という点について考察を行い、これらの意味がなぜ当該の形式によって表されるのかを、「テイ」と「タ」の有無という対立関係を反映した時間関係図に基づき、「時間関係と形態の対応規則」と「間接的把握の原則」及び「情報の有意性の原則」の組み合わせによって説明できることを示してきた。

5.2. アスペクト的な「テイ」と非アスペクト的な「テイ」の接点、テンス的な「タ」と非テンス的な「タ」の接点

アスペクト形式である「テイ」がアスペクトを表していないように見えたり、テンス形式である「タ」がテンスを表していないように見える現象は、言語現象として非常に興味深いもので、本稿では、これらの現象についての考察を行ってきた。ここでは、「テイ」がアスペクトを表すのか否か、という議論や「タ」がテンスを表すのか否か、という議論について、本研究の考察をもとに考察してみたい。

「テイ」や「タ」は、普通アスペクトやテンスを表す概念として考えられている。しかし、実際にこれらの形式が使用されている場面を見ると、「テイ」や「タ」を付加するか否かが、単純に時間概念からだけ決まっているわけではない事例は多く見られる。このようなことから、非アスペクト的な「テイ」や非テンス的な「タ」があるようにも感じられる。ただ、「テイ」を非アスペクト的だと捉えると、今度はアスペクト的な「テイ」があることを説明するのが難しくなり、「タ」を非テンス的だと捉えると、今度はテンス的な「タ」を説明するのが難しくなる。このことから、「テイ」のアスペクト的な意味と非アスペクト的な意味のどちらを本来的な意味と捉えるのか、という問題や「タ」のテンス的な意味と非テンス的な意味のどちらを本来的な意味と捉えるのか、という問題は簡単には解決できないように思える。

本研究では、この問題を解決するために、「設定時の設定原則」という観点から、「テイ」と「タ」を説明するという方法で取り組んできた。設定時は、出来事時との関係においては、「テイ」の有無と関わり、発話時との関係においては、「タ」の有無と関わる。このような点で、設定時はアスペクト形式ともテンス形式とも密接に関係するものだと言える。

また、設定時の設定は、「単なる設定時」としてなされる場合もあれば、話者の視点や態度を反映してなされる場合もある。このうち、前者がアスペクト的・テンス的な意味を生じさせるものであり、後者が非アスペクト的・非テンス的な意味を生じさせるものだと考えることができる。そのように考えれば、重要なのは、アスペクト的/非アスペクト的、テンス的/非テンス的のどちらが本来的な意味で、どちらが派生的な意味か、ということではなく、個々の場合において、設定時の設定動機となっているのは何なのか、という点であるように思われる。この設定時は、場合によっては、会話の流れの中で「単なる設定時」として設定されたり、場合によっては、話者の事態把握や態度などを反映して設定されたりする。

従来は「テイ」の表す意味や「タ」の表す意味を記述する、という研究方法が多かったように思われるが、本稿では、この両者にかかわる「設定時」の設定過程の背後にどのような原則が存在するかを明らかにしていく、というアプローチをとった。

このように「テイ」や「タ」の表す意味を、全て「設定時」という観点から捉えなおすことで、「テイ」はアスペクトか否か、「タ」はテンスか否か、という議論から抜け出し、アスペクト的な「テイ」と非アスペクト的な「テイ」が、テンス的な「タ」と非テンス的な「タ」が共存することを矛盾することなく説明できるのではないかと思われる。これが、本稿で提案してきたことである。

5.3. 今後の課題

本研究で見てきた設定時の設定原則は「テイ」や「タ」の一部を説明するものではあるが、広さという点でも、深さという点でも、まだ発展の余地が多く残されたものだと思う。今後は、より広く、深い観察・分析を行うことで、「テイ」及び「タ」が実際の言語使用の中で、どのような原則に基づいてどのような役割を果たしているのかを、より詳細に記述することができると思われる。このことを、今後の課題としたい。

<参考文献>

- 荒正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」言語学研究会(編)『ことばの科学 3』, pp. 147-162, むぎ書房.
- 庵功雄 (2001) 「テイル, テイタ形の意味の捉え方に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』4, pp.75-94, 一橋大学.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム(編)『「た」の言語学』, pp.97-163, ひつじ書房.
- 井上優 (2011) 「動的述語の二義性について」国立国語研究所(編)『国立国語研究所論集 1』, pp.21-34, 国立国語研究所.
- 井上優・生越直樹・木村英樹 (2002) 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語—」生越直樹(編)『シリーズ言語科学 4 : 対照言語学』, pp.125-159, 東京大学出版会.
- 岩男考哲 (2008) 「述語類型研究史 (国内編)」益岡隆志(編)『叙述類型論』, pp. 163-191, くろしお出版.
- 岩崎卓 (2000) 「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19-5, pp.23-38, 明治書院.
- 岩崎卓 (2001) 「複文における時制」『月刊言語』30-13, pp.50-55, 大修館書店.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって(上)」『教育国語』53, pp.33-44, むぎ書房. (奥田1985に再録, pp.85-104)
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって(下)」『教育国語』54, pp.14-27, むぎ書房. (奥田1985に再録, pp.105-143)
- 奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』 むぎ書房.
- 生越直樹 (1995) 「朝鮮語 hayssta 形, hay issta 形 (hako issta 形) と日本語シタ, シテイル形」『国立国語研究所研究報告集』16, pp.185-206, 国立国語研究所.
- 生越直樹 (1997) 「朝鮮語と日本語の過去形の使い方—結果状態形との関連を中心にして—」国立国語研究所(編)『日本語と外国語との対照研究: 日本語と朝鮮語 (下)』, pp.139-153, くろしお出版.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版.
- 紙谷栄治 (1979a) 「終止用法におけるテンスとアスペクトについて」『国語学』118, pp. 24-35, 国語学会.
- 紙谷栄治 (1979b) 「「た」の特殊な用法について」『京都府立大学学術報告 人文』31, pp.17-30, 京都府立大学.
- 紙谷栄治 (1989) 「テンスとアスペクト」北原保雄(編)『講座日本語と日本語教育 4 : 日本語の文法・文体 (上)』, pp.201-225, 明治書院.
- 金水敏 (1998) 「いわゆる‘ムードの「タ」’について—状態性との関連から—」東京大学国

- 語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会(編)『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, pp.170-185, 汲古書院.
- 金水敏 (2000) 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子(編)『日本語の文法2 時・否定ととりたて』, pp.3-92, 岩波書店.
- 金水敏 (2001) 「テンスと情報」音声文法研究会(編)『文法と音声Ⅲ』, pp.55-79, くろしお出版.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 日本言語学会. (金田一(編) (1976)に再録)
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論文集 X』 (金田一(編) (1976)に再録, pp.29-61)
- 金田一春彦(編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4, pp.51-88, 武蔵大学人文学会.
- 工藤真由美 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会(編)『ことばの科学 3』, pp.53-118, むぎ書房.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト-現代日本語の時間の表現-』 ひつじ書房.
- 国広哲弥 (1967) 『構造的意味論-日英両語対照研究-』 三省堂.
- 定延利之 (1999) 「空間と時間の関係-『空間的分布を表す時間語彙』をめぐって-」『日本語学』18-19, pp.24-34, 明治書院.
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』 大修館書店.
- 定延利之 (2001) 「情報のアクセスポイント」『月刊言語』30-13, pp.64-70, 大修館書店.
- 定延利之 (2004) 「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究』21, pp.1-68, 神戸大学国際文化学部.
- 定延利之 (2006) 「心内情報の帰属と管理」中川正之・定延利之(編)『言語に現れる「世界」と「世界」』, pp.167-192, くろしお出版.
- 定延利之 (2008) 「日本語研究と海外の言語研究のコラボレーション-「た」「ている」をめぐって」『日本語学』27-14, pp.28-38, 明治書院.
- 定延利之 (2010) 「「た」発話をおこなう権利」『日本語／日本語教育』1, pp.5-30, 日本語・日本語教育研究会.
- 鈴木重幸 (1979) 「現代日本語動詞のテンス-終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい-」言語学研究会(編)『言語の研究』, pp.5-59, むぎ書房.
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版.
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能」岩倉具実(編)『言語学と日本語問題』, pp.244-289, くろしお出版. (寺村(1984)に再録,)
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンクタスと意味Ⅱ』 くろしお出版.

- 丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンス-独立文と連体節-」 『人文研究』 48, pp.23-60, 大阪大学.
- 丹羽哲也 (2001) 「連体修飾節のテンスとアスペクト」 『月刊言語』 30-13, pp.57-62, 大修館書店.
- 橋本修 (1995) 「相対基準時節の諸タイプ」 『国語学』 181, pp.15-28, 国語学会.
- 福田嘉一郎 (2002) 「現代日本語の静的述語のテンポラリティについて」 『神戸外大論叢』 53 (7), pp.23-42, 神戸市外国語大学研究会.
- 藤井正 (1966) 「「動詞+ている」の意味」 『国語研究室』 5. (金田一(1976)に再録, pp. 97-116)
- 本多啓 (2009) 「方言文法と英文法 (2) : 宇和島方言の完了形をめぐって」 『駿河台大学論叢』 21, pp.111-132, 駿河台大学.
- 槇野美穂 (2008) 「叙述類型研究史 (海外編)」 益岡隆志(編) 『叙述類型論』, pp. 163-191, くろしお出版.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」 益岡隆志(編) 『叙述類型論』, pp.3-18, くろしお出版.
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』 アルク.
- 松田文子 (1998) 「眼前事態描写における「タ」の機能-過去時への遡りを要請する「タ」-」 『日本語教育』 97, pp.72-82, 日本語教育学会.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説-シンクタスの試み』 刀江書院. (くろしお出版から復刊 (1972))
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」 中右実(編) 『日英語比較選書 7 : ヴォイスとアスペクト』, pp.107-196, 研究社出版.
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」 『日本語科学』 8, pp.54-75, 国書刊行会.
- 森田良行 (2001) 「確述意識を表す「た」」 『月刊言語』 30-13, pp.72-77, 大修館書店.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院.
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究-類型的視点から-』 明治書院.
- 柳澤浩哉 (1992) 「シテイル形式の報告性」 『地域文化研究 広島大学総合科学部紀要』 18, pp.53-74, 広島大学総合科学部.
- Anderson, L. (1982) "The 'perfect' as a universal and language-specific category." In P. Hopper (ed.) *Tense-aspect: Between semantics and pragmatics*, pp.227-264, John Benjamins.
- Binnick, R. I. (2006) "Aspect and Aspectuality" In B. Aarts & A. McMahon (ed.) *The Handbook of English Linguistics*, pp.244-268, Oxford: Blackwell.
- Carlson, D. (1977) Reference to Kinds in English. Ph.D dissertation, University of Massachusetts,

- Amherst. (Published 1980 by Garland Press, New York.)
- Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge University Press, Cambridge. (山田小枝 (1988) 『アスペクト』, むぎ書房)
- Dowty, D. R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Igarashi, Yoshiyuki and Takao Gunji (1998) "The temporal system in Japanese." In Gunji, T. and Hashida, K. (ed.) *Topics in Constraint-based Grammar of Japanese*, pp.81-97, Dordrecht: Kluwer.
- Reichenbach, M. (1947) *Elements of Symbolic Logic*. New York: The Macmillan Company.
- Slobin, D. and Aksu-Koc, A. (1982) "Tense, aspect and modality in the use of the Turkish evidential" In P. Hopper (ed.) *Tense-aspect: Between semantics and pragmatics*, pp.185-200, John Benjamins.
- Smith, C. S. (1991) *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publishers.
- Venlder, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell Univ. Pr., Ithaca.